

藤崎遺跡8

— 藤崎遺跡第20・21次調査 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第338集

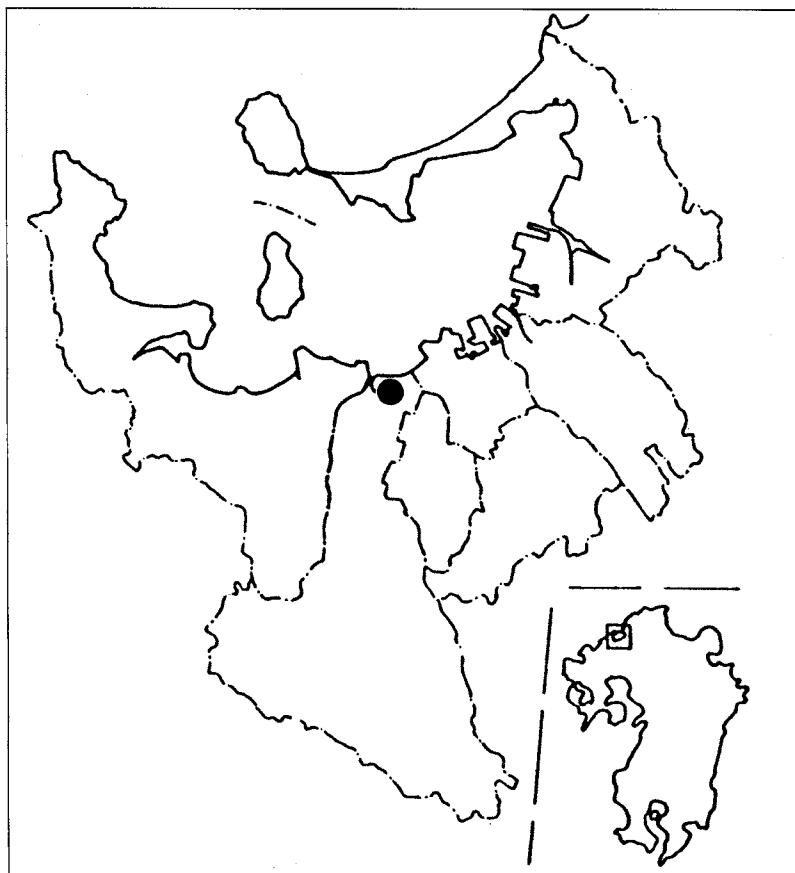
1993

福岡市教育委員会

藤崎遺跡8

— 藤崎遺跡第20・21次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第338集



1993

福岡市教育委員会

序

本市西区の藤崎・西新地区は弥生時代の初めから連綿と集落が営まれ、海に開かれた拠点的な集落として多くの内外の文物を招來した先進的な地域がありました。

都市高速鉄道の開通以来、西の交通・生活の拠点として再開発が活発であり、現在藤崎地区の事前の緊急調査は23次を数えるに至っております。

本市でもこれら失われてゆく遺跡の保存に努めているところであり、本書も記録保存として、民間の共同住宅建設とともに実行された緊急発掘調査の報告書であります。

調査の結果、弥生時代から近世・近代にいたる多数の遺構・遺物が検出されました。

本書が埋蔵文化財に対する理解の一助となるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いります。

調査に際しましては地権者の皆様はじめ多くの方々のご理解とご協力を賜わりました。

心より感謝の意を表する次第であります。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は早良区藤崎に所在する藤崎遺跡地内において民間開発に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成2年・3年に実施した第20次・21次調査の報告書である。
2. 本書で用いる方位は磁北である。
3. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC・掘立柱建物→SB・土壙→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
4. 本書に使用した遺構実測図は、第20次－加藤良彦・黒田和生・英豪之、第21次－山崎龍雄・清原ユリ子・宮原邦江による。
5. 本書に使用した遺物実測図は、第20次－平川敬治・加藤、第21次－山崎による。
6. 本書に使用した写真は、第20次－加藤・平川、第21次－山崎による。
7. 本書に使用した図面の製図は、第20次－木村厚子・国武真理子・加藤・黒田、第21次－山崎・井上加代子による。
8. 本書の執筆編集は、立地と歴史的環境・第20次を加藤が、第21次を山崎が行った。
9. 本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

遺跡の立地と環境.....	1
第20次調査.....	5
1. 調査に至る経過.....	6
2. 調査体制.....	6
3. 調査の記録.....	7
4. 小結.....	31
第21次調査.....	33
1. 調査に至る経過.....	34
2. 調査体制.....	34
3. 調査の記録.....	36
4. 小結.....	64

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/50,000)	2	Fig.21 SK06土層断面(西から)	14
Fig. 2 調査区位置図(1/500)	3	Fig.22 SK06(西から)	14
Fig. 3 20次調査区遠景(東から)	6	Fig.23 SD01(東から)	15
Fig. 4 調査前状況(南から)	6	Fig.24 SD01出土遺物実測図(1/4)	15
Fig. 5 上面遺構全体図(1/200)	8	Fig.25 SE02実測図(1/40)	16
Fig. 6 下面遺構全体図(1/200)	8	Fig.26 SE02遺物出土状況(北から)	16
Fig. 7 西半部上面遺構全景(東から)	9	Fig.27 SE02(北から)	16
Fig. 8 東半部上面遺構全景(東から)	9	Fig.28 SE02井側内(北から)	16
Fig. 9 西半部下面遺構全景(東から)	9	Fig.29 SD04土層断面(東から)	17
Fig.10 東半部遺構全景(東から)	9	Fig.30 SD04(北から)	17
Fig.11 調査区土層断面図(1/80)	10	Fig.31 SE02・SD04出土遺物実測図 (1/3・1/4)	18
Fig.12 各調査区土層柱状図	11	Fig.32 SD04土層断面図(1/40)	19
Fig.13 調査区北壁土層断面(南から)	12	Fig.33 SK11実測図(1/40)	19
Fig.14 調査区南壁土層断面(北から)	12	Fig.34 SD04・SK11(北から)	19
Fig.15 調査区東壁土層断面(西から)	12	Fig.35 近世・近代面(南から)	20
Fig.16 弥生～律令時代遺物実測図(1/4)	12	Fig.36 SK10実測図(1/40)	20
Fig.17 SK05実測図(1/40)	13	Fig.37 SK10遺物出土状況(南から)	20
Fig.18 SK05土層断面(西から)	13	Fig.38 SK10出土遺物実測図(1/4)	21
Fig.19 SK05(西から)	13	Fig.39 SK13実測図(1/40)	23
Fig.20 SK06実測図(1/40)	14		

Fig.40	SK13検出状況(北から)	23	Fig.69	遺構面出土遺物 2 (1 / 3)	58
Fig.41	SK13出土遺物 (1 / 4)	23	Fig.70	遺構面出土遺物 3 (1 / 3)	59
Fig.42	SD08・09(北から)	24	Fig.71	包含層出土遺物 1 (1 / 4)	61
Fig.43	SD08土層断面(南から)	24	Fig.72	包含層出土遺物 2 (1 / 3)	62
Fig.44	SK08土層断面図 (1 / 40)	24	Fig.73	包含層出土遺物 3 (1 / 3)	63
Fig.45	SD08出土遺物実測図 (1 / 4)	25	Fig.74	その他の遺構出土遺物 (1 / 3)	64
Fig.46	SD08・09出土遺物実測図 (1 / 4)	26	Fig.75	土錘法量相關グラフ	66
Fig.47	表土出土遺物実測図 (1 / 4)	28	Fig.76	第1面調査区全景(南から)	67
Fig.48	出土遺物・1	29	Fig.77	調査区西壁土層(東から)	67
Fig.49	出土遺物・2	30	Fig.78	SD1001・1017(東から)	68
Fig.50	第1面全体図 (1 / 150)	35	Fig.79	SK1011(南東から)	68
Fig.51	調査区西壁土層 (1 / 60)	37	Fig.80	SP1036遺物出土状況	68
Fig.52	SK1011 (1 / 40)	38	Fig.81	SP1011遺物出土状況(南東から)	68
Fig.53	第1面土壙出土遺物 (1 / 4・1 / 3)	39	Fig.82	第2面調査区全景(東から)	69
Fig.54	第1面溝出土遺物 1 (1 / 4)	41	Fig.83	SC2005(北西から)	69
Fig.55	第1面溝出土遺物 2 (1 / 3)	42	Fig.84	SK2001(北から)	70
Fig.56	第2面全体図 (1 / 100)	45	Fig.85	SK2002(西から)	70
Fig.57	SC2005 (1 / 60)	47	Fig.86	SK2006(西から)	70
Fig.58	SC2005出土遺物 (1 / 4・1 / 3)	47	Fig.87	SK2004(西から)	70
Fig.59	第2面出土土壙 (1 / 40)	48	Fig.88	SP2002遺物出土状況	70
Fig.60	第2面土壙出土遺物 (1 / 4・1 / 3)	49	Fig.89	第3面調査区全景(南から)	71
Fig.61	第3面全体図 (1 / 100)	50	Fig.90	SB3007・3008(東から)	71
Fig.62	SB3007・3008 (1 / 100)	51	Fig.91	SK3003(西から)	72
Fig.63	SB3008出土遺物 (1 / 4)	52	Fig.92	SK3005(北から)	72
Fig.64	第3面出土土壙 (1 / 40)	53	Fig.93	SK3004・3011(西から)	72
Fig.65	第3面土壙出土遺物 (1 / 4・1 / 3)	54	Fig.94	SP3031(西から)	72
Fig.66	SP3031 (1 / 20)	54	Fig.95	住居址・土壙出土遺物	72
Fig.67	ピット出土遺物 (1 / 4・1 / 3)	55	Fig.96	土壙・溝・ピット出土遺物	73
Fig.68	遺構面出土遺物 1 (1 / 4)	57	Fig.97	ピット・包含層・遺構面出土遺物	74

表 目 次

表、 1	第20次調査遺構一覧表	32
表、 2	出土土錘一覧表	65
表、 3	藤崎遺跡各調査地点出土漁撈具一覧表	66

遺跡の立地と環境

藤崎遺跡は福岡市の都心部より西へ5km、埋め立てにより遠くなってしまったが、博多湾岸から1.5kmの地点、藤崎・高取・百道地区の東西400m、南北650mの範囲に広がっている。

早良平野の東北端の湾岸部に位置し、標高5～6mの砂丘上と南側後背斜面に立地している。博多湾南岸には東区箱崎から博多区呉服町・中央区天神・早良区の該区へと分布する海浜砂および風成砂からなる新砂丘^註が発達しており、本遺跡も縄文晩期以降に形成されたこの砂丘上に立地している。この砂丘の背後には皿山（標高29m）・龜原山（標高32m）等の第3紀の独立丘陵がせまり、これらの南側には後背の低地が広がっている。文献では龜原山の東側に慶長年間まで塩浜が作られていたことが記されている。

藤崎遺跡では今まで22次の調査が行われており、地下鉄やバスター・ミナル等、砂丘陵線部を中心に弥生前期初頭から古墳時代前期にかけての甕棺墓・土壙墓・石棺墓・方形周溝墓等の墳墓を中心に検出しており、三角縁二神龍虎鏡・三角縁二神二車馬鏡・方格渦文鏡・珠文鏡・変形文鏡・素環頭大刀を供伴している。古墳時代後期には1・3・9・15・18次調査地点で住居址が検出されており、西部に散漫に集落が広がっている様である。出土品が管状土錘等漁撈具が多く漁業を主とするものと思われる。古代から中世にかけては井戸・溝・土壙等が検出されており、3次調査地点で7～8世紀代の土器溜り・中国製青磁等を副葬した土壙墓が検出され、遺跡群中央の独立丘陵北側の8・10～12・14次調査地点とこの西側の15～18次調査地点ではそれぞれ、直線的に延びる溝と直角に屈曲し内側に柵列を設ける13世紀代の溝が検出されており元寇との関連が示唆されている。

周辺の砂丘上では、藤崎遺跡の東側500m程の同じ砂丘上に西新町遺跡が立地する。弥生終末期の土器型式として設定された「西新町式土器」の標式遺跡である。藤崎遺跡同様、共同墓地として弥生中期の29基と後期の1基の甕棺墓が検出され、ゴホウラ製貝輪3個・銅剣先・ガラス製小玉を副葬している。墓地と関連する集落は藤崎同様確認されていない。弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居址多数が検出されており、朝鮮半島系土器・山陰系・畿内系等内外の多数の外来土器が検出されており海洋交易の拠点集落としての様相が窺える。

藤崎遺跡から室見川をはさんで西側につらなる砂丘上に姪浜遺跡群がある。同じく弥生時代中期から後期にわたる40数基の甕棺墓が検出され、棺外副葬の可能性が高い石剣1点が検出されている。

姪浜の砂丘の南側には藤崎同様、第3紀の独立丘陵が有り、ここに古墳時代前期の五島山古墳が立地する。1914年（大正3年）に丘陵最頂部の円墳から箱式石棺が見つかり、2面の二神二獣鏡をはじめ銅鏡・鉄剣・玉類の副葬品が出土している。



- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 藤崎遺跡 | 2. 羽根戸遺跡 | 3. 吉武遺跡群 | 4. 有田遺跡 |
| 5. 四箇遺跡群 | 6. 湯納遺跡 | 7. 田村遺跡群 | 8. 拾六町ツイジ遺跡 |
| 9. 岩本遺跡 | 10. 野方中原遺跡 | 11. 野方塚原遺跡 | 12. 野方勧進原遺跡 |
| 13. 野方柳原遺跡 | 14. 飯盛谷遺跡 | 15. 宮の前C地点 | 16. 重留遺跡群 |
| 17. 拝(灰)塚古墳 | 18. 五島山古墳 | 19. 西新町遺跡 | 20. 羽根戸南古墳群 |
| 21. 羽根戸古墳群 | 22. 金武古墳群 | 23. 野方古墳群 | 24. 広石古墳群 |
| 25. 城の原廃寺 | 26. 石丸・古川遺跡 | 27. 下山門敷町遺跡 | 28. 犀多田遺跡 |
| 29. 斜ヶ浦瓦窯跡 | 30. コノリ古墳群 | 31. 高崎古墳群 | 32. 広石遺跡群 |
| 33. 笠間谷古墳群 | 34. 梅林古墳 | 35. 東入部遺跡 | |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 /50,000)

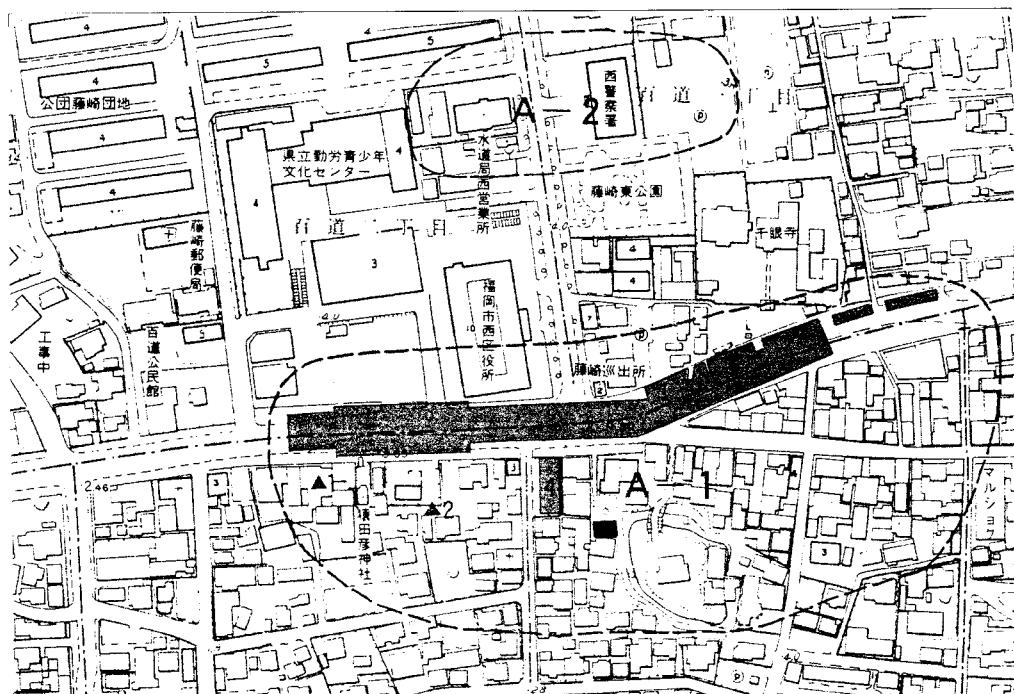


Fig. 2 調査区位置図 (1 /500)

藤崎・西新遺跡の北側250m程の東西方向に1276（建治2）年築かれた元寇防塁があり、鎌倉時代の汀線を示している。

註)「福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層」 下山正一 九州大学理学部
研究報告『地質学』第16巻 第1号 別冊 平成元1月

第 20 次 調 査



調査番号 9014

遺跡番号 FUA-20

1. 調査に至る経過

平成元年9月30日、早良区高取2丁目173番3地内における共同住宅建設に伴う事前審査願いが地権者より提出され、これを受け埋蔵文化財課において同年10月19日試掘調査を行った。結果、表土下70cmの砂層上面で遺構を検出、遺跡の存在を確認した。

その後申請者と協議を重ねた結果、申請者の費用負担で発掘調査による記録保存を行う事となった。調査は平成2年5月23日から同7月4日まで実施された。調査面積は185m²である。

調査番号	9014	遺跡略号	FUA-20
調査地地籍	早良区高取二丁目173番3号	分布地図番号	81-A-1
開発面積	273m ²	調査実施面積	185m ²
調査期間	900523~900704	事前審査番号	1-2-202



Fig. 3 20次調査区遠景（東から）



Fig. 4 調査前状況

2. 調査体制

調査委託：吉田雅昭

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝（当時） 埋蔵文化財課第2係長 柳沢一男

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 松延好文

調査担当：埋蔵文化財課第2係 加藤良彦

調査協力：百武義隆 黒田和生 英豪之 門司弘子 金子由利子 松尾鈴子 柴田常人
舍川春江 松井フユ子 松尾キミ子

資料整理：平川敬治（九州大学） 窪田慧 木村厚子 国武真理子 能美須賀子

3. 調査の記録

1. 調査の概要

本調査区は藤崎遺跡の中央部、東西に延びる砂丘の南緩斜面と独立小丘陵の西斜面とが接する位置にある。

周辺では第1次・2次・10次・13次調査が実施されており、弥生時代から近世に及ぶ甕棺墓・方形周溝墓・溝・豎穴住居址などが検出されている。

本調査区の旧状は宅地で、地表の標高は3.5m。土層断面 (Fig.11) は表土下35cmまでが近・現代の造成土 (1・2層)。50cmまでが暗黄褐色砂質土の客土層で高取焼関係の遺物を検出する遺構の多くはこの上面から掘削されている。80cmまでは暗褐色砂質土 (4層)・黒褐色～黒灰色砂質土 (5層) の包含層で、大部分の遺構は5層の上面から中位にかけて掘削されており、4層が中・近世、5層が古墳時代後期～中世の包含層と考えられる。調査の上面の遺構検出は5層の下面で行っている。95cmまでは黄灰色の砂岩角礫を多く含む砂質土の客土層 (6層) で東側の風成層の上面から西側の低地部の一部にかけて5～20cm程の盛土がなされている。東側の独立丘陵を削平し、谷部を浅く埋めたものと思われ、客土下と客土上層の検出遺物で共通する上限の遺物はⅦ期の須恵器であり、7世紀後半～末にかけての地業と思われる。西の低地は客土下に140cmまで淡灰褐～淡灰色砂質土 (11・12層) で縦方向に細かな植物による土壤化が見受けられる。110～150cmまでは暗黄灰～暗灰色の風成砂層 (7層) で下面の遺構検出はこの上面で行っている。以下195cmまでは黄灰～明灰色砂の湿地堆積層 (8層) で鉄分・マンガンが多く沈澱し、炭粒を含む。斑状に暗褐～暗黃灰色砂質土のブロックが有り、植物の土壤化によるもので湿地の様相を示している。この上面で採取した炭粒のC¹⁴測定を行っており2,370±70y、B・P (GaK-15080) の年代を得ており砂丘形成開始期を示している^註。270cmまでは灰～赤褐色粗砂の河性堆積層で北東から南西に傾斜している。以下は花崗岩・砂岩礫の礫浜となっている。

検出した遺構は古墳時代後期の土壙3基・溝2条、平安時代末～鎌倉時代の井戸1基・溝1条、近代の土壙6基・溝3条を検出している。

遺物は包含層及び遺構から弥生時代中期から近世・近代までの遺物をコンテナ10箱分検出した。9割以上を高取焼関係の窯道具・焼損品が占めており、調査区東側の独立丘寄りの部分に集中している。

註) 土層の観察とC¹⁴測定は西南大学磯望助教授と九州大学理学部下山正一両氏に御願いした。詳報は平成5年度刊「藤崎9」に記載予定である。

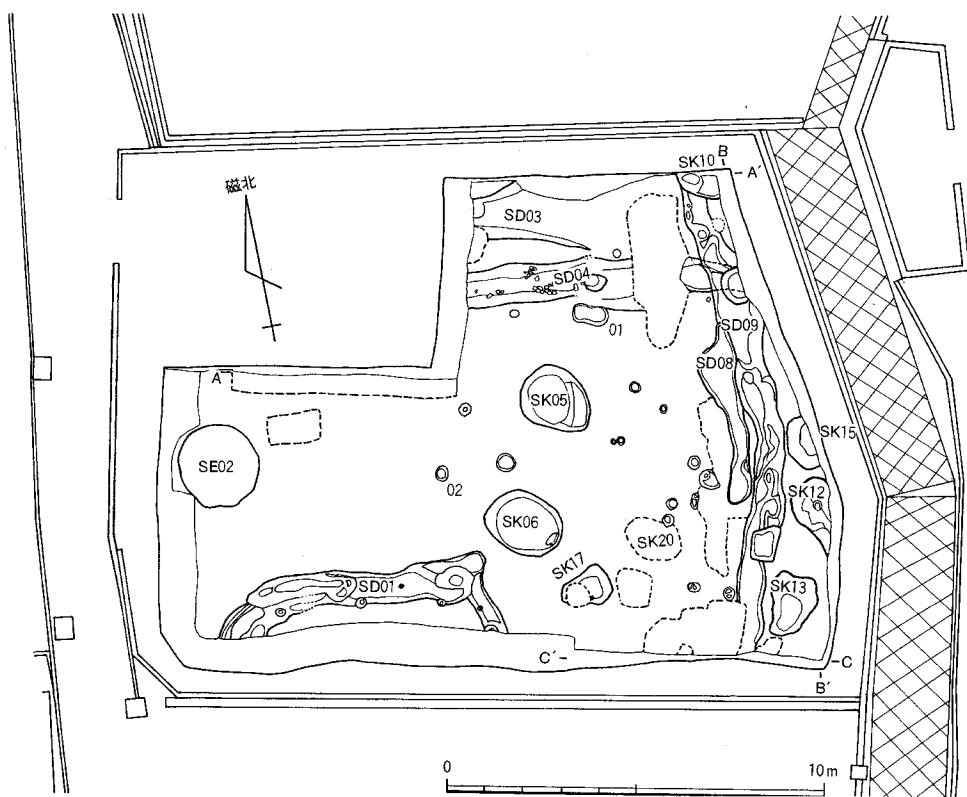


Fig. 5 上面遺構全体図（1 / 200）

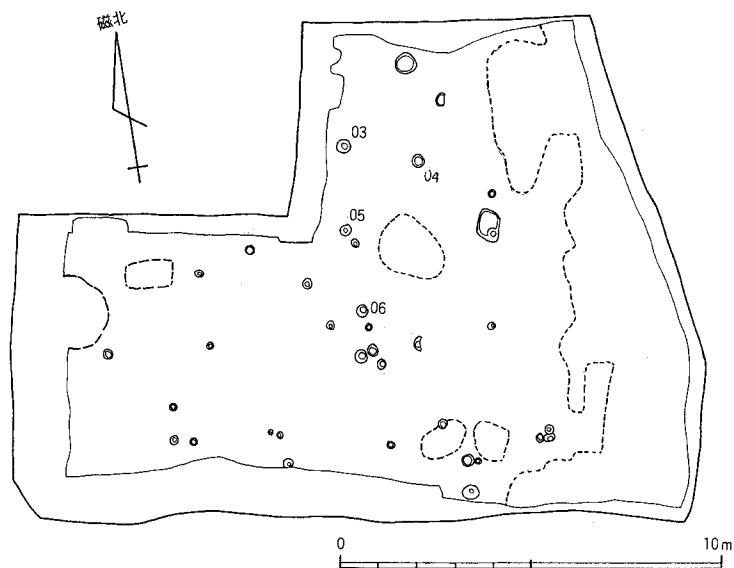


Fig. 6 下面遺構全体図（1 / 200）



Fig. 7 西半部上面遺構全景（東から）



Fig. 8 西半部下面遺構全景（東から）



Fig. 9 東半部上面遺構全景（東から）



Fig. 10 東半部下面遺構全景（東から）

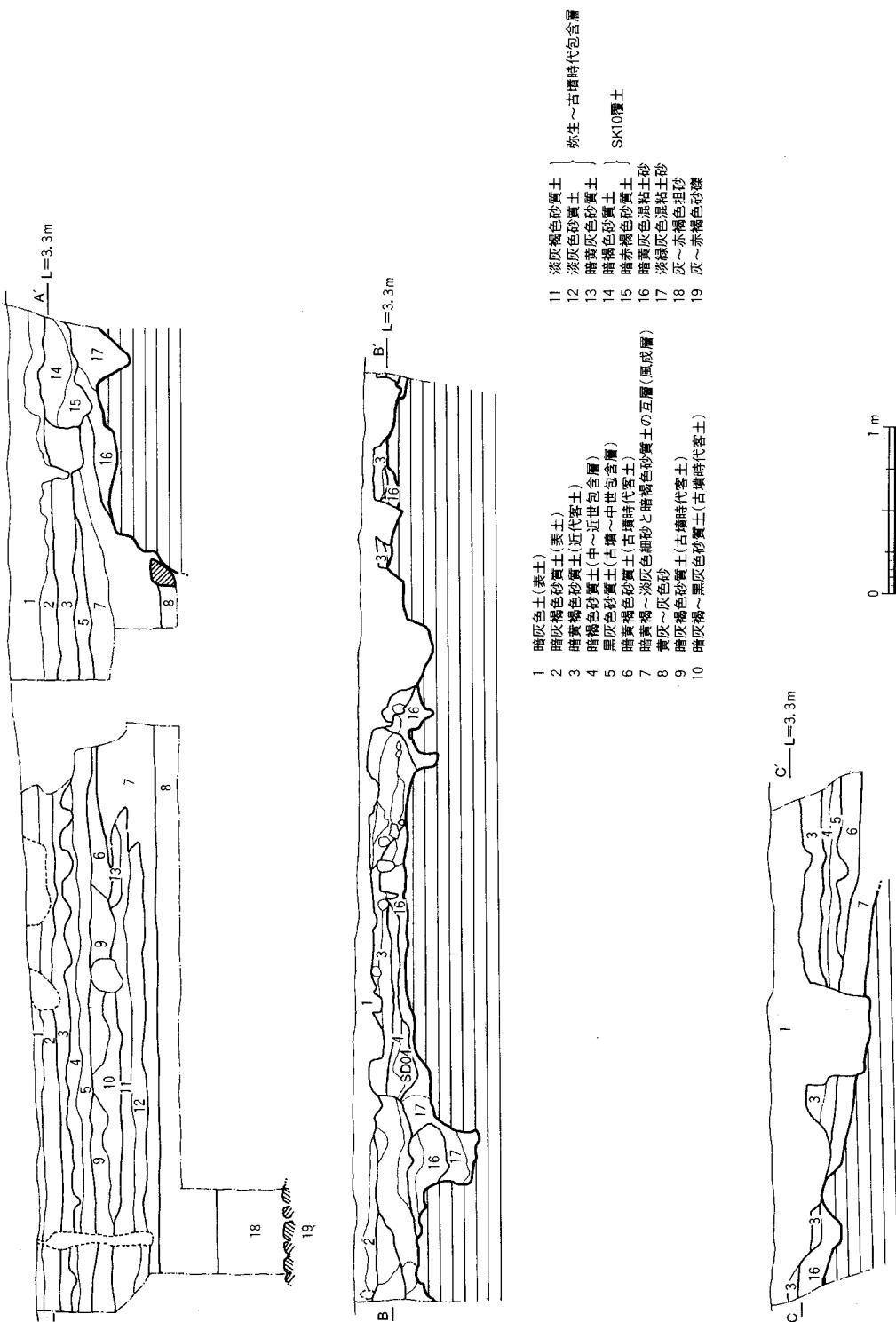


Fig.11 調査区・土層断面図 (1 /80)

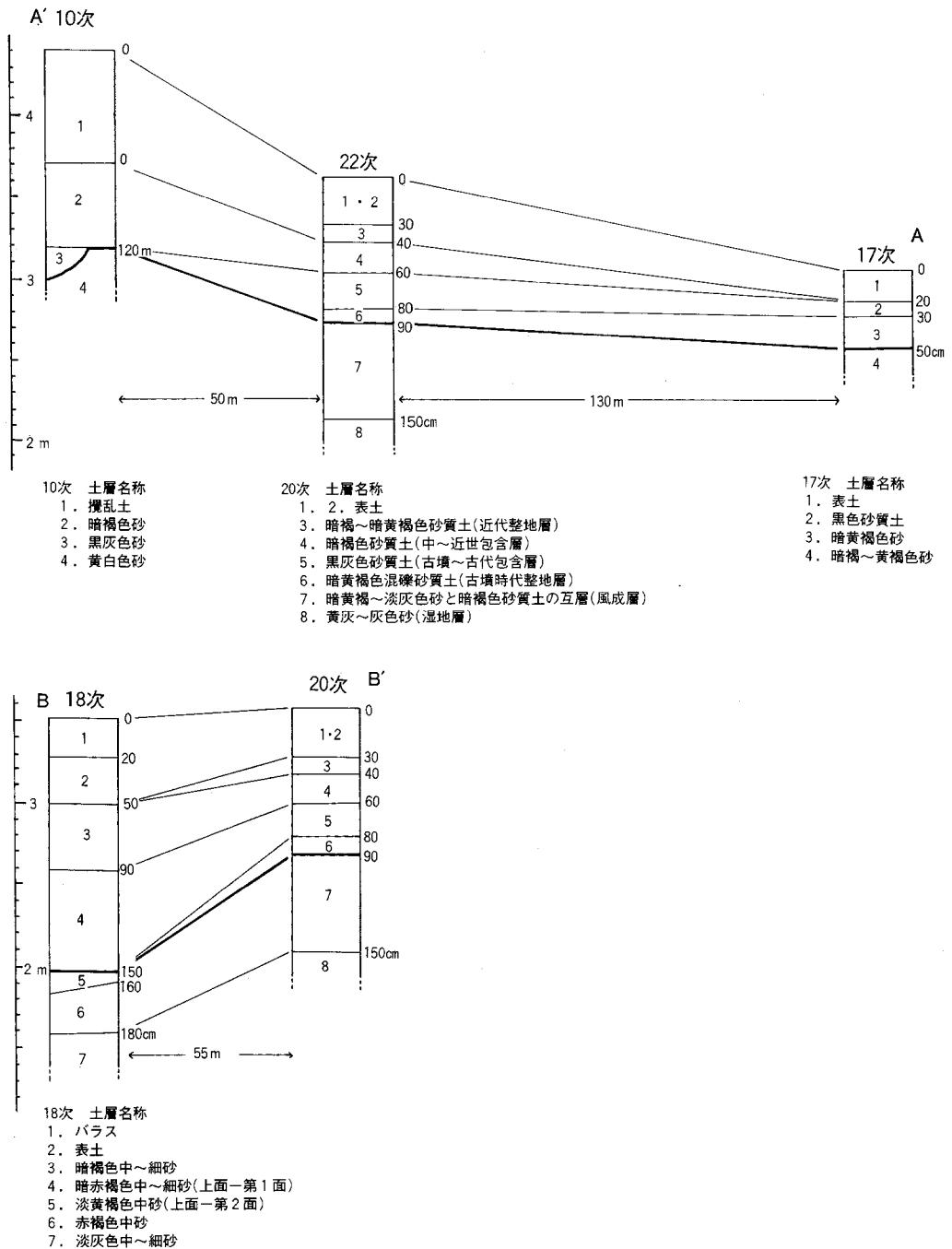


Fig.12 各調査区土層柱状図



Fig.13 調査区北壁土層断面（南から）



Fig.14 調査区南壁土層断面（北から）

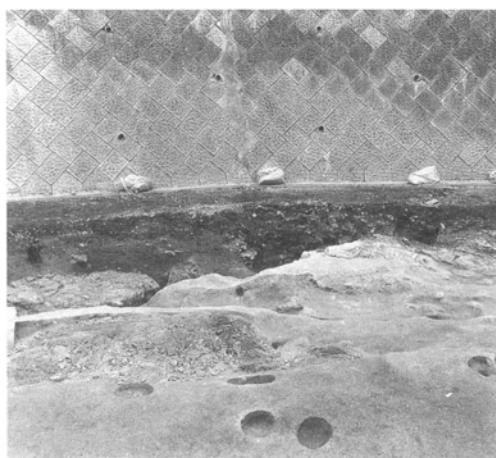


Fig.15 調査区東壁土層断面（西から）

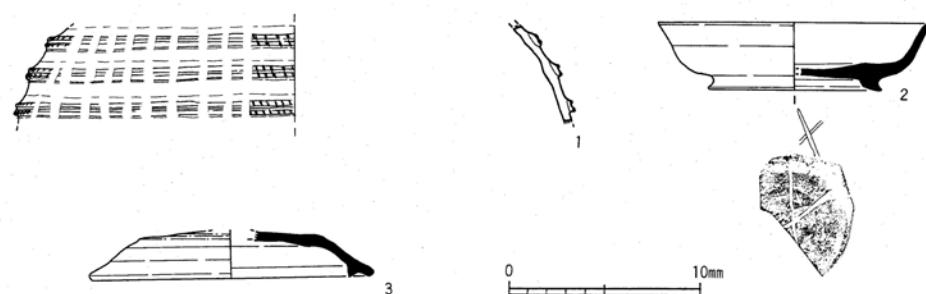


Fig.16 弥生～律令時代建物実測図（1/4）

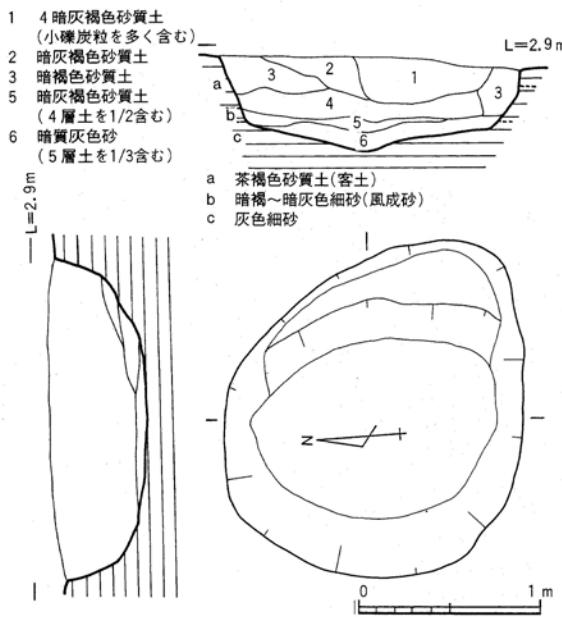


Fig.17 SK05実測図 (1/40)

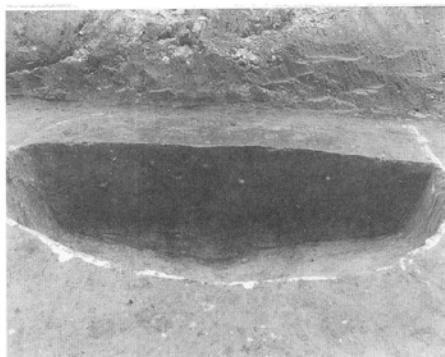


Fig.18 SK05土層断面 (西から)



Fig.19 SK05 (西から)

2. 弥生、古墳時代の調査

該期の遺構は7世紀後半～末の整地層 (Fig.11・6層) と整地層下の柱穴 (Fig.6) 整地層上の土壙32基と溝2条 (Fig.5) で、上記の遺構以外では遺物は整地層上下の包含層・他の遺構に混入して検出されている。

出土遺物 (Fig.16)

1はSD04出土の弥生土器丹塗り壺の胴部で複合の刻目突帯を3条巡らす。2は表土層から出土した須恵器高台壺で復原口径14.5cm、高台先端が強く外反する。外底部にヘラ記号が有る。3はSE02出土の須恵器壺蓋で、復原口径15cmを測る。

かえりは口縁部から下方に突出しない。天井部は右回転のヘラケズリが施される。

土壙 SK05 (Fig.17～19)

調査区のほぼ中央に位置する $1.65 \times 1.9\text{ m}$ の不整形の土壙で深さ50cm。整地層上面からの掘削である。内部から須恵器のⅦ期の壺・壺蓋・甕と土師器の小片を検出しているが図化不能である。

土壙 SK06 (Fig.20～22)

SK05の南側に位置する $2 \times 1.6\text{ m}$ の楕円形で深さ25cmと浅い。

遺物はⅦ期の須恵器壺と土師器の小片を検出しているが図化に湛えない。

溝 SD01 (Fig.5・23)

調査区南西側で検出され、低地部の11・12層に掘りこまれている。覆土は黒灰色土。調査区に並行して東西に7m程延び、両端が南に屈曲して区画している様であるが、大半が調査区外であり全容は明らかでない。幅45～120cm。深さ20cmを測り、比較的浅い。

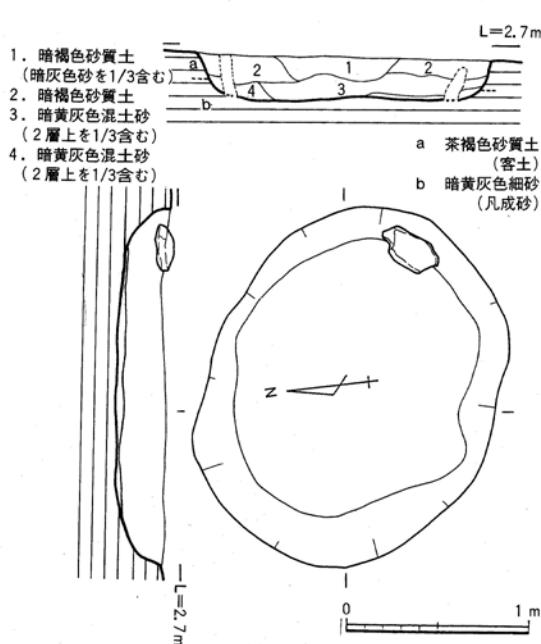


Fig.20 SK06実測図 (1/40)

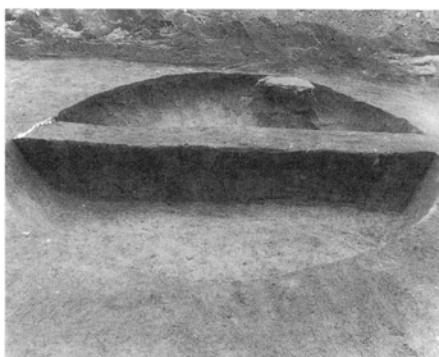


Fig.21 SK06土層断面 (西から)

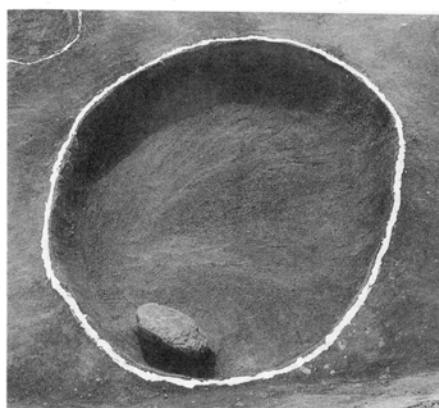


Fig.22 SK06 (東から)

出土遺物 (Fig.24)

遺物は比較的多く、須恵器壺・壺蓋・高台壺・甕・土師器甕・甌・砥石片・鉄滓を1点検出している。

4は須恵器壺蓋で口径15.2cm・器高3.8cm、宝珠つまみを有しかえりを持つ。かえりは口縁より若干突出する。天井部は回転ケズリ後ナデ。ヘラ記号が見受けられる。5～7は管状土錘で5点検出している。全てゆるい紡錘形を成すもので、両端部の上方に繩かけによる欠落が見られ、長軸と直交方向の外面に多数の擦痕がある。洩き綱漁に用いられたと考えられる。5は全長7.7・径2cmで孔径7mmで直線的である。重量28g。6は全長7.3・

径2.2cmで孔径7.5mm・重量30g。7は全長7.6・径2.4cmで孔径7.5mm・重量30g。7は全長7.6・径2.4cmで孔径7mm・重量37g。

SD03 (Fig. 5)

調査区北東端部で検出され、調査区に並行し (N-110°-E) に方位をとる。幅70～150cmと東に広がり深さ25cmで東端部は上がっている。

出土遺物は須恵器甕・土師器の小片のみである。

包含層の遺物 (Fig.24)

整地層 (6層) 及び上下の包含層 (9・10・11・12層) より殊に9・10層から比較的多くの遺物を検出している。

図化に湛えるものは全て9・10層出土である。8は須恵器壺で口径11cm・器高3.3cmで外底部は右回転のヘラケズリ後3本単位のヘラ記号を刻んでいる。9は土師器甕の胴部小片で外面は木目直交の平行叩き、内面はナデ調整。10は軟質土器系の土師器甕の胴部で外面は木目直交の叩き、内面には平行弧線の当て具痕が残る。11～17は管状土錘で23点検出

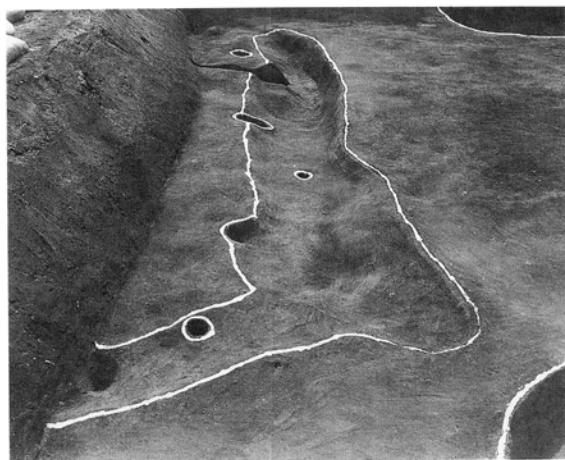


Fig.23 SD01 (東から)

している。いずれも漁網用の土鍤で外面に直交方向の多数の擦痕が残る。11は $6.7 \times 1.9\text{cm}$ で 18g 、12は $8.5 \times 2\text{cm}$ で 28g 、13は $8.5 \times 2\text{cm}$ で 30g 、14は $8.7 \times 2.2\text{cm}$ で 28g 、15は $8 \times 2\text{cm}$ で 20g 、16は $8 \times 2\text{cm}$ で 30g 、17は $7.5 \times 2.2\text{cm}$ で 32g を測る。

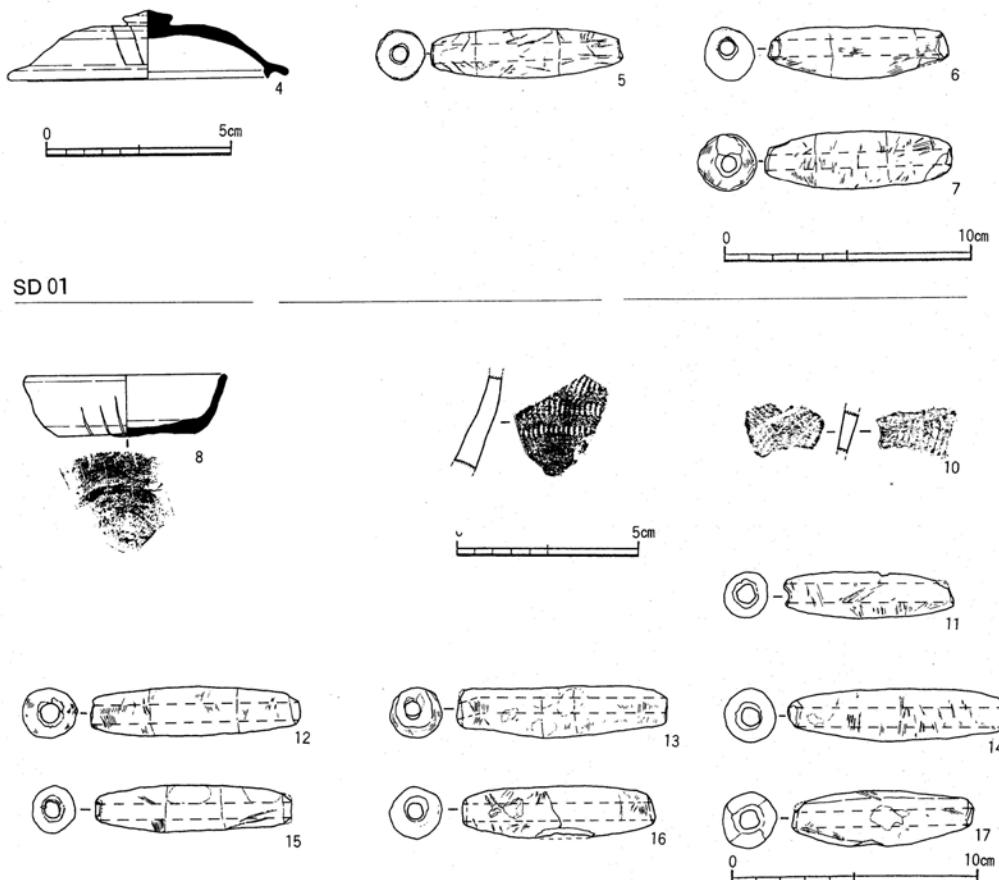


Fig.24 SD01包含層 2層出土遺物実測図 (1 / 3、1 / 4)

3. 古代末～中世の調査

包含層4層の暗褐色砂質土中位～下面にかけ
掘り込まれたもので、該期の包含層として藤崎
遺跡の南後背斜面では通有の層である。

遺構としては井戸1基・溝1条と柱穴を検出
している。

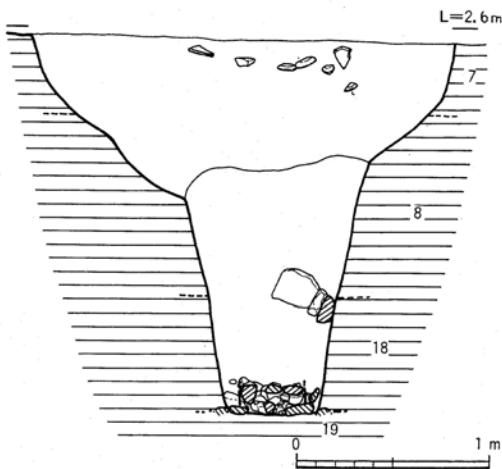
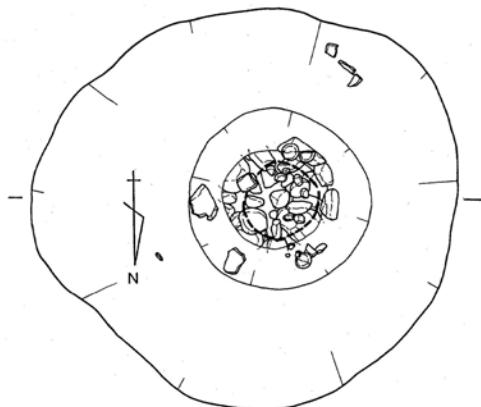


Fig.25 SE02実測図 (1/40)



Fig.26 SE02遺物出土状況 (北から)

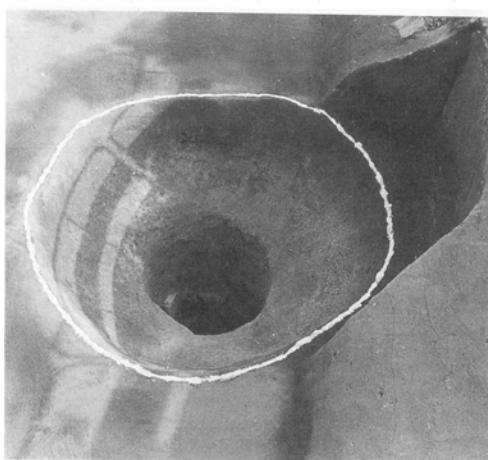


Fig.27 SE02 (北から)



Fig.28 SE02井側内 (北から)

井戸 SE02 (Fig.25~28)

調査区西端部で検出されたもので、掘方は円形で東西2.2m・南北2.1m・深さ80cmと、径90cm深さ1mの二重の掘方となっており、底は礫層に達している。底面上に径50cm・幅1cm程の腐植土が見受けられ、井筒に桶か曲物を使用したと考えられる。井筒底には10cm程の礫を敷いている。底面から50cm程上位に扁平な礫が3個掘方の壁に接して並んでおり、井筒の裏込めと考えられる。遺物は上位の暗灰褐色土中に集中している。

出土遺物 (Fig.31)

遺物は大半が上位からの出土で、中国製青磁碗・皿・土師器皿に古墳時代の須恵器・土師器・土錘が混入している。

18は青磁の碗で口径17.5cmを測り口縁が短く屈曲して外反する。外面には巾広の櫛歯状の縦位の条線が刻まれ、釉は体部中位までかかる。釉は明緑灰色の透明釉で、露胎部は橙色を呈する。胎土はやや粗く亀裂状の気泡が目立つ。19は同安窯系の青磁皿で口径10.2cm。釉は灰オリーブの透明釉で外底部以外にかけられ氷裂が入る。内底部には櫛歯文様が施される。口縁はゆるく外反する。20~23は土師器皿で、外底は全て糸切りで板圧痕が明瞭に残る。20は口径9.3・器高1.2cm、21は口径8.5・器高0.5cm、22は口径8.4・器高1cm、23は口径8.4・器高1.1cmで体部がゆるく内湾するものと外湾するもの(23)とが有る。24は管状土錘で全長8・径2.1cmで重量20g。

SD04 (Fig. 5・29・30・32)

調査区北東部でSD03の南側で東西方向に検出された。方位をN-95°-E にとる。幅70~130cmと西側に広がっている。深さ50cmで断面は逆台形を呈する。暗褐色砂質土の4層下面からの掘削である。覆土は最下に暗灰色混土砂、上に暗褐~黒灰色砂質土がレンズ状に堆積する。

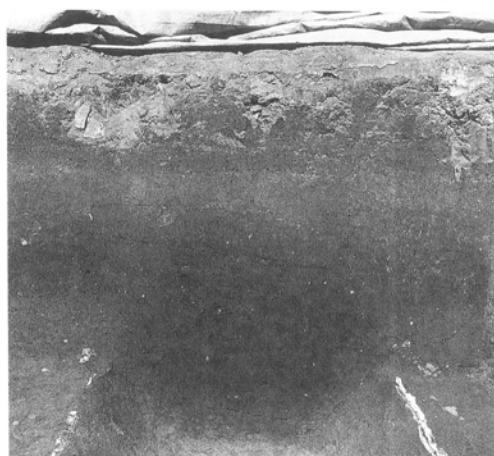


Fig.29 SD04土層断面（東から）

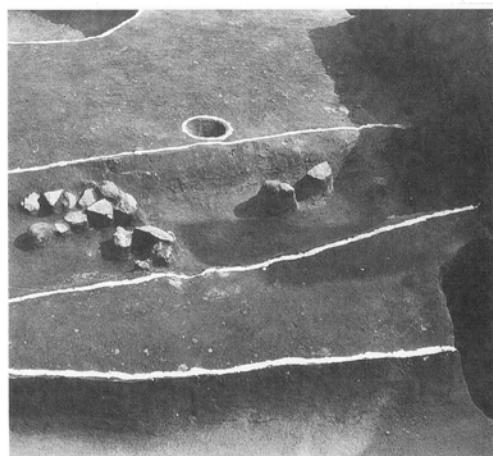


Fig.30 SD04 (北から)

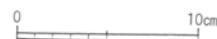
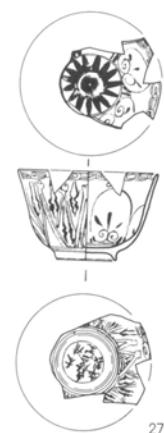
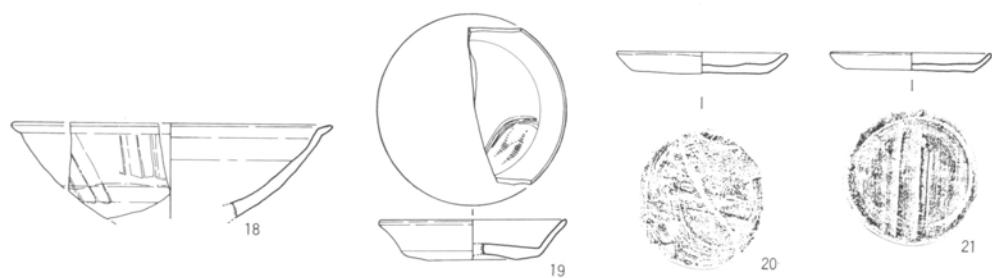


Fig.31 SE02・SD04出土遺物実測図（1/3・1/4）

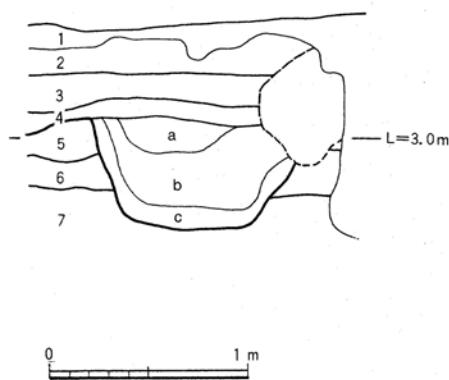


Fig.32 SD04土層断面図 (1/40)

出土遺物 (Fig.31)

遺物は上層を中心に白磁碗・土師器壊・皿の小片に須恵器・土師器・弥生土器等が混入している。

25は端反りの白磁碗で底面の砂層から出土。口径16cmで明緑灰色の透明釉を内面から外面体部の2/3まで施釉する。胎土は灰白色で黒色微粒子を若干含む。

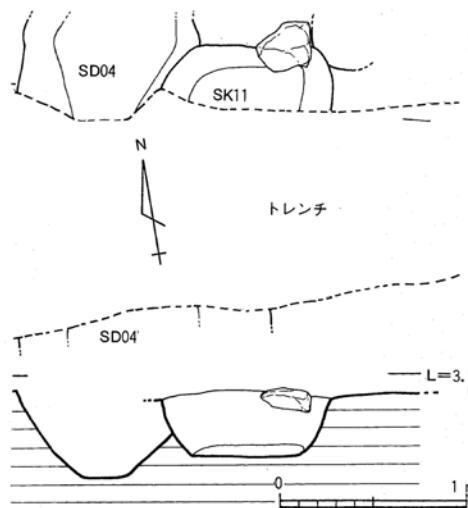


Fig.33 SK11実測図 (1/40)

4. 近世・近代の調査

地表下40cm程の位置に調査区全面にわたって厚さ20cm程の客土層が広がっている。調査時には試掘の結果から地表から70cm程は近世～現代の整地層として重機により掘削して処理したが丘陵際で多くの高取焼関係の遺物を多数伴出する遺構が残っていた。客土下面は幅30～40cmの畝状の高まりが有り、整地以前は畑地として利用されていた様である。遺構は全て高取焼関係の明治22年以降のものと思われ、明確な近世遺構は残っていない。遺構は客土層上下両面にわたっており、土壙6基・溝3条を検出している。

土壙 SK11 (Fig.33・34)

調査区北東側の客土下からの検出で、SD04を切っている。幅1m・深さ30cm程の不整円形で大半をトレンチに切られる。遺物は清青花碗1点と高取焼の擂鉢や甕等の陶器と瓦質火舍・土師質七輪・窯道具等を多く検出している。

出土遺物 (Fig.31)

26は瓦質の火舍で口径20.3・器高21cmを測る。一方に風呂が大きく切られ、対面に径1.8cm



Fig.34 SD04・SK11 (北から)

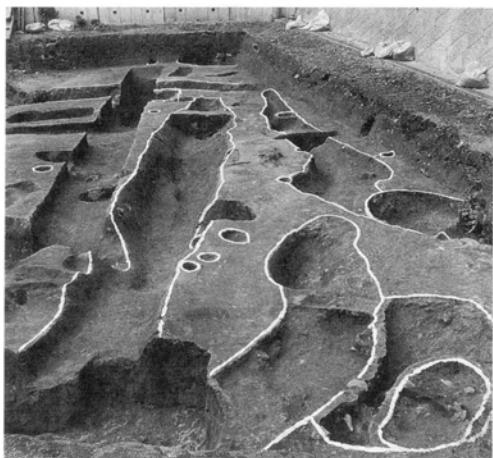


Fig.35 近世・近代面（南から）

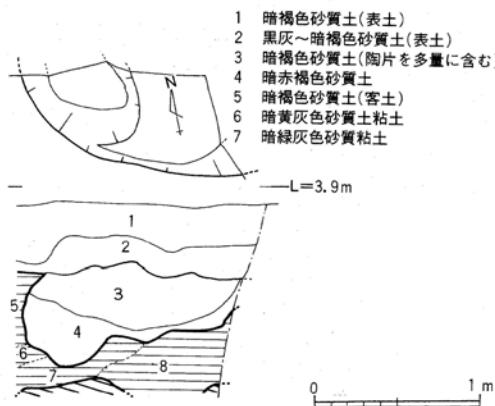


Fig.36 SK10実測図（1/40）



Fig.37 SK10遺物出土状況（南から）

の穿孔が有る。胴部中位にスタンプによる宝相華文が連続し施文される。口唇内面に三角の粘土塊を貼った受けが3ヶ所有り、タール状の炭化物が付着する。27は清代青花碗で復原口径7.6・器高4.8cmを測る。口唇内外に呉須で流雲文・外面と内面体部に蓮弁文を内底部に菊花文を描いている。外底には「太清乾隆乙未年製」とある。器壁は薄く胎土は白色で精良。

SK10 (Fig.36・37)

調査区北東隅に位置し、全体の1/4程度の検出で大半は調査区外に広がっている。残存幅で1.1m・深さ55cmで上部の暗褐色砂質土中に多量の高取焼の焼損品・窯道具を包含している。廃棄物処理用の土壤である。

出土遺物 (Fig.38)

出土した遺物は混入の白磁皿と青磁皿、高取焼の甕・灯明皿・油壺・擂鉢等ひずみや焼付の焼損品の陶器とハマ等の窯道具でハマは19点検出している。

28は柳描文を施す中国産の白磁皿で混入品。口径13.5cmを測る。黄オリーブ色の透明釉を施し氷裂が入る。胎土は灰白色で精良。29は肥前系の白磁皿で焼け歪みが著しい。口径14・器高2.1~2.5cm。釉は明緑灰色で厚く全釉され、内面に蛇ノ目カキ取がなされている。胎土は灰白で黒色微粒を多く含む。30も肥前系の輪花白磁皿で口径15.6・器高4cmを測る。全面に明緑灰色の釉を全面にかけ、内底に蛇ノ目カキ取りがなされ、置付は砂敷がなされ焼き付いている。胎土は白色で精良。31は型成形の手塙皿で13×6.5cm深さ2.5cmの舟形の内面に魚文様が陰刻で打ち出されている。釉は茶色の飴釉を全面に施し外底面はケズリ取る。内面と口縁外面までに

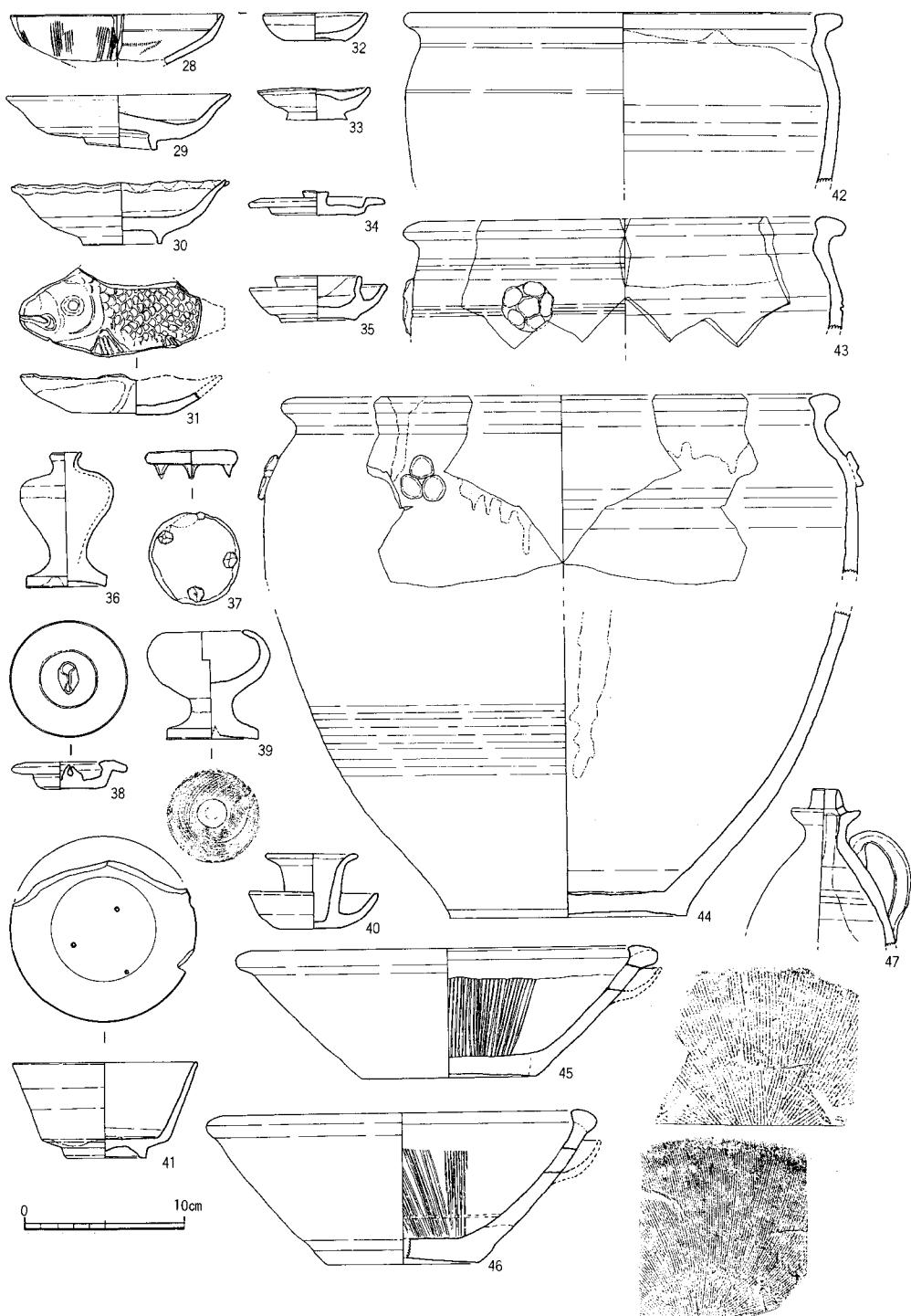


Fig.38 SK10出土遺物実測図 (1 / 4)

灰白不透明の藁灰釉を施す。32・33・35・40は灯明皿で、32は口径6.6・器高1.9cmで内面口縁下に灰白色の藁灰釉を施す。胎土は淡黄色で精良。33は口径6.5～7cm・器高2cmでベタ高台を削り出す。釉は暗赤褐色の飴釉を内面から外面体部2/3までかける。35は口径8.7・5.5cmの二重構造になっており器高3cm。外底以外に黄色の透明釉をかける。外底面は回転ケズリ。40は35の内面立ち上がりが更に発達したもので口径8.3・5.9cm・器高4.8cmを測る。外底以外の全面に灰オリーブの土灰釉をかけ外底は回転ケズリが施される。39はヒョウソクで口径5.0cmの球状の体部に脚が付く。器高7cm。体部の内・外面に浅黄色の土灰釉がかかり氷裂が入る。外底面は糸切りで中心に釘穴が有る。36は御神酒徳利で口径2.0・器高8.5cmで肩が張る。釉は全面に灰オリーブの土灰釉をかけさらに肩部下まで灰白の藁灰釉を施釉する。外底は釉をケズリ取っている。34・38は蓋で、34は口径8.6・器高1.5cmを測り、施釉前の素焼きの段階で胎土は灰白色。上面はナデ、下面是ケズリ調整。38は口径7.3・器高1.8cmで段が深く、つまみは口縁から上方に出ない。同じく素焼きの段階で胎土は淡黄色を呈する。41は京焼系の陶器碗で、黄褐色の透明釉を全面に施釉し高台脇から底部にかけ釉をカキ取っている。器壁は薄く、高台脇から鋭く屈曲して体部が直線的に延び深い器形となる。内底面には三足ハマの目跡が残る。47は油瓶の上半部で、復原に径1.7cmの口縁下に4.5cmの油受けが有る。頸部から体部に貼付の把手をもうけ、この上部の油受け部に空気抜きの小孔を穿っている。釉は明黄褐色の土灰釉が全面に施される。胎土は赤褐色で精良。45・46は擂鉢で口唇内側を稜線で外側を丸く肥厚させるT字口縁に仕上がる。46は口径24.6・器高19.2cmを測る。やや上げ底の底部で器壁が厚い。口縁下に1.5cmの焼成前の穿孔がある。内面は1cm当たり15本の細かい櫛目を右回転に刻む。全面に赤褐色の釉をかけ、胎土は橙色で石英粒を多く含む。45は46より浅い器形で口径26.6・器高8.2cmを測る。同様にゆるい上げ底で器壁も厚い。内面には1cm当たり6本の粗目の櫛目を刻んでいる。全面に赤褐色の釉をかけ、同様に胎土は橙色で石英粒を多く含む。42～44は甕でくびれた頸部に短い口縁が立ち上がり、擂鉢と良く似た口唇がつく。42は口径28cmで体部上位にある最大径より若干大きい。釉は暗赤褐色の釉にさらに口縁内面まで飴色の釉をかける。胎土は石英粒を多く含み、灰色を呈す。43は口径28cmで42と同規格。外面肩部に浅い2条の条線を施し花文様の粘土を貼付する。釉掛けも同様である。胎土は灰色で石英粒を多く含む。44はやや大振りで口径35.5cm。復原器高33.2cmを測る。肩部外面に三ツ星の粒土粒を貼り付け、胴下部に多条沈線を施す。釉は同様に暗赤褐色釉を全面にかけ、口縁部のみに飴色の釉を二重掛けにする。外面の釉はナマコ釉状になる。37は窯道具の三足ハマで径5.8cmの円盤に手捏ねの足を3ヶ所貼付する。胎土は石英粒を多量に含み、赤～浅黄橙色を呈する。

SK13 (Fig.39・40)

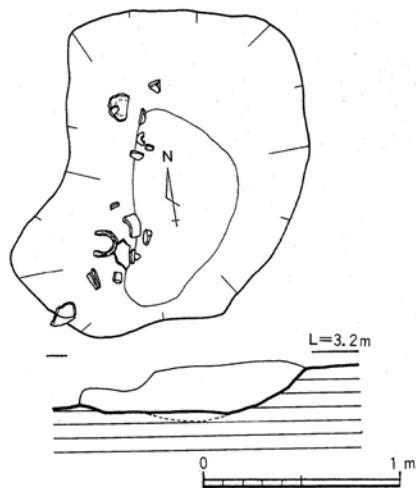


Fig.39 SK13実測図 (1 / 40)

調査区南東部の近代整地層上面で検出され、SD09に切られている。1.86×1.2mの不整形で深さ20cm。内部からは白磁香炉や擂鉢や仏花器・甕等の高取焼の焼損品や窯道具が多数検出されている。

出土遺物 (Fig.41)

48は白磁の花生の下半で復原高台径4.8cm。体部外には浅い縦方向の凹線が多数削り込まれ、外面全面に明青灰色の透明釉が施され、畳付はカキ取る。胎土は灰白で黒色微粒子を多く含む。49～51は窯道具のハマで、49は径7cmの円盤に三角錐の足を3ヶ所貼付する。器高1.8cm。胎土は石英粒を多量に含み浅黄橙色を呈する。50は復原口径15・器高4.5cmで上面を6ヶ所の波状にヘラで削り出している。内・外面はヨコナデ、上・下面是ヘラナデ調整。石英粒をやや多く含み、橙色を呈する。51はやや大振りのハマで復原口径26.6cmで体部が外方にやや開く。体部外面と口唇内面はヨコカキ目、口唇は飄意的に波状に削り出す。胎土は多量の石英粒を含み浅黄橙～赤橙色を呈する。



Fig.40 SK13検出状況 (東から)

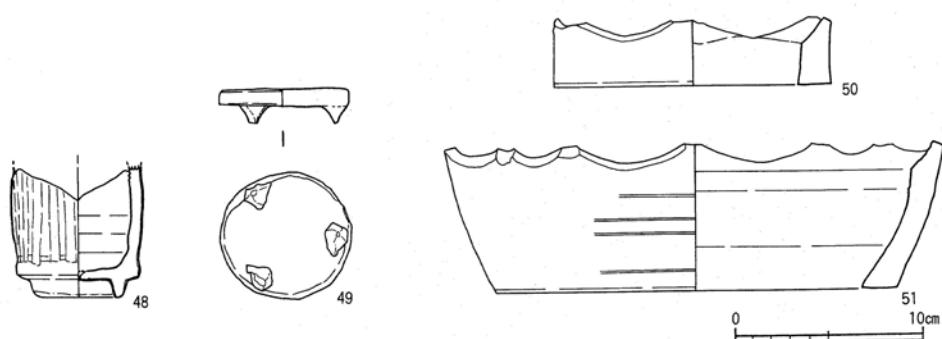


Fig.41 SK13出土遺物 (1 / 4)



Fig.42 SD08・09 (北から)



Fig.43 SD08土層断面 (南から)

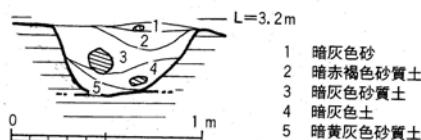


Fig.44 SD08土層断面図 (1 / 40)

溝 SD08 (Fig.42~44)

調査区東部の近代整地層上で検出された南北方向の溝で、方位を N-2°-E にとって南に延びる。幅90・深さ40cmの舟底形の断面を呈する。上面に砂層が、以下に赤褐色・暗灰色の砂質土が堆積し、底面は3紀層の岩盤を掘り込んでいる。内部からは多量の高取焼の焼損品とハマ等の窯道具、土師質・瓦質の火舎・七輪等を検出しており、ハマは87点検出している。

出土遺物 (Fig.45・46)

52~54は円盤状の三足ハマで、52は径7.0・器高1.8cm、53は径7.0・器高1.8cm、54は径6.1・器高1.5cmを測る。胎土は石英粒を多量に含む。55・56は円盤状のハマで55は径10.0・厚さ1.3cm、56は径27.0・厚さ2cmを測る。色調は赤橙色。57~61は輪状の五足ハマで、57は径7.2・器高1.5cm、58は径12.0・器高2.0cm、59は径10.0・器高2.2cm、60は径11.5・器高2.5cmで、59・60は外側面がヨコカキ目調整。61は径16.5・器高1.5cmを測る。62~64は筒状で上端が波状をなすハマで、62は径16.2・器高4.8cmで外側面がヨコカキ目。63は径16.0・器高4.8cmで62と同一規格。外側面がヨコカキ目。64は外方に開くもので径26.6・器高6.3cmを測る。側面に焼成前の穿孔が有る。

65はトチンで径25.5cm、色調は暗赤灰色。外面は火熱で炻器化している。66は高台付の端反りの皿で口径11.6・器高3.7cm。全面に灰赤色の釉が施され内底部は蛇ノ目にカキ取る。胎土は灰白色で精良。67は碗で口径11.5・器高4.5cmで全面に緑褐色の釉を施し、畳付部と内底面は蛇ノ目にカキ取る。胎土は淡黄色で精良。68~72は灯明皿で、68・69は浅いタイプで68は径11.5・器高2.3cmで口唇外側の一端につまみを貼付ける。釉は内側のみに橙色の釉を施す。69は

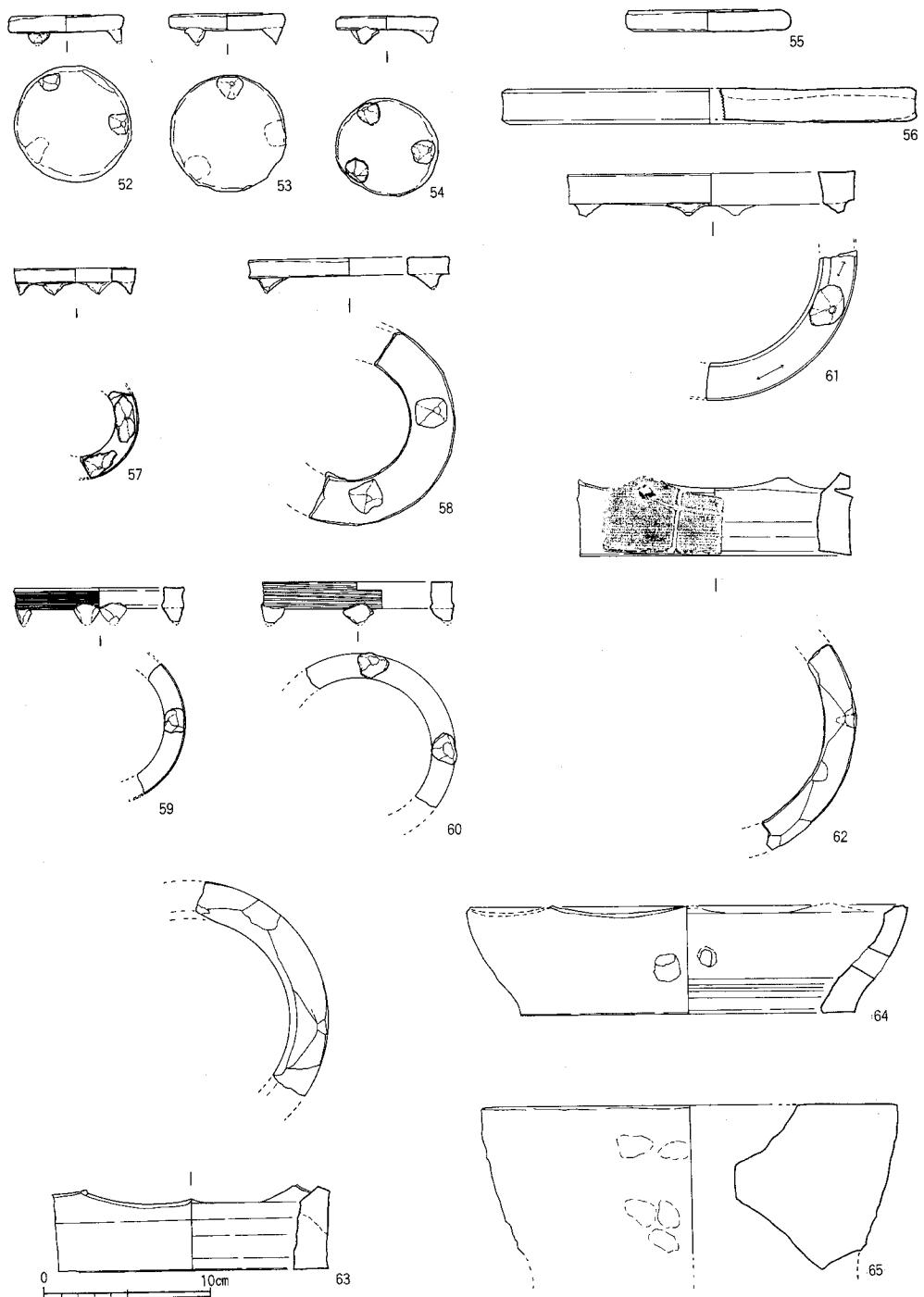


Fig.45 SD08出土遺物実測図 (1 / 4)

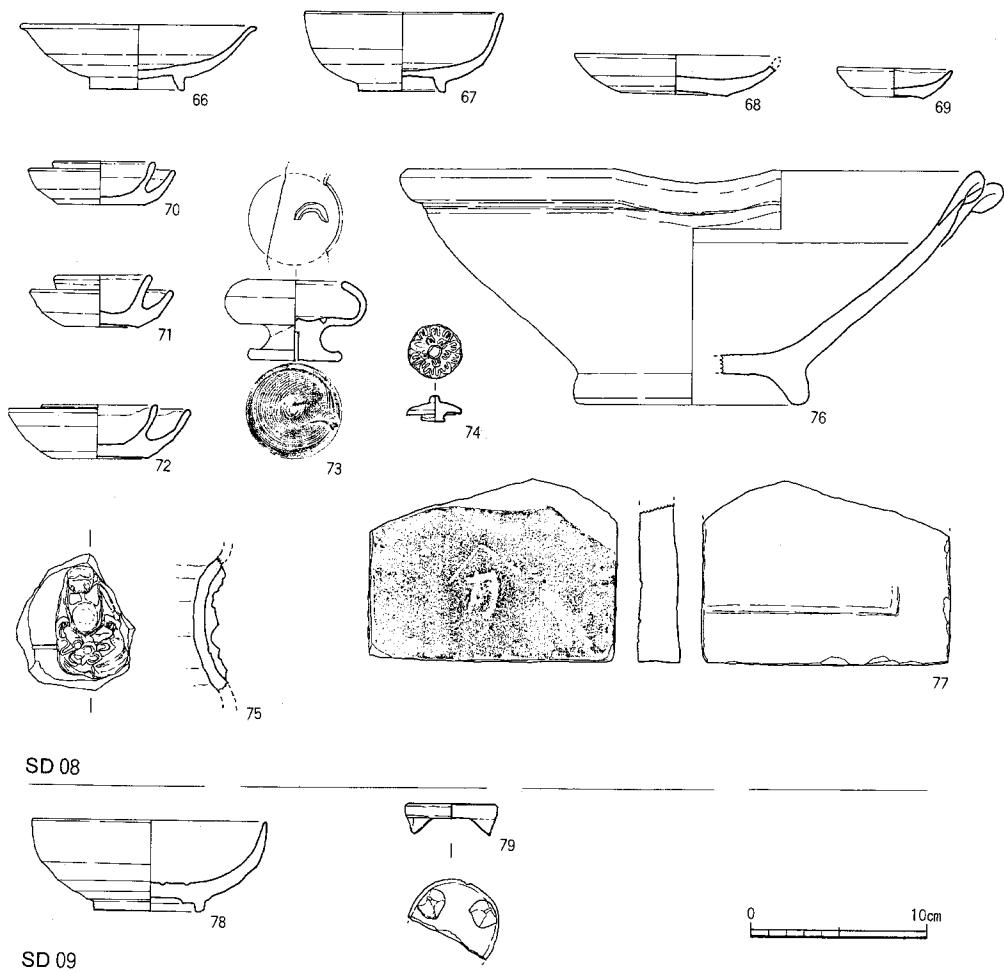


Fig.46 SD08・09出土遺物実測図（1/4）

口径6.5・器高1.7cmで内側にのみ淡黄色の釉をかける。外底は回転ケズリ。口縁部に煤が付着する。70～72は内側が立ち上がる二重構造のもので70は5.8・8.4cmの径で器高2.5cm。釉は内面のみに灰オリーブ色の釉を施釉する。外面体部下半から外底部は回転ヘラケズリ。71は5.5・8.2cmの口径で器高3cm。70と同様の施釉である。72は前2者と比べ内側の立ち上がりが低いもので、口径6.5・10.4cm・器高3cmを測る。釉はにぶい赤褐色で内面のみに施す。胎土は全て石英微粒子を多く含む。73はヒョウソクで、径8.0cmの扁球形の体部に脚がつく。器高4.5cm。釉は体部のみで淡黄灰色を呈する。体部内底には芯留めの溝が刻まれる。外底は糸切りで中心に釘受けの孔を穿つ。74は香合の蓋と思われ、口径3.0・器高1.5cm。上面には型成形による蓮

弁文様が有る。釉は上面のみに施釉される。色調は明緑色を呈する。75は「へそ」徳利の「へそ」部分で、型成形の 6.5×3.5 cmの布袋像を沈線を一条巡らし押しくぼめた中に貼付している。釉は全面に施され暗赤褐色を呈する。胎土は灰色を呈し精良。76は擂鉢で口径33.4cm・器高13.4cmを測る。口唇は外方に折り曲げ肥厚させて玉緑状に仕上げ、一方に幅10cmの広い片口をもうける。高台は13.3cmの輪高台で内面に1cm当たり6本の目の粗い櫛目を右回りに刻む。焼成は軟質の炻器で外面は橙色を呈する。胎土は石英粒を多く含み赤色を呈する。45・46とは系統を異にする肥前系のものと思われる。77はトンパイで火熱で炻器化している。色調は暗赤褐色で内面に浅い段を有する。外面には「分」の刻印が有る。

S D 09 (Fig. 5)

近代整地層上面で検出され、S D 07・08の間で弧状に南側に延びる。S D 08につながる可能性が有る。S K 13を切っている。幅70cm深さ70cmの断面舟底形を呈する。08同様多量の高取焼の甕・碗・擂鉢・土管等の焼損品が出土した。

出土遺物 (Fig. 46)

78は碗で釉掛け前の素焼きのものである。口径13・器高5.2cmを測る。胎土は灰白色で精良。64と類似する。外底部は蛇ノ目高台になっている。79は三足ハマで径5.2・器高1.8cm。

表土・客土層出土遺物 (Fig. 47)

80は肥前系染付の広東碗で口径10・器高6.7cmで高い高台で体部が直線的に開く。1条の圈線上に吳須で草花文を描く。高台脇に1条の圈線を巡らす。内面は口緑下に2条見込脇に1条の圈線を巡らし、見込口「寿」の銘を描いている。釉は全面に施し畳付をカキ取る。胎土は灰白で精良。81はヒョウソクで、口径38cmの球形の体部に脚をつける。器高3.8cm内底部桶状の芯立てを継に貼付し体部にのみ紫黒色の鉄釉をかける。外底は糸切りで釘受けを中心穿つ。82は仏花器で底径6.5cm。全面に赤褐色の鉄釉をかけ、外面縁部に藁灰釉をかける。83はぐい呑で口径6・器高3cm。内面と外面体部の2/3まで淡黄色の長石釉をかける。胎土は灰白で精良。84は灯殆で口径4・器高5cmを測る。全面に灰オリーブの灰釉をかけ外底面をケズる。胎土は灰白で精良。85は五足ハマで径12.2cmの円盤に三角錐状の足を貼り付ける。器高2cm。胎土に石英微粒を多量に含み、明褐灰色を呈する。86は径6cmの小型のハマで上面に蛇ノ目状の凹みが有る。胎土は石英微粒を多量に含む。87は径5.5cmの小型の三足ハマで器高2cmを測る。胎土は石英粒を若干含む。

88・89は近代客土層からの出土。88は大型のトチンで径20cm。上面に径11cm程の蛇ノ目状の凸帶が有る。胎土は灰色で石英粒を多量に含む。外面は暗赤褐色を呈する。89は径10.6cmのトチンの半折品で、残高で15cmを測る。外面は暗赤褐色を呈し、胎土は暗灰色で石英粒を多量に含む。底面に砂粒の熔着が見受けられる。

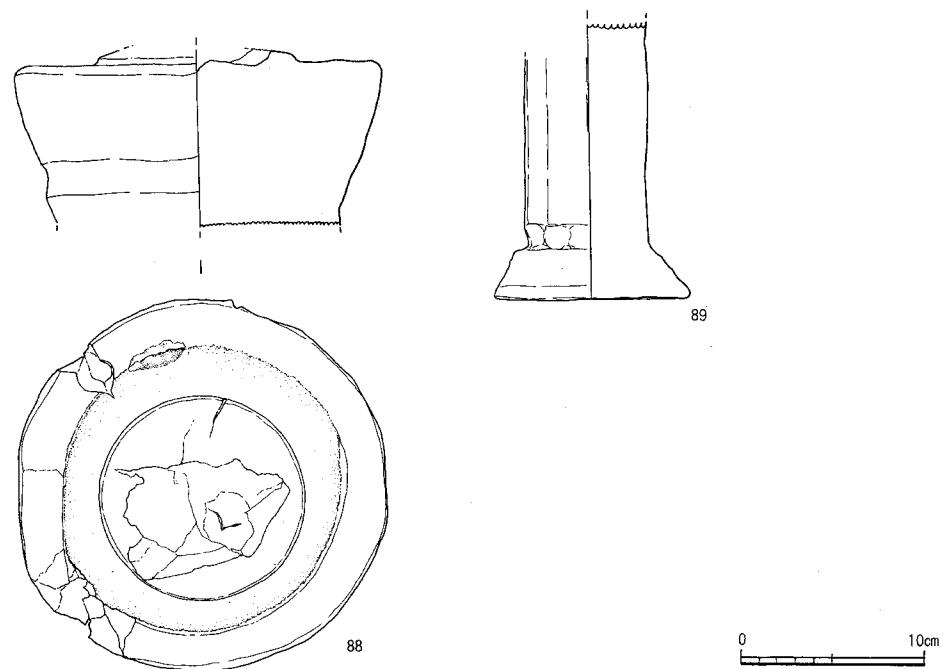
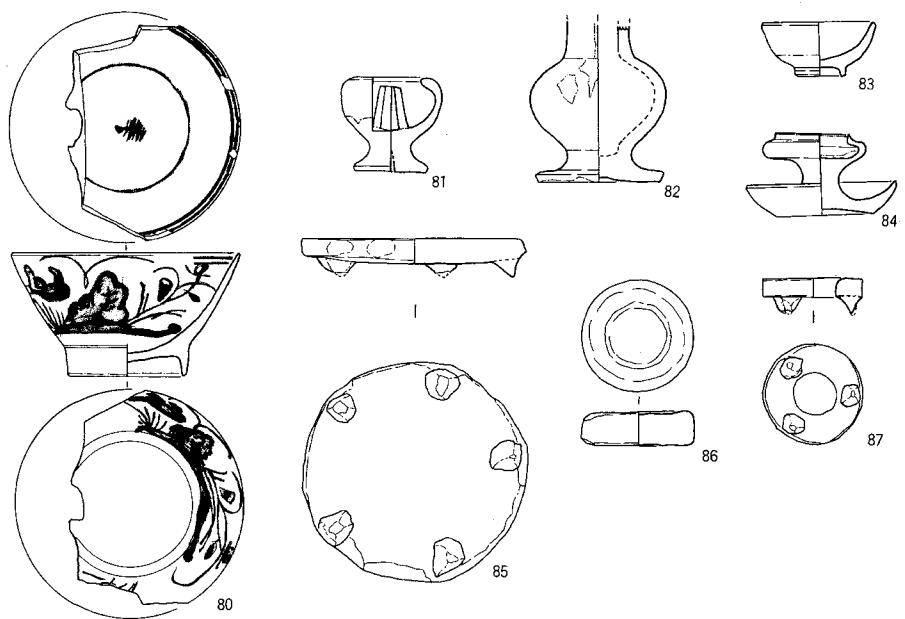


Fig.47 表土出土遺物実測図 (1 / 4)

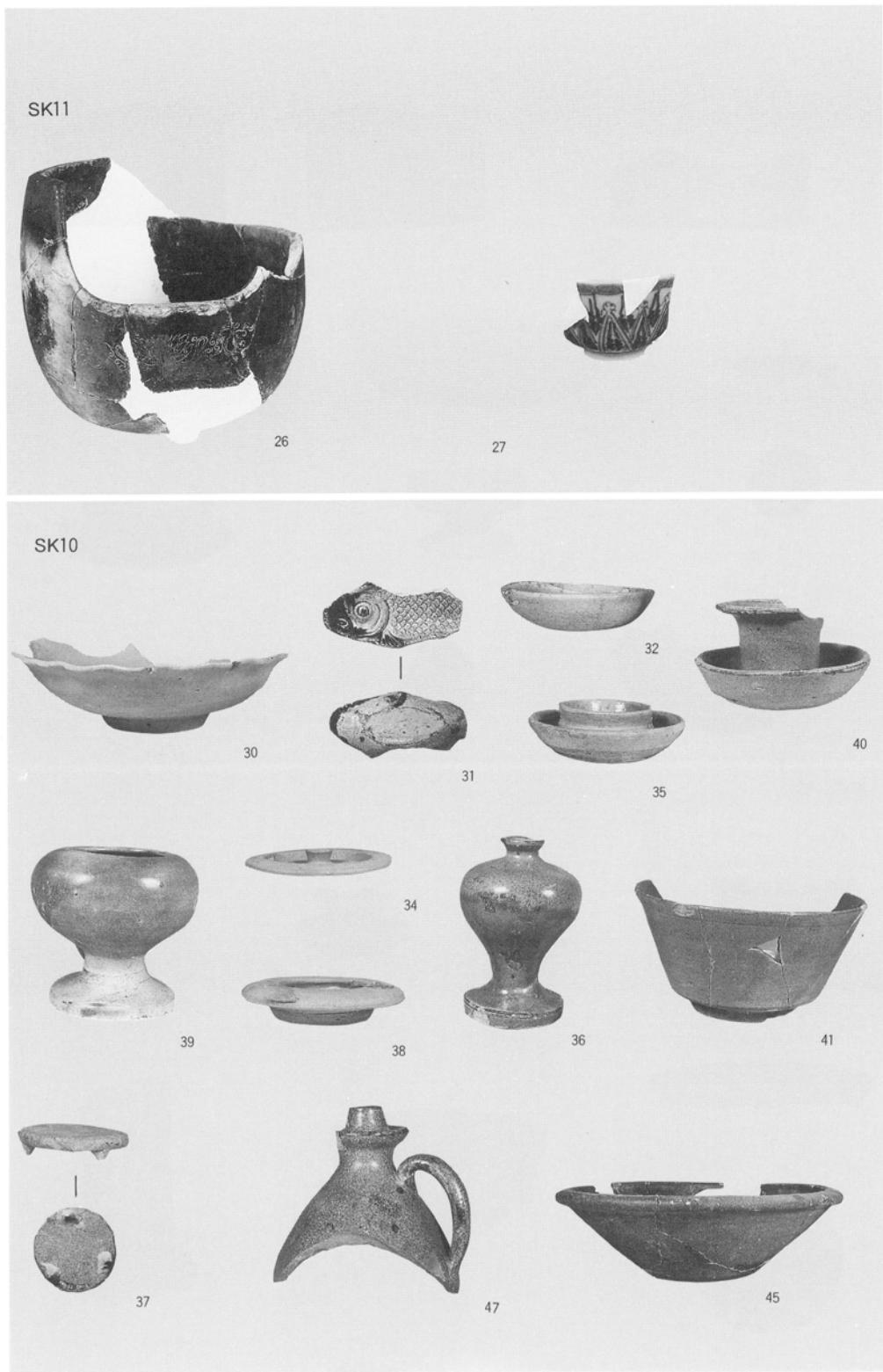
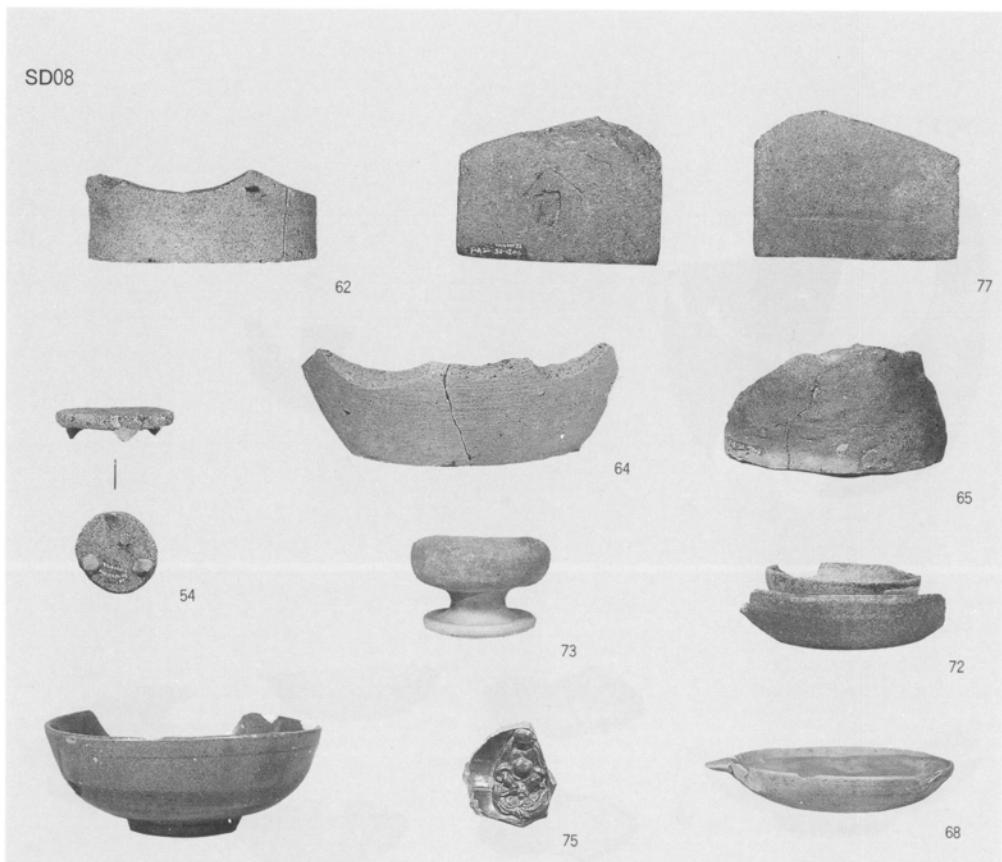


Fig.48 出土遺物・1



表採・客土



Fig.49 出土遺物・2

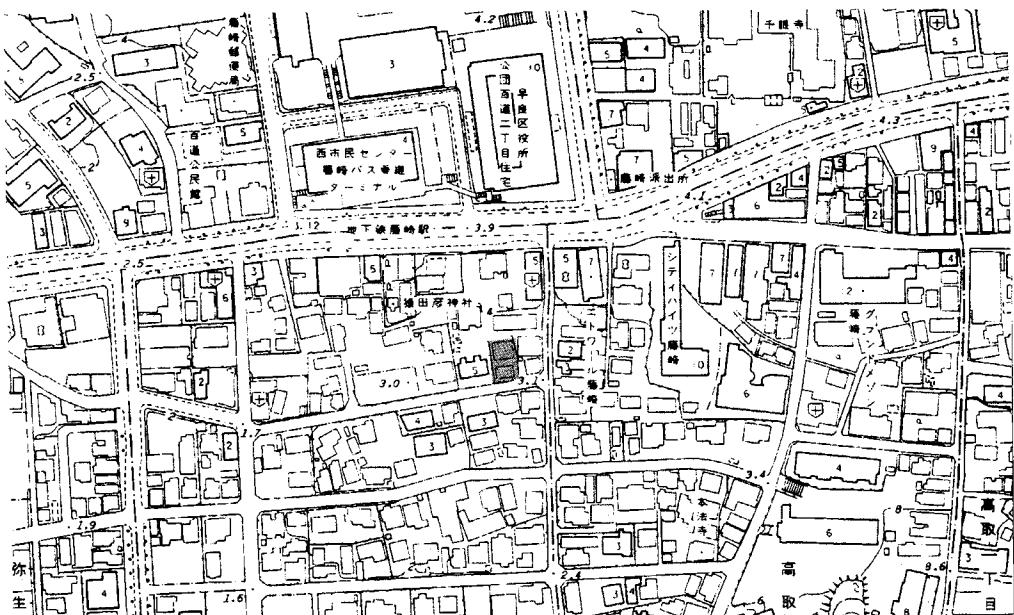
4. 小 結

1. 遺跡が立地する砂丘の風成堆積層直下の湿地堆積層から検出した炭粒の C¹⁴測定の結果 $2,370 \pm y$ 、B・P (GaK-15080) の数値が示された。砂丘の形成開始期が、縄文晩期末～弥生前期初頭頃の可能性を示す資料となった。
2. 7世紀後半～末の整地層を確認した。東の丘陵側の風成砂層上から西の後背湿地にかけて埋めており、風成砂層上に第3紀層の角礫混じりの砂質土を用い、同時に丘陵側も掘り下げ地業を行っている可能性がある。この上面で土壙3基・溝2条を検出した。南側の S D 01は方形に区画される可能性がある。遺物は管状土錘が目立ち、漁撈を主とする集落と思われる。
3. 12世紀後半～13世紀初頃の井戸1基と溝1条を検出。周辺調査で検出されている元寇との関連が示唆されている遺構群より一時期先行する。
4. 高取焼関連の土壙・溝多数とこの遺構にはさまれた整地層を確認した。整地層は前代と同様、独立丘側の掘り下げ地業が行われ、これを西側に広げ整地している。西側では整地層直下が幅40cm高さ10～15cmの畝状の高まりの連続となっており、整地前は畠地として利用していた様である。高取焼の皿山移転は明治22年とされており、これ以降の整地と思われるが、ガラス・釉裏色絵磁器等は供判しておらず、開窯時期に近いものと思われる。この整地層の上下面で多量の高取焼・窯道具を検出した。高取焼はほとんどが破損しており焼けひずみ、熔着が著しく、焼損品を処理したものと思われる。

遺構一覧表

No	グリッド	時 期	規模 長辺×短辺×深(底面標高) m	出 土 遺 物
S D01	B～E-7	7世紀後半～末	6.34×0.80×0.47	須恵器(壺、壺蓋、高台壺、高壺、甕) 土師器(甕、甕)土錘、砥石、鉄滓
S E02	A～B-5～6	12世紀後半～13世紀初	2.16×2.14×0.88	青磁(碗、皿)白磁碗、須恵器(壺、壺蓋、甕) 土師器(皿、碗、甕)土錘
S D03	E～F-2～3	7世紀後半～末	3.06+ α ×1.00×0.28	須恵器甕、土師器
S D04	D～F-3 F～H-3	12世紀後半～13世紀初	3.20+ α ×1.00×0.24 3.20+ α ×1.04×0.33	白磁(碗、皿)陶器擂鉢、須恵器(壺・壺蓋・甕) 土師質土器、土師器、弥生土器壺
S K05	E～F-4～5	7世紀後半～末	2.04×1.60×0.53	須恵器(壺・壺蓋・甕)土師器
S K06	E～F-6～7	7世紀後半～末	2.00×1.58×0.31	須恵器壺、土師器
S D07	H～I-3～6	近代	6.00×0.70×0.25	ハマ、須恵器、土師器甕、砥石
S D08	H-3～8	近代	7.70+ α ×0.96×0.55	高取焼(瓶、灯明皿、碗、擂鉢、皿、蓋、壺、急須、土管)染付(碗、皿)土師質七輪、瓦質火鉢、ハマ(87点)
S D09	H～I-6～8	近代	4.20+ α ×0.66×0.30	高取焼(碗、皿、壺、甕、擂鉢、土管)土師質七輪、瓦質火鉢、ハマ、銅鏡
S K10	G～H-2	近代	0.66+ α ×0.60+ α ×0.36	高取焼(德利、皿、壺、碗、蓋、仏花瓶、灯明皿、水滴、擂鉢、甕)ハマ(19点) 青磁皿、白磁皿
S K11	G-3～4	近代	0.46×0.16+ α ×0.36	高取焼(仏花瓶、壺、炉明皿、鉢、擂鉢、甕)清青花小碗、瓦質火鉢、土師質七輪、ハマ(32点)
S K12	I-6	近代	1.34+ α ×1.04+ α ×0.55	高取焼(灯明皿・擂鉢)染付、土師質七輪、ハマ、トチン
S K13	I～H-7～8	近代	1.66×1.22×0.24	高取焼(鉢、壺、甕)白磁(碗、香炉)、瓦質、土師質、瓦、ハマ
S K14	I-7～8		0.90×0.50×0.13	
S K15	H-3	近代	0.94×0.54+ α ×0.22	高取焼、土師質、瓦、須恵器、土師器
S K16	H～I-6～7		0.96×0.76×0.22	
S K17	F-7	古墳時代	1.28+ α ×1.04×0.24	土師器
S K18				
S K19				
S K20	G～H-6～7	近代	2.08×0.96	高取焼、ガラス瓶(真珠水目薬)
S P01	F-3～4	古墳時代後期	0.54×0.28+ α ×0.29	須恵器(壺蓋、甕)土師器
S P02	D-6	古墳時代後期	0.40×0.32×0.06	土師器
S P03	E-3	古墳時代後期	0.38×0.36×0.24	須恵器壺
S P04	F-3～4	古墳時代後期	0.30×0.28×0.10	土師器
S P05	E-4	古墳時代後期	0.30×0.28×0.18	土師器
S P06	E-5～6	古墳時代後期	0.32×0.28×0.18	土師器
S P07	H-4		0.34×0.30×0.08	
S P08	G-6		0.22×0.18×0.23	
S P09		古墳時代後期		土師器

第 21 次 調 査



第21次調査位置 (1 : 4,000)

調査番号 9140

遺跡番号 FUA-21

1. 調査に至る経過

平成3年、埋蔵文化財課に申請者の株式会社オークニから、早良区藤崎一丁目56番地内に共同住宅建設の為の事前審査願いが、福市教埋3-2-94にて提出された。申請地周辺は過去度々文化財の調査が行なわれている区域で、埋蔵文化財包蔵の可能性があったため、試掘調査を実施した。その結果、予想どおり埋蔵文化財の包蔵が確認された。そしてその取り扱いについて協議を行ない、調査費用を原因者が負担するという事で、発掘調査を実施する事となった。

発掘調査は平成4年1月13日の重機による表土除去から開始し、2月8日の器材撤収を持って終了した。調査は試掘調査のデータに基づいて3面実施した。調査面積は175m²である。

なお調査に際しては施工業者の吉川工務店より、現場の条件整備・残土の搬出作業などで多大なる協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

2. 調査体制

調査委託 株式会社 オークニ

調査主体 福岡市教育委員会教育長 井口雄哉

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学 同課第1係長 飛高憲雄

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 吉田麻由美

調査担当 埋蔵文化財課主任文化財主事 山崎龍雄

調査協力 瀬戸啓治、西畠盛行、池田礼子、井上マツミ、緒方マサヨ、清原ユリ子、佐藤テル子、柴田勝子、土斐崎初栄、藤崎久子、堀川ヒロ子、松井邦子、宮原邦江、吉田田鶴子、若狭睦代、西尾タツヨ、松下節子、吉田祝子

資料整理 井上加代子、岩下郁子、大賀順子、釣崎由美、坂木智子、田口美智子

遺跡調査番号	9140		遺 跡 略 号	F U A -21	
調査地地籍	福岡市早良区藤崎1丁目56番地		分布地図番号	081-A-1	
申請面積	333m ²	調査対象面積	170m ²	調査実施面積	175m ²
調査期間	1992年1月13日～2月8日		事前調査番号	福市教埋3-2-94	

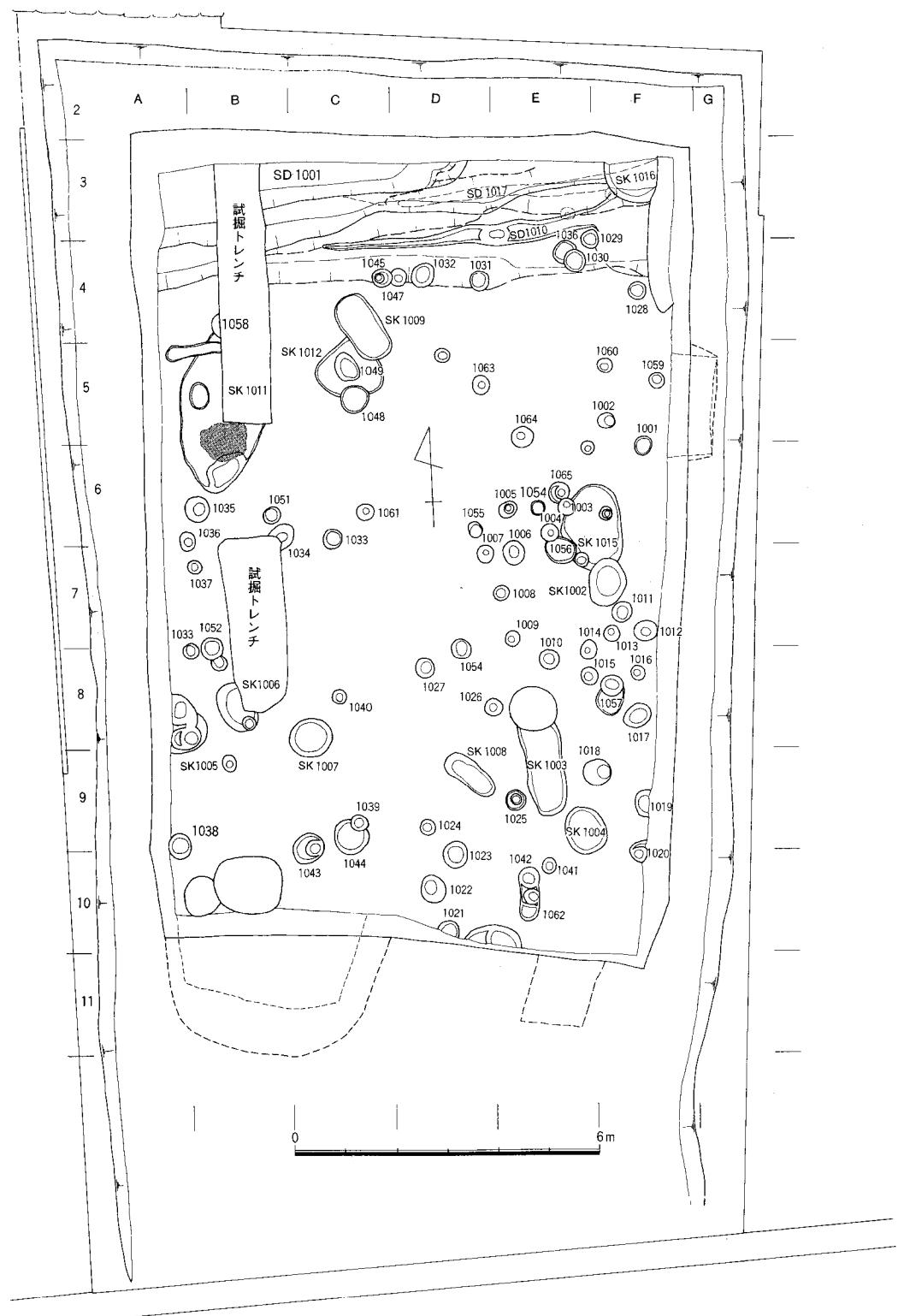


Fig. 50 第1面 全体図(1 / 150)

3. 調査の記録

(1) 調査の概要

本調査区は東西に広がる砂丘の南側緩斜面上に立地し、標高は現地表で3.7m前後を測る。平成2年度調査の第15次地点は北側に、第16・18次地点は東側に立地する。

調査は事前調査のデータを基に、建物を建てる部分を範囲として行なった。調査区の基本層序は上から、盛土、灰色砂、褐色砂又は黒褐色砂（古墳時代から中世迄の遺物を含む包含層）、暗褐色粗砂、黄褐色から明褐色砂、明黄褐色砂、淡黄色粗砂（基盤）である。その内遺構は暗褐色粗砂（第1面、古代から中世）、黄褐色～暗褐色砂（第2面、古墳時代後期から奈良時代）、明黄褐色砂（第3面、古墳時代後期から奈良時代）で検出した。

調査は、事前に盛土を原因者がすき取りし、調査として実施したのはその下の灰色砂の除去作業からである。調査は前述した3面について行なった。検出した主な遺構は、第1面が溝及び土坑・ピット、第2面が土坑とピット・竪穴住居址、第3面が掘立柱建物・土坑・ピットである。遺構を確認した土層の上面はいずれも比較的硬く締っていた。

出土遺物は包含層及び第1面下の暗褐色粗砂を中心にコンテナ14箱程出土した。主な遺物としては古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器、中世の土師器や中国産の輸入陶磁器や土錘、石錘などの漁撈具がある。

(2) 第1面の調査(Fig. 50・76)

土坑

番号を付したものは13基あるが、いずれも残りは悪く、遺構の性格も不明であるので、図示するのは1つにとどめ、外は文章のみの説明とする。

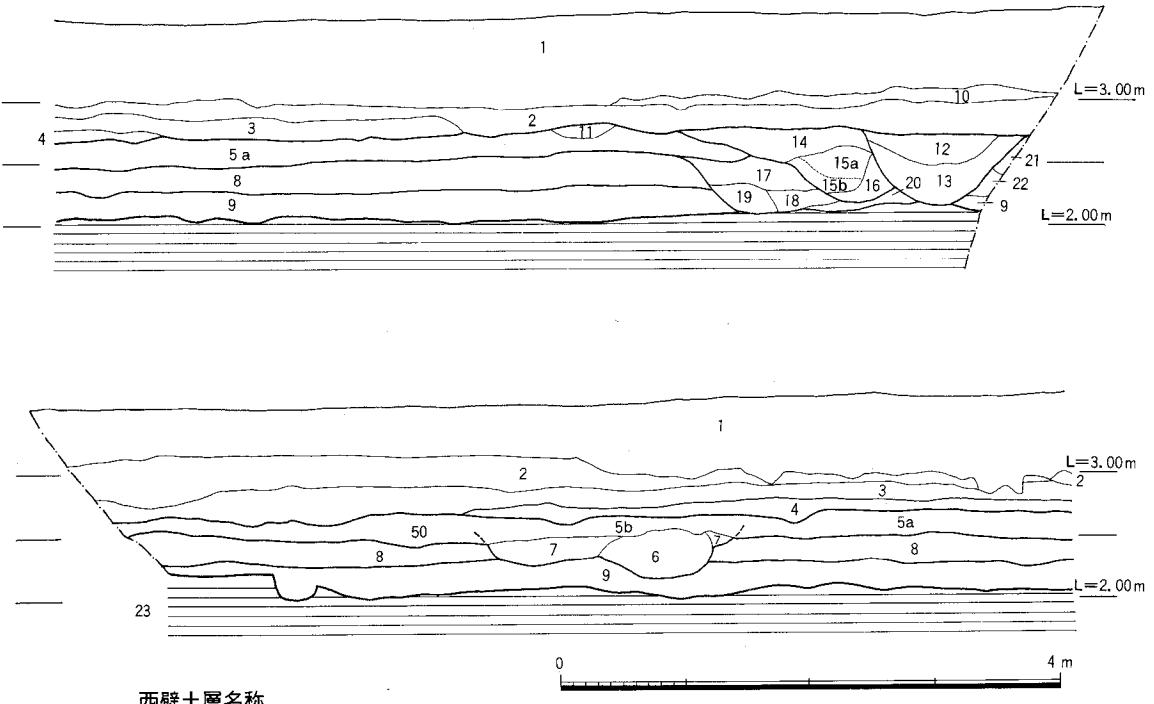
SK02 (Fig. 53)

7F区で検出した楕円形の土坑・規模は $0.95 \times 0.72\text{m}$ 、深さ15cmを測る。底面は浅く皿状を呈し、埋土は上層が黒褐色砂、下層が暗褐色砂を呈す。遺物は中世の土師器の杯や土錘などを含むが量は少ない。

1は土師器の杯1/5片。復元口径14.8cmを測る。内外面横ナデ。色調は淡橙色を呈し、胎土に赤色粒子、金雲母細粒をわずかに含む。10は管状土錘。全長7.1cm、直径1.7～1.8cm、孔径0.7～0.8cm、重さ21gを測る。端部は一部欠損している。

SK03 (Fig. 53)

8E・9E区にかけて検出した南北方向に主軸を取り、平面形が長方形を呈する土坑。北側は攪乱で乱れている。規模は $1.85 \times 0.75\text{m}$ 、深さ5cmを測る。埋土は淡黒褐色砂で暗褐色砂を少量含む。遺物は古墳時代から中世にかけての土師器・須恵器や土錘などを含む。量は少ない。形態的に見て土壙墓などの可能性がある。



西壁土層名称

- | | |
|--------------------------|---|
| 1. 寄土（主体は橙色ローム土） | 11. 2で5aをやや混入する |
| 2. 褐色砂で10をわずかに含む | 12. 暗い黒褐色砂、やや粘性あり |
| 3. 黒褐色砂で10を少量含む | 13. 12より明るい |
| 4. 黒褐色粘質砂 | 14. 淡黒褐色砂 2より暗い |
| 5a. やや暗い褐色砂、粒子は粗く下方は8を混入 | 15a. 黒色砂に14を混入 |
| 5b. 5aより暗い | 15b. 14の混入が多い |
| 5c. 赤味が強く、焼土粒子を含む。 | 16. 14で黄褐色粗砂を下方に含む |
| 6. 黒色砂で上方は5a、下方は9が混入する | 17. 褐色砂で8より暗い |
| 7. 暗褐色砂 | 18. 17に黄褐色砂の混入 17より明るい |
| 8. 黄褐色～明褐色砂、粒子が粗い | 19. 17より赤味の強い褐色 |
| 9. 明淡褐色砂、8に比べ粒子が細かく白っぽい | 20. やや黒く汚れた9である |
| 10. 灰色砂、2をわずかに含む | 21. 黄褐色砂に黒褐色砂をブロック状に少量混入 |
| | 22. にぶい黄褐色砂に黒褐色砂混入 |
| | 23. 淡黄色粗砂 粒子が粗く硬くしまる 灰色粘土
小プロックを斑状に含む(地山面) |

Fig.51 調査区西壁土層(1/60)

11は管状土錐で、全長6.1cm、直径1.6cm、孔径0.7cm、重さ11.6gを測る。

SK1004 (Fig. 53)

9 E区で検出した楕円形状の土坑。規模は0.93×0.7m、深さ7cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は淡黒褐色砂に明黄褐色砂を混入する。遺物は古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器の破片が出でているが、大半が細片である。

2は須恵器の杯身1/3片。IV期のものである。復元口径9.6cm、受部径11.4cm、器高3.1cmを測る。外面は削り未調整であるが、その他は横ナデ。内底は不整方向ナデ。色調は灰色、胎土は精良である。

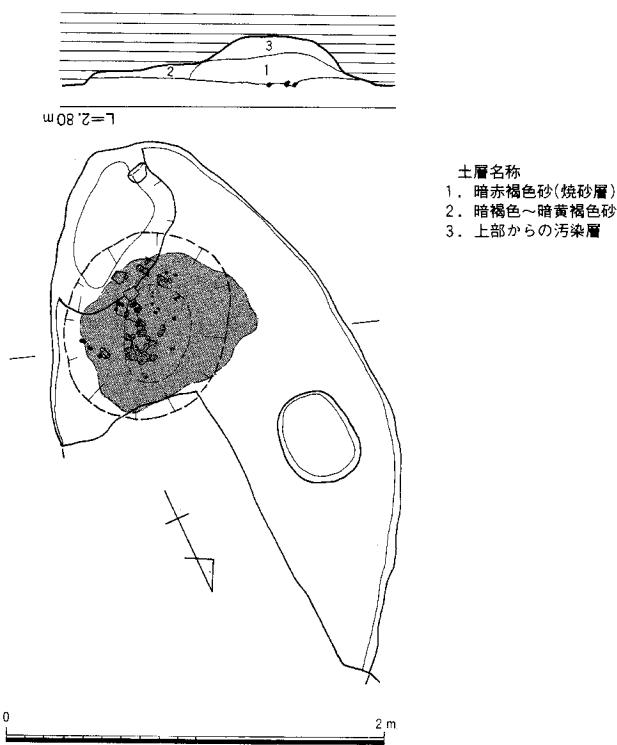


Fig. 52 SK1011 (1 / 40)

SK1005

8 A区の西壁境界地で検出した円形状の土坑。規模は $1.2 \times 0.6\text{m}$ 以上を測る。底面にはピット状の落ち込みがある。遺物は古墳時代以降の土師器・須恵器の細片を少量含む。

SK1006

8 B区で検出した試掘トレーナに切られる楕円形状を呈する土坑。規模は $1.03 \times 0.7\text{m}$ 以上、深さ14cmを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は淡黒褐色砂である。遺物は古墳時代から中世の土師器を含む。中世の土師器は高台付椀や底部糸切りの杯らしきものがある。

SK1007

8 C区で検出した円形の土坑。規模は $0.85 \times 0.77\text{m}$ 、深さ15cmを測り、中央がやや深くなる。埋土は暗褐色砂である。出土遺物は時期不明の土器片が少量出土している。

SK1008

9 D区で検出した長楕円形を呈する土坑。規模は長さ $1.63 \times 0.45\text{m}$ 、深さ15cm前後を測る。断面は逆台形を呈し、埋土は淡黒褐色砂である。遺物は古墳時代以降の土師器・須恵器の細片を少量含む。

SK1009 (Fig. 53)

4 C区で検出した主軸をN-30°30'-Wに取る平面形が長方形を呈する土坑。規模は $1.38 \times 0.74\text{m}$ 、深さ12~15cmを測る。断面は浅い逆台形を呈す。埋土は淡黒褐色砂を主体とし、暗褐色砂をブロック状に含む。遺物は古墳時代から奈良時代にかけての須恵器・土師器・土錘などをやや多く含むが、細片が大半である。

3は奈良時代の須恵器蓋1/12片である。小片で復元にやや難があるが、復元口径15.8cmを測る。内外面ナデ。色調は灰色で、胎土は精良。12・13はいずれもゆるい紡錘形を呈す管状土

錘。12は中型で全長5.2cm、直径1.8cm、孔径0.8cm、重さ17.3gを測る。13は上半分を欠失するが、残存長4.6cm、直径1.6cm、孔径0.7cm、重さ9.1gを測る。16は不明石製品。橢円形を呈する扁平な砂岩の転石を用いている。全面磨滅しているのか磨いているのかツルツルしている。明確な使用痕は認められない。最大長7.0cm、現存幅3.6cm、最大厚1.6cmを測る。第15次地点出土の石錘のようなものであろうか。

SK1011 (Fig. 52・53・79・95)

調査区北西側で検出した不整橢円形を呈する土坑。北東側は試掘トレンチで切られる。確認規模は長径3.14m、幅1.65mを測る。底面迄の深さは2~3cmと非常に浅いが、北西側と南東隅に浅いピット状の落ち込みがある。また南側に0.9×0.7mの範囲で不整橢円形状を呈するよう焼土塊や炭化物・小転石を含む焼砂層が認められた。最大厚は15cmで、焼け具合は中心程強い。この焼砂層を取り去ると1.0×0.85m、深さ20cmを測って、橢円形状に一段落ち込む。埋土は暗褐色砂である。遺物は古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器や土錘などが出土している。量としてはかなり多いが、大半が細片である。

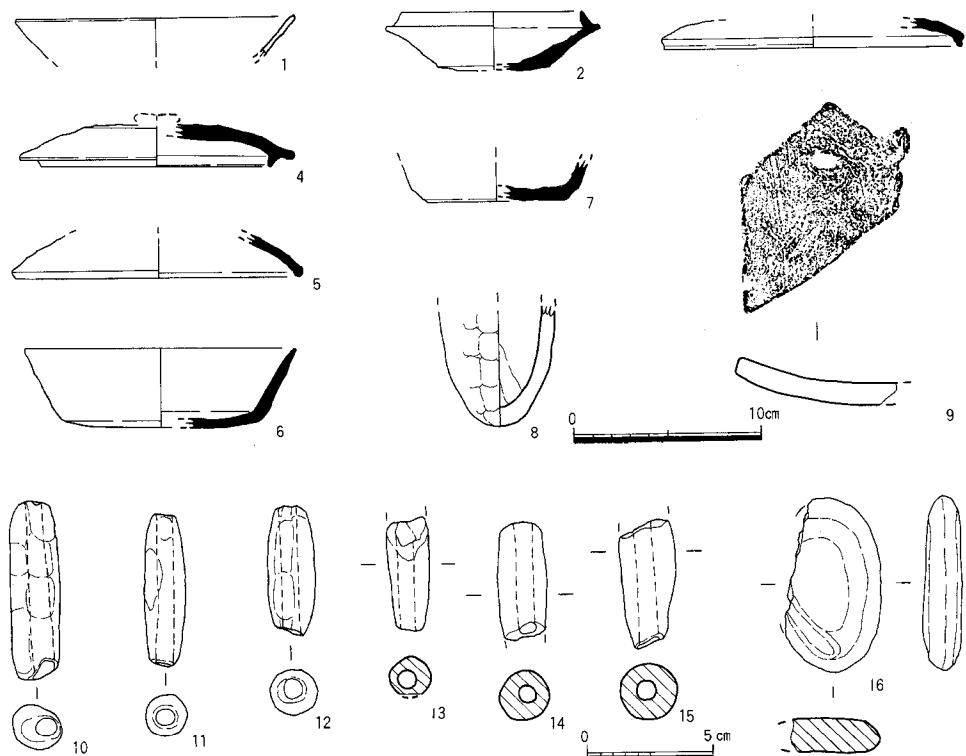


Fig. 53 第1面土坑出土遺物(1/4・1/3)

4・5は須恵器の杯蓋。4は1/3片で、復元口径12.0cmを測る。内側にかえりが付くタイプ。天井部はヘラ削り、その他はナデ。色調はくすんだ赤褐色、胎土は精良である。5は1/12片。ややひずみ、復元口径に難がある。内外面ナデ、色調は灰色、胎土は精良である。14・15は管状の土錘。14は下半分を欠損するが円筒状を呈す。残存長4.9cm、直径2.0cm、孔径0.7cm、重さ16.9gを測る。15はやや紡錘形を呈し、上半部を欠失する。残存長5.1cm、直径2.2cm、孔径0.8cm、重さ21.2gを測る。

SK1012

SK1009に切られるおむすび形を呈す土坑。規模は1.15×1.2m以上、深さは8cm前後を測る。底部中央はピット状に更に10cm程深くなる。埋土は黒褐色砂を主体とするが、暗褐色砂を少量含む。遺物は土師器の細片を少量含む。

SK1014

調査区南壁境界地で一部を検出した。西側にテラスを持ち、深さはテラス部が14cm、最深部が23cmを測る。埋土は淡黒褐色砂である。遺物は古墳時代の土師器の甕の細片が少量出土している。

SK1015 (Fig. 53)

SK1002北側で検出した不整楕円形を呈する土坑。規模は1.6×1.2m、深さは14cmを測る。埋土は暗褐色砂である。遺物は古墳時代後期から奈良時代迄の土師器・須恵器を含むが、量は少ない。

6は杯1/2片。復元口径14.3cm、器高4.2cmを測る。外底部はヘラ削りのちナデ、その他は横ナデである。色調は灰色で、口縁部周辺は青灰色である。胎土は精良。

SK1016 (Fig. 53)

調査区北東隅 SD1001を切り、東側は攪乱土坑で切られる土坑。確認したのは一部分で、全体の規模はわからない。深さは確認規模で最大20cm前後を測る。埋土は暗褐色砂である。遺物は古墳時代から中世迄の土師器・須恵器などの細片が少量出土している。

7は須恵器杯底部1/4片。平底の底部中央はやや上げ底。外底部はヘラ切り未調整、その他はナデ。色調は灰色、胎土に石英・長石粒子を少量含む。8は土師器の飯蛸壺底部1/4片。内外面指おさえ痕が残る。色調は明橙色で、胎土に石英粒子を多く含む。9は瓦質の平瓦片。薄手で厚さ1.1cmを測る。全体に磨滅が著しいが、凹面に細かい縄目痕がかすかに残る。

溝状遺構

SD1001 (Fig. 51・54・55・77・78・96)

調査区北側で検出した東西方向から北へやや振れて延びる溝。確認規模は長さ6m余、幅1.35m、深さ55cmを測る。溝断面はU字形を呈す。SD1017を切っているが、遺構確認時、上面の色の違いから、SD1001をSD1001a、SD1017をSD1001bとして同一の遺構と考えて遺物

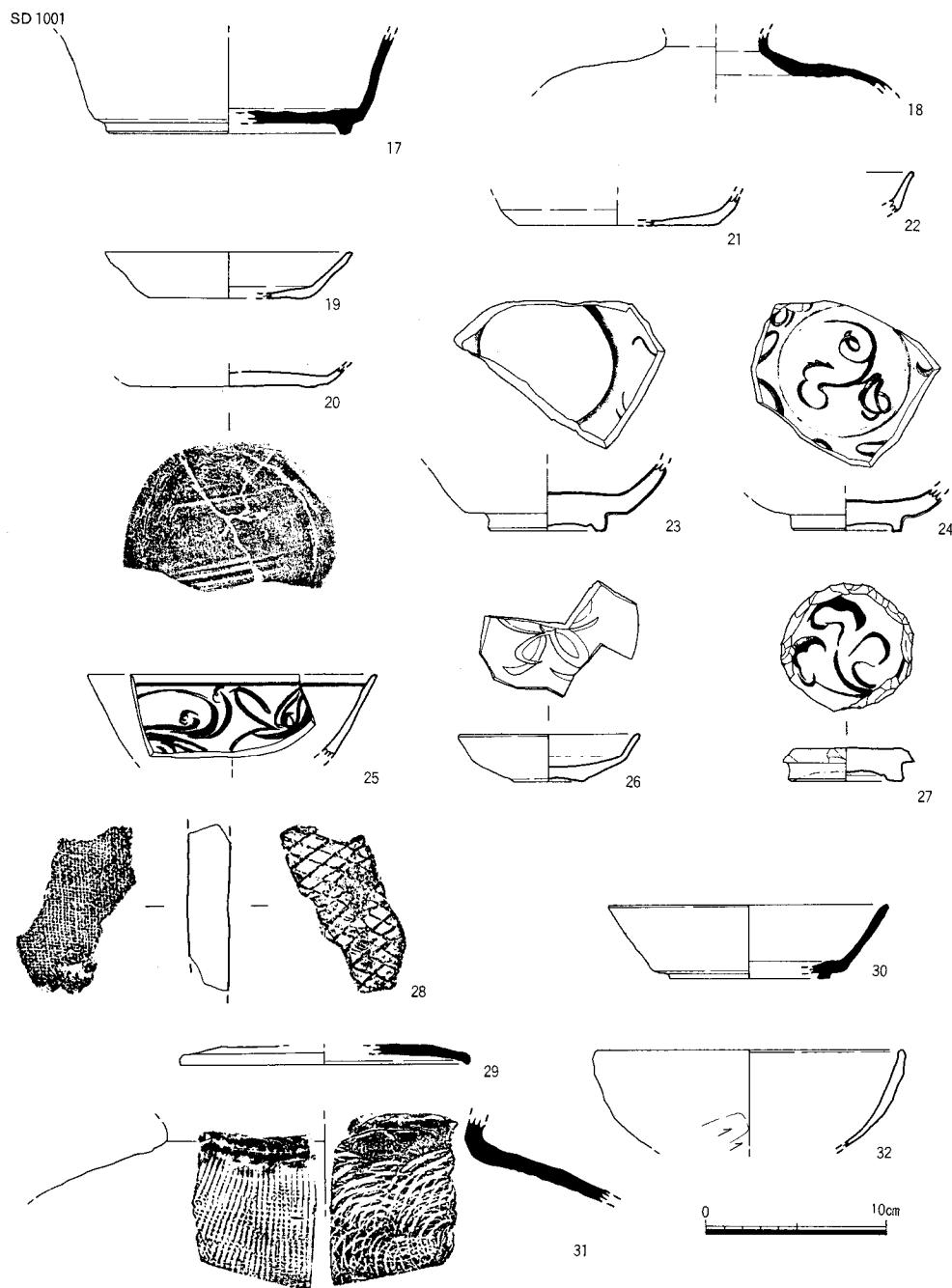


Fig.54 第1面溝出土遺物 1 (1 / 4)

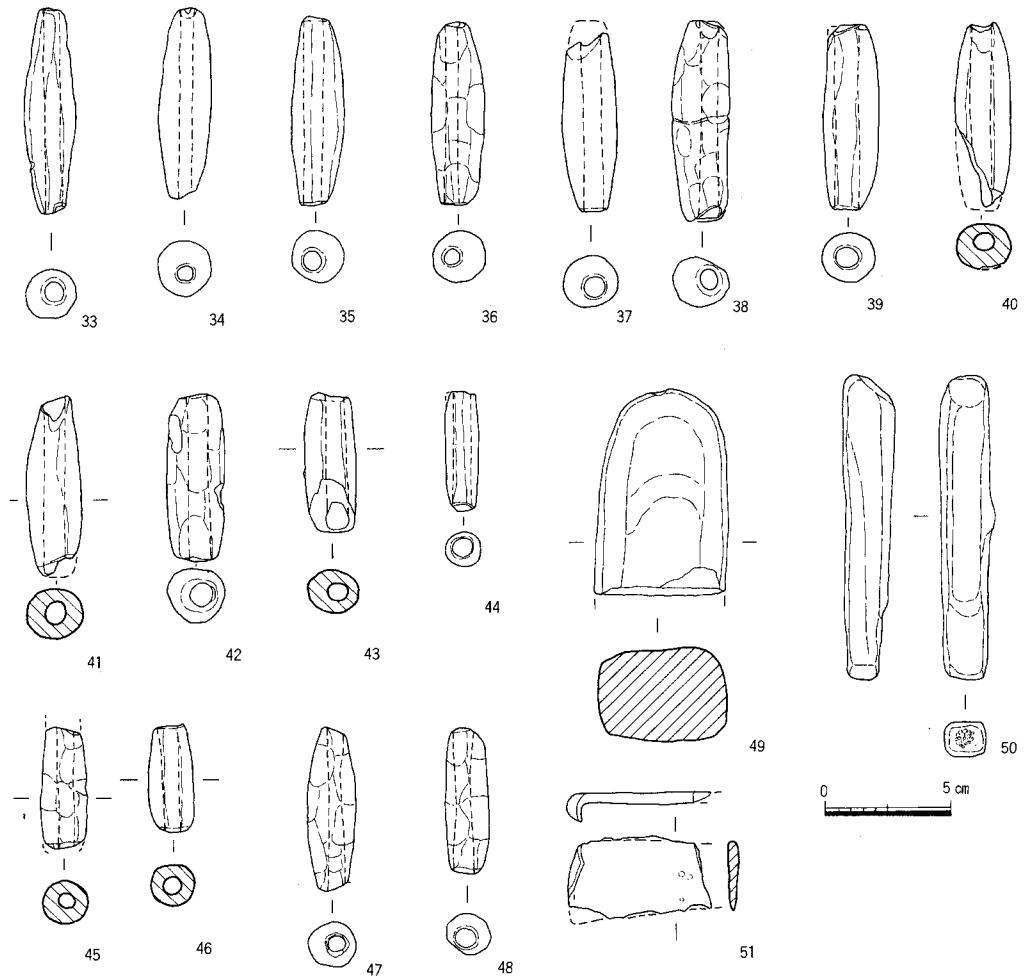


Fig. 55 第1面溝出土遺物2(1/3)

を取り上げたが、掘下げ後別遺構である事が判明した。埋土は黒褐色砂であるが、上層は暗く、下層は上より明るい。この溝は東側で検出されている第16・18次調査区の南北方向溝と埋土・規模がほぼ同じであり、その溝と直交して合流し、方形の区画を形成する可能性がある。遺物は弥生土器から中世の土師皿や輸入陶磁器などが出土している。

17・18は須恵器。17は高台付杯1/4片。復元高台径13.4cmを測る。杯内外面はナデ、外底は削りである。色調は灰色で、胎土は精良。18は壺口頸部1/3。頸部がしまり、肩が張る形態。外面には自然釉がかかるが、内面にはロクロ水引き痕が明瞭に残る。色調は外面が明灰色、胎土はやや不良で、石英・長石粒子を多く含む。19~21は土師器の杯。19は1/6片。復元口径13.6cm、器高2.6cmを測る。器壁はやや磨滅するが、内外面は横ナデ。底部は糸切り。

色調は明淡橙色を呈し、胎土は精良。20・21はいずれも底部片で、体部が内湾して開く器形。20は1/2片で、復元底径11.0cmを測る。器壁は磨滅が著しいが、外底には糸切り痕と板圧痕が残る。21は1/2片で、復元底径10.8cmを測る。外底は糸切りで板目が残り、その他はナデ。色調は20が明橙色、21が明褐色。胎土は20が精良、21が石英・長石・金雲母粒子を若干含む。22は白磁皿口縁部細片。うすい緑っぽい透明釉がかかる。23~26は龍泉窯系の青磁。23~25は碗。23は底部2/3片。見込みにヘラ切り文がある。くすんだ黄緑色釉が厚目にかかるが、発色はよい。24は底部片で、復元高台径6.0cmを測る。内外面くすんだオリーブ色の厚目の釉がかかる。見込みはヘラ切りによる花文が入る。25は口縁部1/5片で、復元口径16.0cmを測る。見込みには蓮華文がヘラ彫りされる。内外面くすんだ釉がかかる。胎土・焼成共に良好。26は皿1/4片。復元口径10.0cm、器高2.6cm、底径3.9cmを測る。見込みにはヘラ切りの花文が入る。外底は露胎で擦っている。その他は淡い黄緑色釉がかかり、細かい氷裂が入る。27は龍泉窯系の青磁碗の底部片を円板状に打ち欠いたものである。直径7~7.2cmを測る。玩具として用いたものであろう。28は須恵質の平瓦細片。凹面は細かいが布目、凸面は、斜格子の叩き目が残る。

37・38・42~46は管状土錘。ゆるい紡錘形のもの37、円筒形のもの38・42~46に分かれる。全体に器壁は磨滅するが指おさえ痕が残る。49は磨石であるが、下端部を欠失する。残存長8.3cm、最大幅5.2cm、現存高3.7cmを測る。全面擦っているが、上端には敲打使用痕が残る。石質は細粒砂岩である。50は敲石と思われる。細長い断面方形を呈する砂岩の転石を用いている。全面擦っている。下端部は使用面と思われ、敲打使用痕が残る。全長12.2cm、幅2cm前後を測る。下層出土でSD1017との混入の可能性もある。有田遺跡群第56次調査区出土のものに類例がある。51は鉄鎌片。全体に錆がひどいが左端は折り返しである。残存長5.6cmを測る。17・21・22~28・37・42~46・49・51が上層、19が中層、20・38・50が下層出土である。

SD1010 (Fig. 55)

SD1001南側に平行して延びる浅い小溝。規模は全長5.5m以上、溝幅40cm、深さ20cmを測る。埋土は黒味の強い暗褐色砂である。遺物は弥生土器や古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器・土錘などを含むが、大半が細片で、図示出来るものは少ない。

47はゆるい紡錘形を呈す管状土錘。完形で長さ6.5cm、幅1.9cm、孔径0.7cm、重さ18.7gを測る。

SD1017 (Fig.51・54・55・78)

SD1001に切られる東西方向に延びる溝で、主軸をN-83°30'-Eに取り、若干SD1001より南に振れる。遺構検出時、SD1001 b・cとして遺物を取り上げている。確認規模は長さ10m、幅1.8m以上、深さ60cmを測る。溝の断面形は緩やかなV字形を呈す。埋土は上層が淡黒褐色砂、下層は黒褐色砂に黄褐色砂を含む。この溝の続きを東側の第16・18次調査区では検出されておらず、詳細は不明である。遺物は古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器・須恵器などが

あるが大半が細片。器種としては竈・甕・高杯・蓋・土錘などがある。

29~31は須恵器。29は蓋の1/3片。口径が16cmを測る。天井部はヘラ削り、その他はナデ。色調は灰色で、胎土、焼成とも良好。30は高台付杯1/8片。復元高台径15.4cm、器高4.1cmを測る。内外面ナデ、色調は灰色で、胎土・焼成共良好。31は甕頸部1/10片。小片の為、復元径はやや難がある。外面は細かい格子目叩き、内面同心円状のあて具痕が残る。色調は灰色、胎土は石英・長石粗砂粒子を多く含む。32は土師器の椀1/6片。復元口径16.8cmを測る。内外面ヨコナデ、外面下半は斜めヘラ削り、又はナデが残る。色調は明橙色。胎土は精良であるが、赤色粒子を含む。

33~36・39~41・48は管状土錘、形態的にゆるい紡錘形を呈すもの31~36・40・41と円筒形を呈すもの39・48に分ける。33~36・39~41は大形品で、8.3cm・7.5cm・7.5cm・7.4cm・7.5cm・(7.4cm)・(7.2cm)、重さ25.4g・29.8g・27g・26.1g・28g・(23.2g)・(24.5g)を測る。48は中形品で、全長5.7cm、最大径1.7cm、孔径0.8cm、重さ14.8gを測る。器壁は全体的に磨滅が著しいが指おさえ仕上で、紐ずれ痕らしき擦痕を残すものもある。

(3) 第2面の調査 (Fig. 56・82)

竪穴住居址

SC2005 (Fig. 57・58・83・95)

調査区北西隅で検出したが、SD1001・1017に切られ、全容は不明である。第2面では明確な平面形態を確認出来なかつたが、第3面迄掘り下げてようやく確認した。東壁中央に竈を持つ方形の住居址である。確認規模は東壁3.1m以上、南壁3.6m以上、壁高は西壁土層で45cmを測るが、壁の立上りは傾斜が緩くなっている。竈は約0.8×0.8mの範囲の焼土塊を含む明橙色粘土ブロックである。竈は形が崩れており、明確な竈の形態は確認出来なかつた。この粘土を取ると、焼土面が広がる。支脚等はなかつた。第15次調査検出のSC24と住居・竈の方向が同一方向である。この住居の主柱はP1と考えられ、位置形態から4本柱であると予想される。遺物は古墳時代後期の土師器・須恵器・土錘・滑石製の紡錘車形石製品がある。床面密着のものはない。

52は須恵器の短頸杯1/8片。復元口径4.4cmを測る。内外面横ナデ。肩部に蓋状のかぶせものの痕跡が残る。色調は灰色で、胎土は精良。53~56は土師器の甕。53は口縁1/4片で、復元口径17.0cmを測る。口端部は内面上方にややつまみ上げる。器壁はやや磨滅するが、胴外面は細かい斜め刷毛、口縁内面は横ナデ。胴内面には指おさえ痕が残る。54は口縁部細片で、外表面はナデ。胴内面はヘラ削りかナデで工具痕が残る。55は小形甕の口縁部小片。口縁の開きは極めて小さい。胴部外面には煤が付き、内面はヘラ削り、色調は53が明橙色、54が灰色、55が暗褐色、胎土は53が石英・長石細粒を多く含み、54・55は石英・長石粒子を余り含まない。56

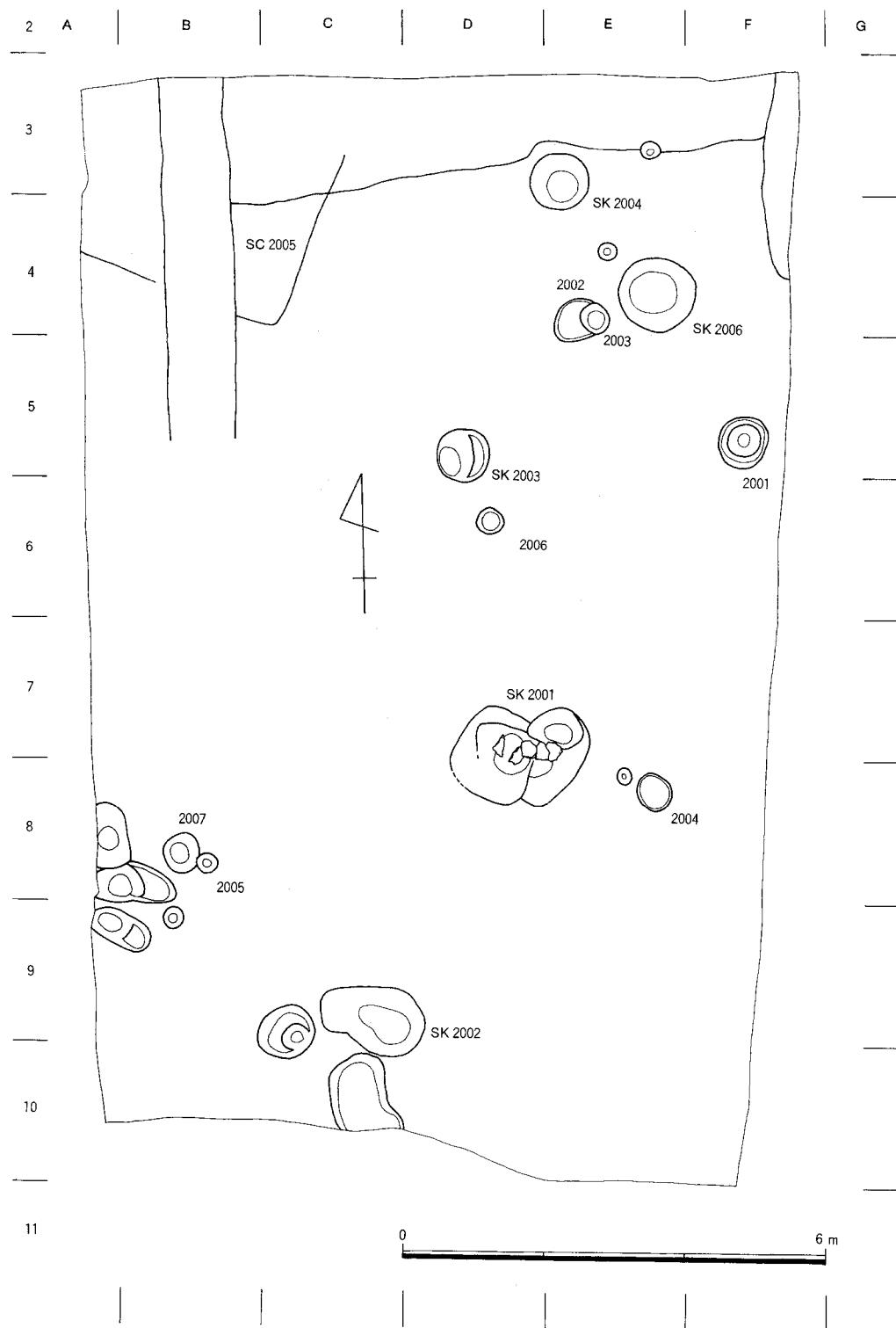


Fig.56 第2面 全体図(1/100)

は管状土錘片である。ゆるい紡錘形を呈すもので、残存長4.1cm、重さ12.7gを測る。指おさえ痕が残る。57は滑石製の紡錘車形の石製品。大きさは上面で直径2.6~2.9cm。底面で直径3.4~3.7cm、高さ2.25cmを測る。上面・底面は丁寧な研磨、側面は削りである。形態は紡錘車に似るが、中央部に穴があいていない。

土坑

SK2001 (Fig. 59·60·84)

6 D・7 D区周辺で検出した不定形状の土坑。底面は凹凸があり、又形が複雑であるので、遺構が切り合う可能性がある。規模は長軸2m、短軸で1.4mを測る。深さは最大で40cm程であるが、長さ20~30m、厚さ2~5cm程の玄武岩の板材が5枚程底の方に流れ込んでいた。石棺の石材として用いられたものかもしれない。遺構の北東側に表面から10cm程の深さに骨片が少量まとまって出土した。埋土は暗褐色砂又は黒褐色砂である。遺物は古墳時代後期の土師器・須恵器の細片を少量含む。器種としては杯身、杯蓋、竈、甕、高杯などがある。

58・59は須恵器。58は杯蓋1/6片。復元口径7.8cmを測る。天井部は高く、やや丸味を帯びる。天井部はヘラ削り、その他はナデ又は不整ナデ。59は杯身1/8片。口端部は欠失するが、調整は横ナデ。色調はいずれも暗灰色で、胎土は長石・石英粒子をわずかに含む。

SK2002 (Fig. 59·85)

8 C区で検出した東西方向に主軸を取る隅丸長方形を呈する土坑。南東側は他遺構と切り合う。規模は1.35×0.67m、深さ60cmを測る。埋土は淡黒褐色砂で、切っている土坑は暗褐色砂である。遺物はなかった。

SK2003 (Fig. 59)

4 D区で検出した円形土坑。図示していないが、規模は0.75×0.75mを測る。底面は東側に一段テラスを持ち、深さは最深部で40cm、テラス部で15cmを測る。埋土は暗褐色砂である。遺物は土師器・須恵器の細片を少量含む。

SK2004 (Fig. 59·60·87)

2 E区で検出した円形土坑。規模は0.85×0.8m、深さ60cmを測る。埋土は橙色粘土に黒褐色砂を混入するが、下の方は明褐色砂を混入する。遺物は古墳時代後期以降の須恵器・土師器や土錘、鉄釘などが出土している。

61は須恵器。60はV期の杯蓋1/2片で、内面に嘴状のかえりが付く。天井部は回転ヘラ削り、その他はナデ。ろくろ回転は時計回り。61はIV期の杯身1/4片で、復元口径9.2cmを測る。底部はヘラ切り未調整。その他は横ナデで、内底は不整ナデである。色調は60が暗赤褐色、61が青灰色を呈す。胎土は60が石英・長石粒子を含み、61が若干石英粒子を含む。62は土師器の小形甕で、復元口径17.2cmを測る。胴部が余り張らない器形である。外面は磨滅が著しいが、指おさえ痕が残る。内面はヘラ削りである。63は把手で、全面指おさえ痕が残り、斜めに粗い刷

毛目が残る。64はゆるい紡錘形を呈す管状土錐。全長7.1cm、直径1.8cm、孔径0.8cm、重さ18.7gを測る。端部は一部欠失するが、下端には浅い溝状の刻みが入る。65は鉄釘である。釘頭がやや曲がり、先端を欠失する。断面及び釘頭は方形を呈す。全体に錆がひどい。残存長5.9cm、一辺0.5cmを測る。

SK2006 (Fig. 59・86)

調査区北側検出の径1.05×1.08m、深さ0.4mを測る円形の土坑。埋土は黒褐色色砂。遺物は出土しなかった。

(4) 第3面の調査 (Fig. 61・89)

掘立柱建物

復元したのは2棟である。

他にも柱穴としてしっかりしたもののがあるが、狭い調査区の為復元しえなかった。

SB3007 (Fig. 62・90)

調査区中央北側で検出した主軸をN-19°-Eに取る1×2間の建物。東側桁側のP2は

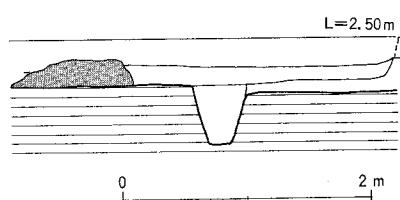
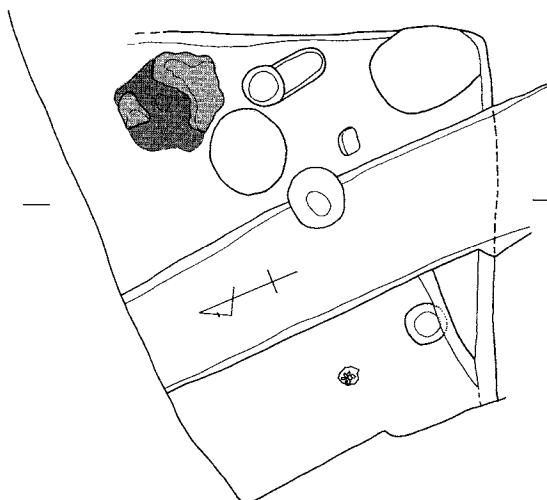


Fig. 57 SC2005(1 / 60)

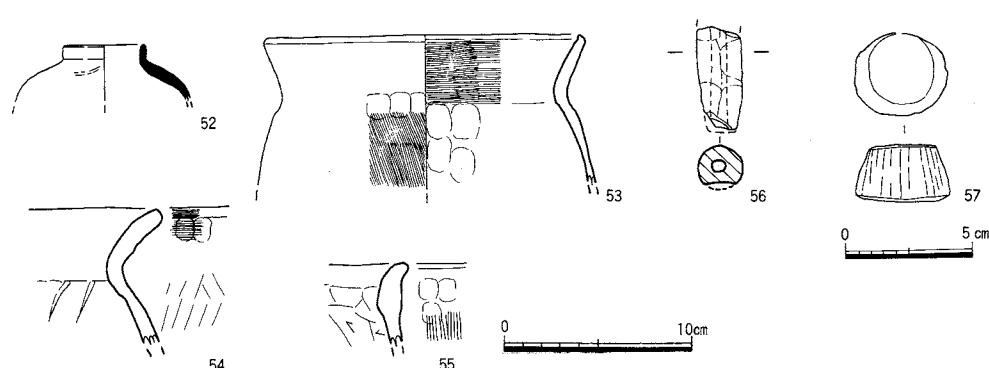


Fig. 58 SC2005出土遺物(1 / 4・1 / 3)

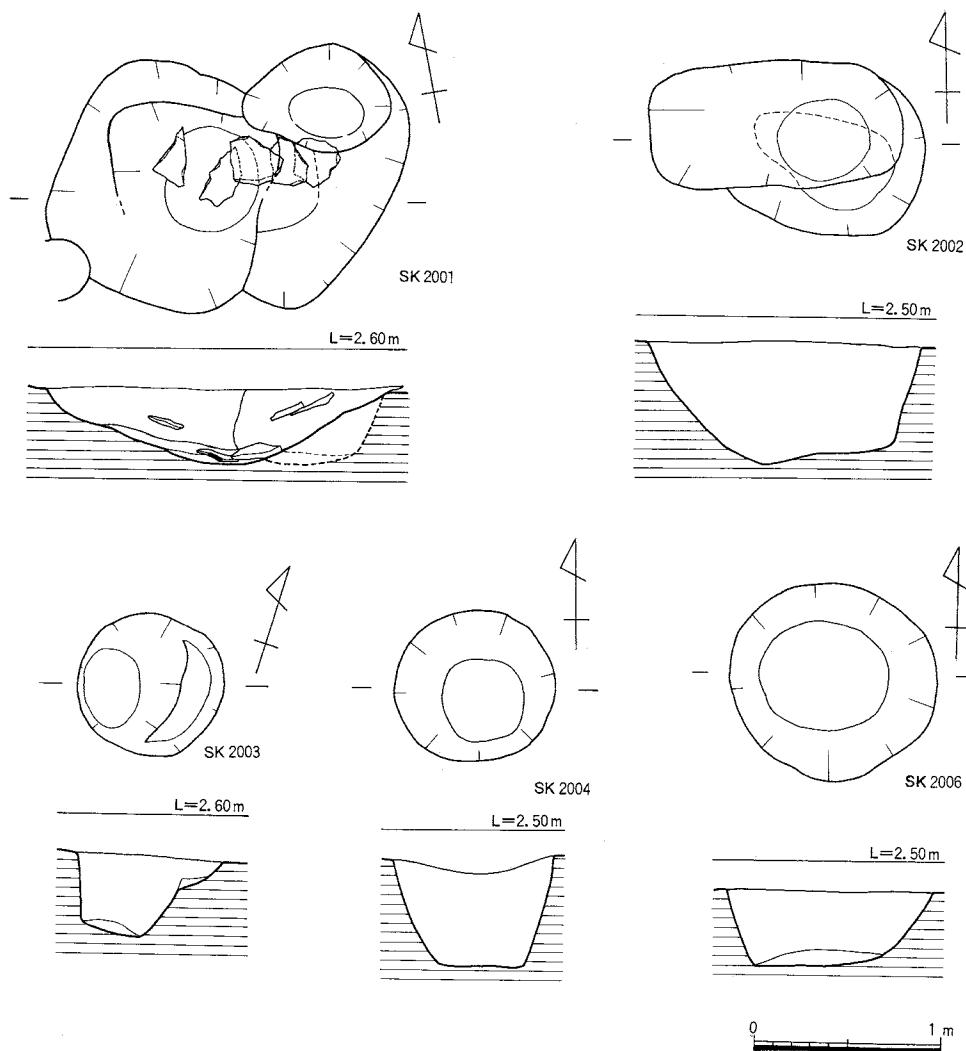


Fig. 59 第2面出土土坑(1/40)

SB3008-2と重複する。規模は桁行全長3.03m、梁間全長2.21m、床面積6.70m²を測る。柱穴掘方平面は円形で、直径は0.80~0.95m、深さは35~55cmを測り、大きくしっかりしている。埋土は黒褐色又は暗黄褐色砂で、橙色ロームブロックを混入する。各柱穴から遺物が出土しているが、土師器・須恵器の細片である。

SB3008 (Fig. 62·63·90)

調査区北側で検出した主軸をN-80°-Eに取る2×3間の建物である。主軸方向はSD1017と近い。規模は桁行全長6.3~6.34m、梁間全長4.12~4.45m、床面積30.34m²を測る。柱筋はいびつで、全体の柱間は均等でない。柱穴掘方平面は円形で、直径45~85cmと比較的大きい。深さは25~50cmを測る。埋土は暗褐色砂又は黒褐色砂である。遺物は古墳時代の須恵器や土師

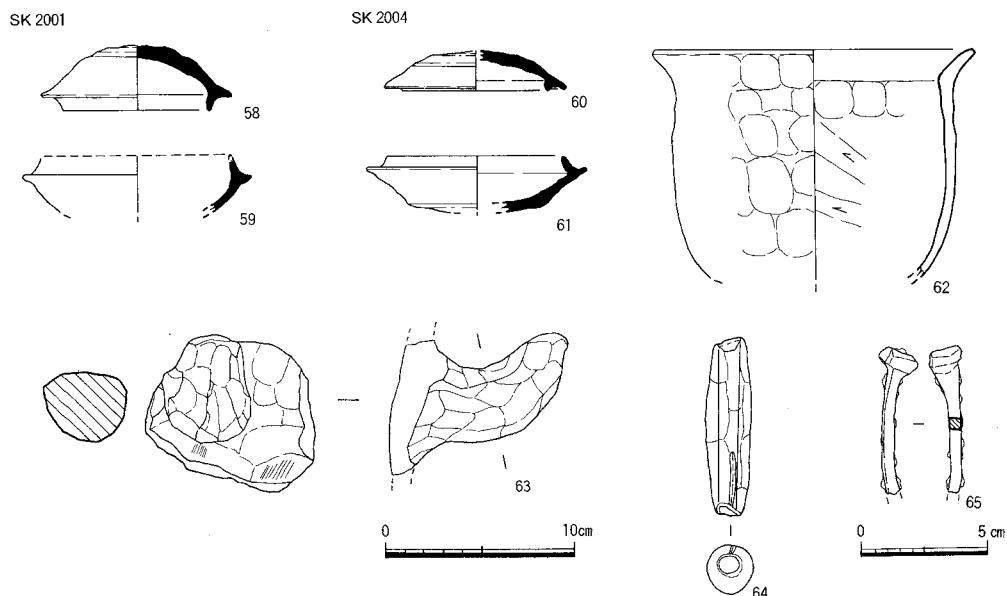


Fig. 60 第2面土坑出土遺物(1/4・1/3)

器の細片を少量ずつ含み、図示しうるものは少ない。

66は北東の隅柱P10から出土した土師器の鉢1/4片。復元口径10.5cmを測る。やや尖り気味の底部から口縁部が段を持って外へ開く器形。外底はヘラ削り。口縁外面はヘラ磨きである。色調は明赤褐色、胎土は1~2mmの細砂粒を含む。67は移動竈の焚口沿いに付くひれ状の突帯部片である。全面に指おさえ痕が残る。色調は淡橙色、胎土は精良で赤色粒子を多量混入。

土坑

番号を付したのは7基であるが、主なものについて記述する。

SK3003 (Fig. 64·91)

調査区南側で検出した橢円形状を呈す土坑。規模は長径1.7m、短径1.60mを測る。大型の土坑であるが、深さは15cmと浅い。上面からピットが切り込んでいる。埋土は暗褐色から黒褐色砂で、黄白色砂の地山ブロックを混入する。遺物は土師器の細片を少量含む。

SK3004 (Fig. 64·65·93·96)

南側拡張区で検出した不整円形を呈す土坑。SK3011に切られる土坑。規模は直径1.8×1.9mを測る。底面は北西側が一段テラス状に高く、SK3011と切り合う部分が一段落ち込む。テラス迄の深さは20~30cm、最深部は40cmを測る。埋土は黒褐色砂である。遺物は土師器や須恵器の甕などをややまとめて含むが、図示出来るものは少ない。

69~71は須恵器。69・70は短い高台の付く杯。69は1/6片で、復元高台径8.8cmを測る。内外面ナデ。70も1/6片で、復元高台径9.1cmを測る。外底はヘラ削りするが、その他はナデ。



Fig.61 第3面 全体図(1 / 100)

71は杯 1 / 6 片で復元底径9.8cmを測る。外底はヘラ削りするが、その他はナデ。色調はいずれも灰色、胎土は69・70が精良、71が石英・長石粒子を多く含む。

72は土師器の高杯脚部片。脚が湾曲して大きく開く器形。外面はナデ、内面にしづら痕が残る。

73は土師器の支脚と思われる。残存長10.1cmを測る。断面は長方形で、外面前りを加え後ナデる。色調は72が明橙色、73が淡橙色。胎土は72が赤色粒子を含むが精良、73が1~4mmの石英・長石粒子を多く含む。

SK3005 (Fig. 64·65·92)

調査区南壁境界地で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は直径1.15×1.06m、深さ50cmを測る。底部は明確な土色の違いがなく、やや掘りすぎた可能性がある。埋土は上層が暗褐色~淡黒褐色を呈する砂に黄褐色砂ブロックを混入するが、下層は上層より黄褐色砂の混入が多い。遺物は土師器の甕・盤・須恵器の壺の細片が少量出土。

74はゆるい紡錘形を呈す管状土錐。上半1/2を欠失する。残存長4.2cm、重さ13.4gを測る。

SK3011 (Fig. 64·65·93)

SK3004を切る円形の土坑。直径1.1×1.15m、深さ40cmを

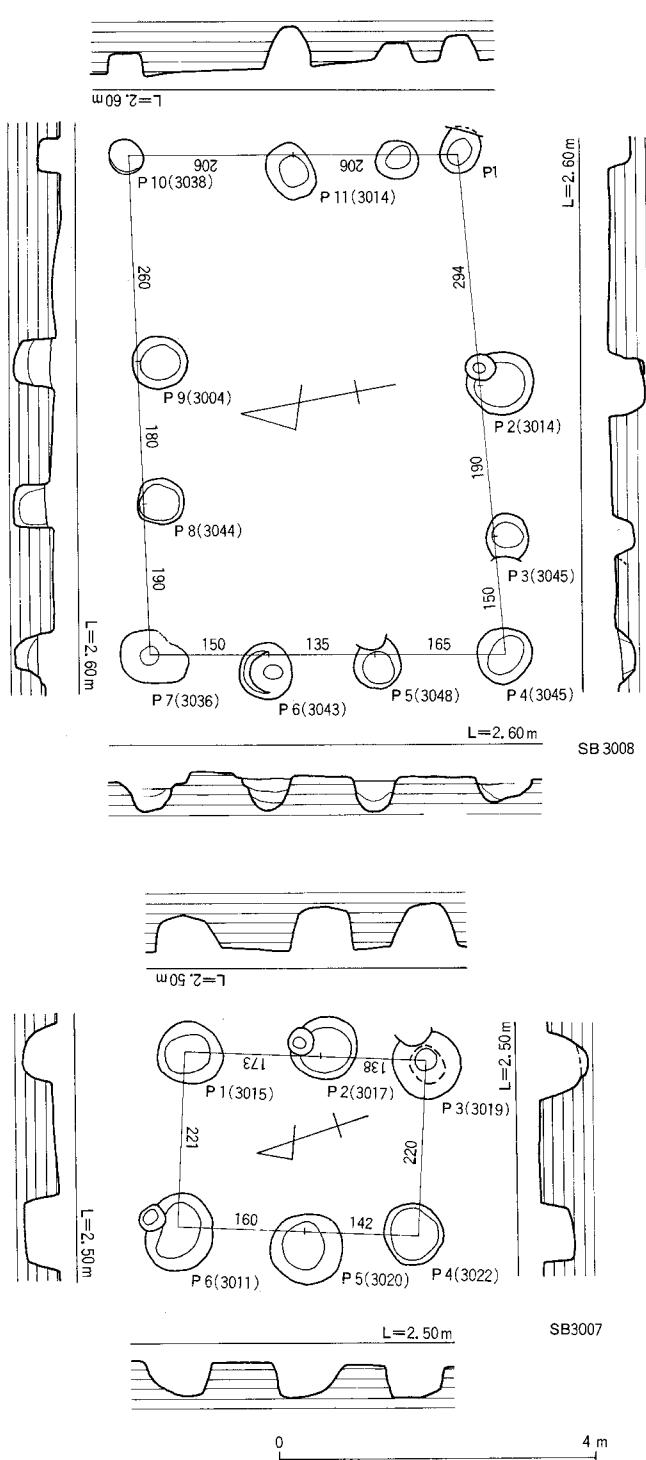


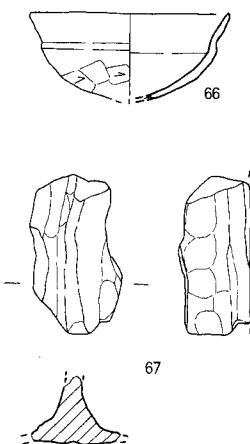
Fig. 62 SB3007 · 3008(1/100)

測る。埋土は褐色砂で、下方は鉄気が混じる。遺物は古墳時代の土師器・Ⅳ期の須恵器68等を含む。

68は、杯身1/6片で、復元口径8.6cmを測る

SP3031 (Fig. 66・94)

調査区東壁南側境界地で検出した根石を持つ柱穴。平面形は橢円形で、直径65cm、深さ35cmを測る。底より15cm程浮いた所に、35×30cm、厚さ12~14cmを測る菱形の上面が平坦な根石があった。上面はほぼ水平である。石質は堆積岩系か。遺物は土師器の細片が2点出土している。

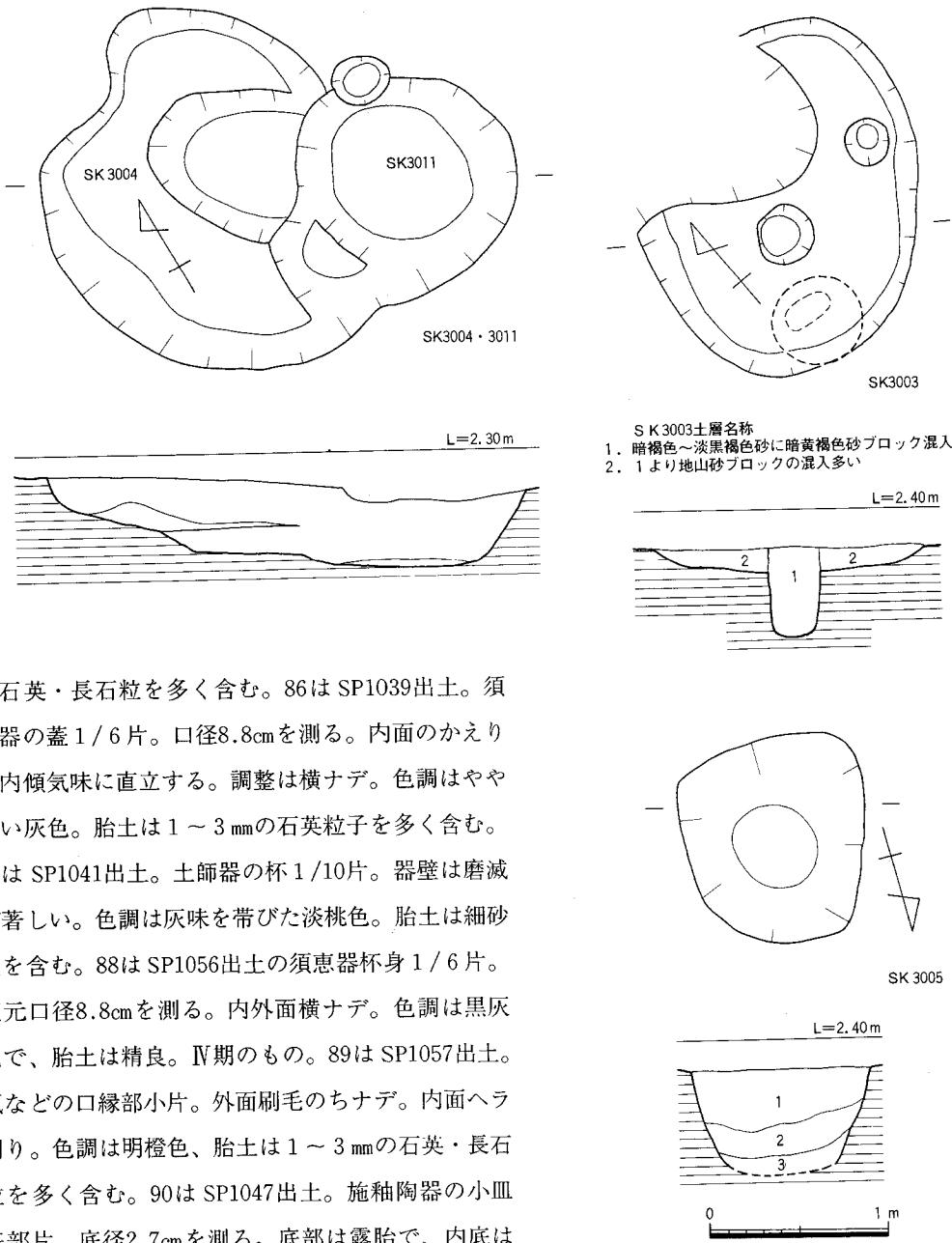


(5) 各面ピット出土遺物 (Fig. 67・96・97)

ピットは3面の遺構面毎に検出している為、各面それぞれ独自で番号を付けている。第1面はSP1001~、第2面はSP2001~、第3面はSP3001~である。

Fig. 63 SB3008出土遺物(1/4)

75はSP1051出土。土師器皿1/2弱片。復元口径9.2cmを測る。器高1.3cmを測る。底部は糸切り、内底は不整ナデ、その他は横ナデ。色調は明橙色を呈し、胎土は精良。76・77はSP1006出土。76は1/8片。かえりが内傾気味に直立する器形。復元口径10.4cmを測る。内外面横ナデ。色調は灰色を呈し、胎土に1~3mm砂粒を若干含む。77は無釉陶器と思われる盤口縁部1/10片。復元口径22.8cmを測る。色調は赤褐色、胎土は1~3mmの石英粒子を多く含む。78はSP1011出土。褐釉陶器の鉢1/2片。復元口径19.4cmを測る。外底部周辺と口縁部に煤が付着する。黄褐色の釉がかかるが、2次の火力を受けたのが発泡し、また釉がはげている。胎土は精良。79はSP1013出土。土師器皿1/2弱片。復元口径8.6cm、器高1.3cmを測る。全体に磨滅するが、外底は糸切り、その他はナデ。内底に指おさえ痕が残る。色調は明淡褐色を呈し、胎土に金雲母・細砂粒を含む。80はSP1030出土。須恵器の杯底部1/4片。復元底径8.8cmを測る。底部と体部の境に浅い沈線が2条巡る。外底はヘラ削り、内底不整方向のナデ、その他は横ナデ。色調は灰色、胎土は精良である。81・82はSP1035出土。須恵器の短頸壺細片。色調は暗灰色、胎土は精良。82は把手で、さし込み式である。全面に指おさえ痕が残る。色調は明橙色で、胎土は1~4mmの石英・長石粒子を多く含む。83~85はSP1036出土。いずれも奈良時代のもの。83は須恵器の皿2/3片。復元口径14.5cm、器高2.4cmを測る。底部はろくろの巻上げ痕が残る。内底は不整方向ナデ。その他は横ナデ。色調は灰色。胎土は精良。84は須恵器の高台付杯1/4片。復元高台径10.5cmを測る。内外面横ナデ。色調は灰色で、胎土は精良。焼成はやや不良。85は土師器の甕口縁部小片。復元口径24cmを測る。口縁部がく字状に外反する器形。外面は指おさえのち刷毛目、内面はヘラ削りする。色調は灰黄褐色。胎土は1~3mm



の石英・長石粒を多く含む。86はSP1039出土。須恵器の蓋1/6片。口径8.8cmを測る。内面のかえりは内傾気味に直立する。調整は横ナデ。色調はやや暗い灰色。胎土は1~3mmの石英粒子を多く含む。87はSP1041出土。土師器の杯1/10片。器壁は磨滅が著しい。色調は灰味を帯びた淡桃色。胎土は細砂粒を含む。88はSP1056出土の須恵器杯身1/6片。復元口径8.8cmを測る。内外面横ナデ。色調は黒灰色で、胎土は精良。Ⅳ期のもの。89はSP1057出土。甌などの口縁部小片。外面刷毛のちナデ。内面ヘラ削り。色調は明橙色、胎土は1~3mmの石英・長石粒を多く含む。90はSP1047出土。施釉陶器の小皿底部片。底径2.7cmを測る。底部は露胎で、内底は緑色の灰釉が厚目にかかる。色調は外面褐色を呈し、胎土は灰色で精良。91はSP2002出土。須恵器の杯蓋1/3片。復元口径15.6cm、器高2.6cmを測る。天井部に扁平なつまみが付く。天井部外面は回転ヘラ削り、内底は不整方向ナデ、その他は横ナデ。色調

S K3005土層名称

1. 暗褐色～黄黒褐色砂に暗黄褐色砂ブロック混入
2. 1より暗黄褐色砂ブロックの混入多い
3. 明灰褐色砂に明褐色砂・橙色砂小ブロック混入（掘りすぎか）

Fig.64 第3面 出土土坑(1/40)

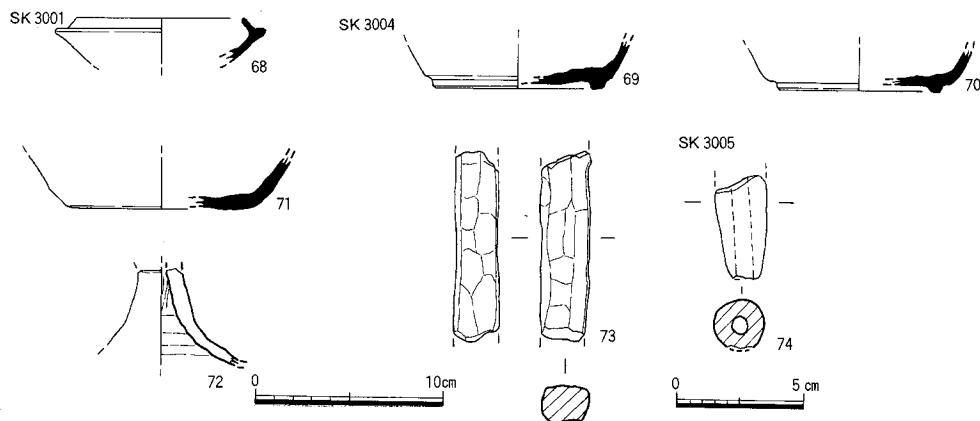


Fig. 65 第3面 土坑出土遺物(1/4・1/3)

は灰褐色、胎土は石英・長石粒子を少量含む。92はSP3005出土。須恵器の蓋1/4片で復元口径8.8cmを測る。内外面ナデで、天井部外面には自然釉がかかる。色調は暗灰色、胎土は1~2mmの石英・長石粒子を多く含む。93はSP3009出土。土師器の甕1/6片。頸部のしまらない器形。胴部外面は2次的火力を受けた為か、器壁が剥落し、かつ煤が付いている。調整は外面はナデのち縦又は斜め刷毛、内面はヘラ削りする。色調は外面暗灰色、胎土は1~3mmの石英・長石粒子を多く含む。94は93とほぼ同形の甕SP3018出土。復元口径16.6cmを測る。95~97はSP3037出土。95は蓋の1/4片。復元口径7.6cm、器高2.3cmを測る。器壁はやや磨滅するが、天井部は回転ヘラ削り、その他はナデ。色調は灰白色、胎土は1~3mmの石英・長石粒子を多く含む。焼成はやや甘い。V期のものか。96は盤1/6片で、復元口径22.8cmを測る。底部と口縁部の境に浅い沈線が巡る。外底部は静止ヘラ削りで、内底は不整方向ナデ。その他は横ナデ。色調は外面暗灰色、内面は暗灰から赤褐色を呈す。胎土は1~3mmの石英粒子を含む。同様の器形のものはE6区第1面下からも出土している。97は管状の土錘で、ゆるやかな紡錘形を呈す。上下両端を欠失するが、残存長5cm、直径1.6cm、孔径0.8cm、重さ9gを測る。表面は磨滅がひどい。98はSP3031出土の鉄釘である。釘先は曲がり、かつ欠失している。頭及び断面は方形を呈す。残存長5.2cm、一辺0.6cmを測る。全体に錆

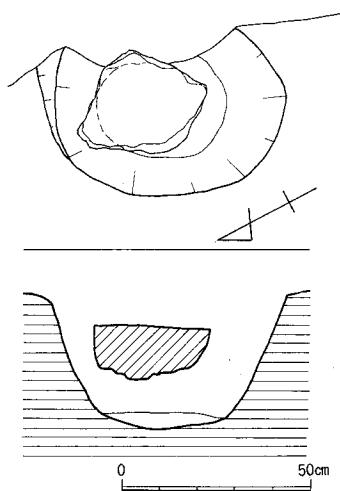


Fig. 66 SP3031(1/20)

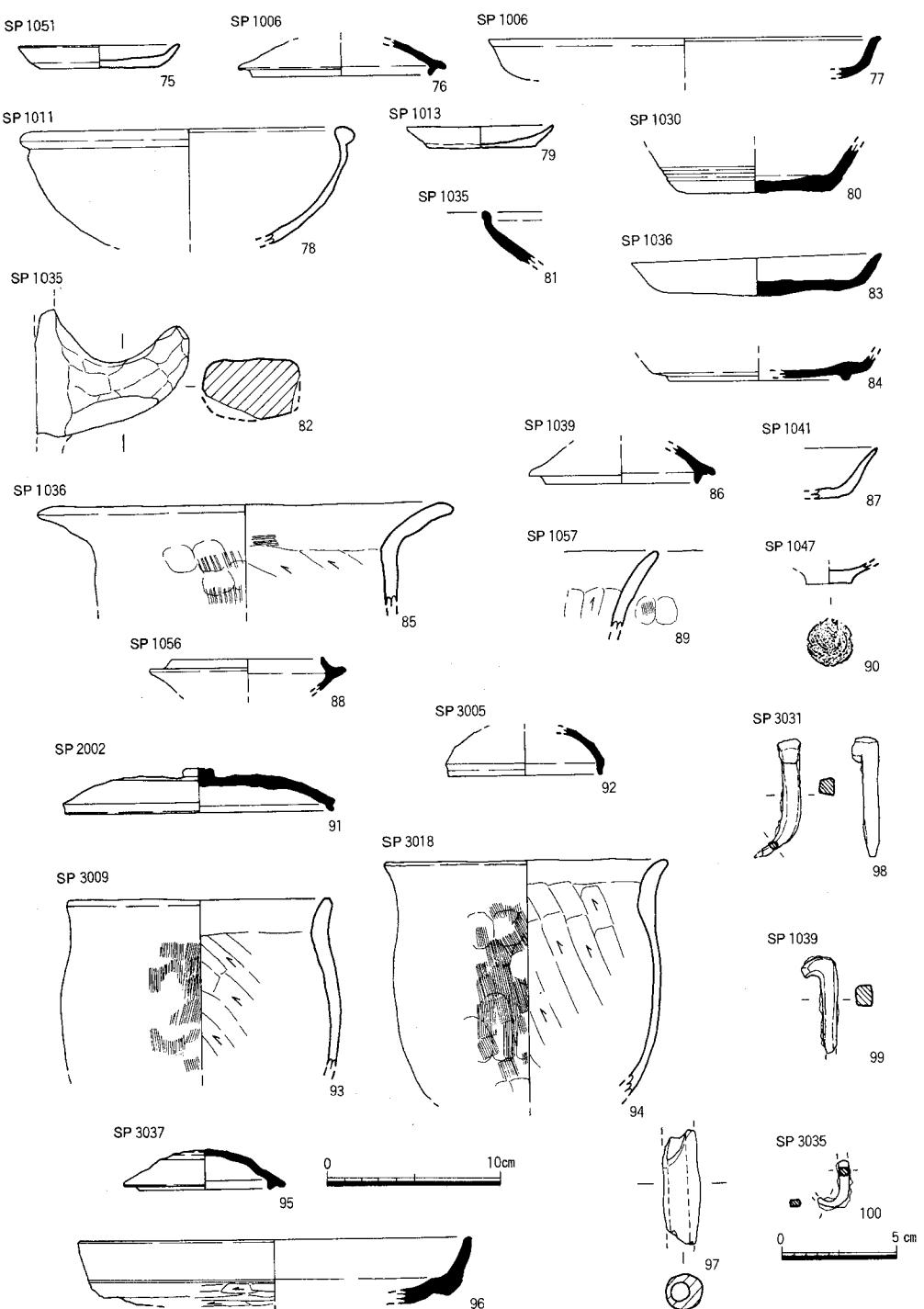


Fig.67 ピット出土遺物(1/4・1/3)

がひどい。99はSP1039出土の鉄釘。頭は曲がり、先端は欠失する。残存長4.2cm、断面は方形で、 0.6×0.8 cmを測る。全体に錆がひどい。100はSP3035出土。釣針のように曲がった不明鉄製品。残存長2cmを測る。断面は方形又は長方形を呈す。全体に錆がひどい。

(6) 遺構面出土遺物 (Fig. 68~70・97)

遺構面を掘り下げる時、多量の遺物が出土しているので報告する。面としては第1面下の堆積層からの出土が一番多かった。

101~111は第1面から第2面迄の出土。101~109は須恵器で古墳時代後期から奈良時代迄の遺物を含む。101はE9区出土の小形壺1/4片。復元口径6.0cm、最大胴径8.0cmを測る。胴部上半に一条沈線が巡る。内外面ナデるが、上半には自然釉がかかる。色調は灰色を呈し、胎土は精良。102はC5区出土。杯蓋1/6片で、復元口径15.4cmを測る。内外面横ナデ。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は細砂粒を若干含む。103はE9区出土。杯蓋1/2片。復元口径14.8cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削り、天井部内面は不整方向ナデ、その他は横ナデ。ろくろ回転は時計回り。色調は淡灰褐色を呈し、胎土は精良。104はF9区出土。杯蓋1/4片で、復元口径8.2cmを測る。内面にかえりが付く。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不整方向ナデ、その他は横ナデ。天井部にヘラ記号がある。色調は青灰色、胎土に1~2mmの細砂粒を含む。105はE4区出土の杯蓋1/6片。復元口径8.4cmを測る。天井部が高く丸味を帯びる器形。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不整方向ナデ、その他は横ナデ。色調は灰色、胎土は精良。106はF5区出土の杯身1/2片。復元口径8.4cm、器高3.1cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削りのち雜なナデ、内底は不整方向ナデ、その他は横ナデ。外底部にヘラ記号がある。色調は暗青灰色、胎土は1~3mmの石英・長石粒子を混入。107はF5区出土の杯身1/4片。復元口径9.0cm、器高3.2cmを測る。外底ヘラ削りのちナデ、その他は横ナデ。色調は灰色で、胎土に石英・長石細粒を少量含む。108はD5区出土の高台付杯1/4片。復元高台径9.8cmを測る。高台はく字状に外折する。内底はナデ、外底は削りのちナデ。色調は赤褐色、胎土は石英・長石細粒を多く含む。109はD7区出土のⅣ期の杯身1/6片。復元口径10.4cmを測る。色調は暗青灰色を呈し、胎土は1~3mmの石英粒子を多く含む。110はD10区出土の甌と思われる小片。小片の為復元にはやや難がある。口縁外面は器壁が剥落している。別器種の可能性もある。色調は明橙色、胎土は石英・長石粒を多く含む。111は土師器の把手。さし込み式で全面指おさえ痕が残る。色調は明橙色、胎土は石英・長石細粒を多く含む。112~113は第2面下で出土。112はC3・4区出土の須恵器杯と思われる1/5片。復元口径15.8cmを測る。内外面横ナデ、形態的に見て奈良時代のものか。113もC3・4区出土の土師器の甌胴部片。把手が付く。外面はやや磨滅するが細かい縦刷毛、内面はヘラ削り。把手部分は指おさえ。色調は淡橙色、胎土に石英・長石細粒を多く含み、金雲母片も少量含む。

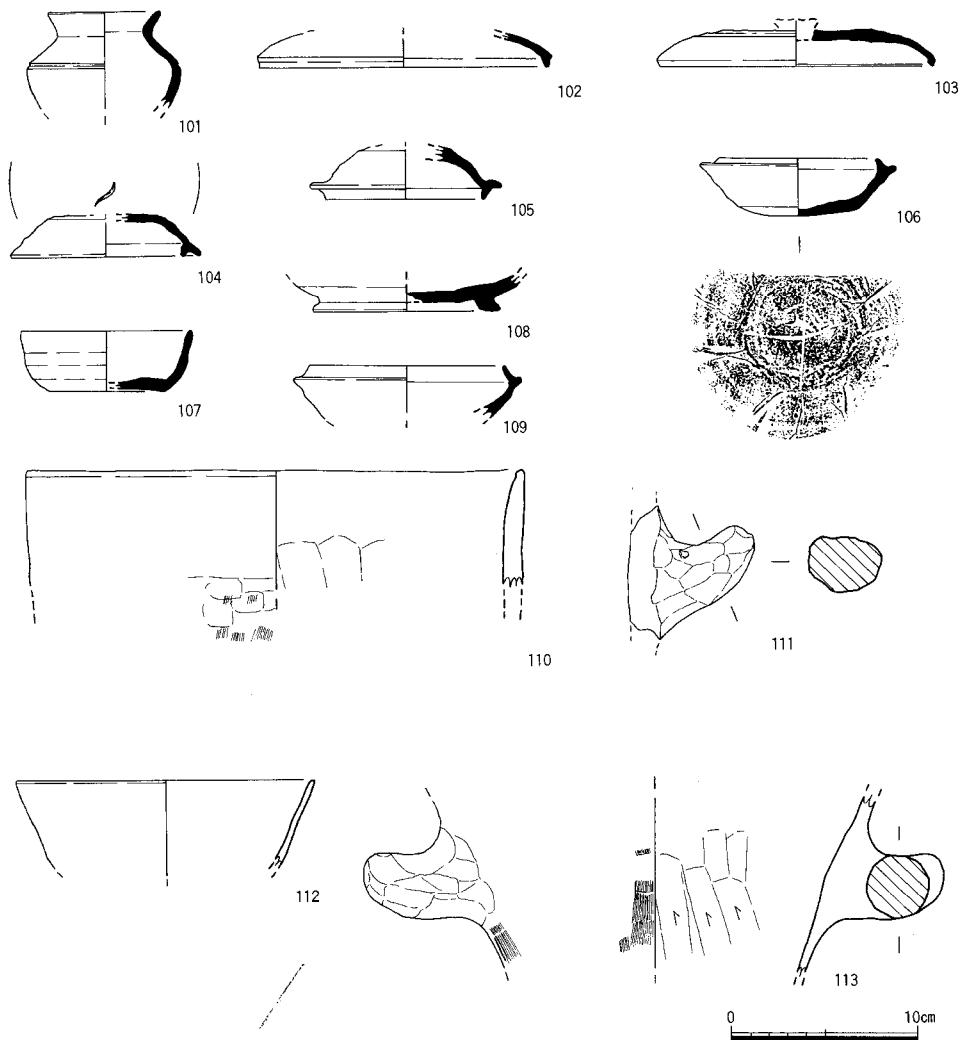


Fig. 68 遺構面出土遺物 1 (1 / 4)

114~146は土錘。形態的に棒状で両端に円孔を持つものA類（114）、管状のものB類（115~146）に分かれる。またB類の管状土錘は更に円筒状のものB1（118・144・145）、紡錘形に近い形のものB2（115~117・119~143・146）に分かれる。B2のものは形態がきっちとしたものや、やや断面扁平で餃子形を呈すもの（129・131）などバラエティーに富む。法量は長さが3.7~8.4cm、重さが8~46.6gとかなりバラツキがある。調整は指おさえであるが、表

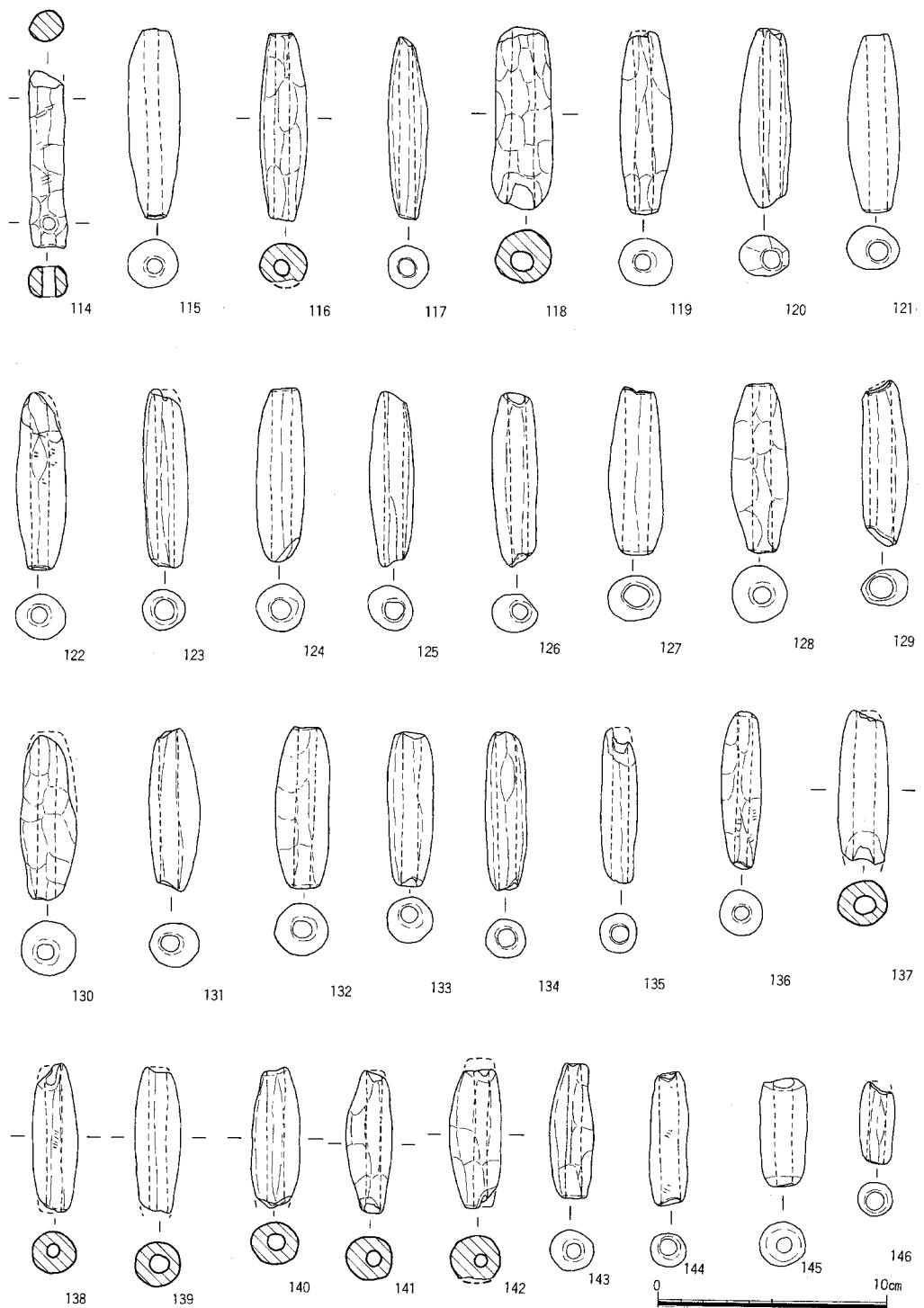


Fig.69 遺構面出土遺物 2 (1 / 3)

面に紐ずれの擦痕を残すものもある。

147はE 5区出土の形態が橢円形を呈す磨石と思われるもの。長さ8.3cm、幅4.5cm、厚さ3.1cmを測る。全面ツルツルに磨滅している。石質は玄武岩。148はC 3・4区出土の軽石製の浮子。長さ3.0cm、幅2.6cm、重さ5.6gを測る。この手のものは藤崎第11次調査でも出土している。149～151は鉄製品。149はB 6区出土の不明鉄器片。残存長5.4cmを測る。断面は下辺が刃部状に尖る。全体に錆がひどい。第9次調査区21号土壙（古墳時代）に同様のものがある。

150はD 9区出土の刀子茎部片。残存長5.7cm、刃幅1.0cmを測る。151は釘片。残存長5.1cmで、断面は方形一辺0.6cmを測る。頭部はつぶれている。全体に錆がひどく、砂粒が付着。147・149～151は第1面下、148は第2面下出土である。

(7) 包含層出土遺物 (Fig. 71～73・97)

第1面上面の包含層からは多量の遺物が出土している。遺物は古墳時代後期から中世迄の遺物を含む。

152・153は白磁。152は皿底部1/4片で復元底径6.0cmを測る。底部は平底で、体部との境にわずかな段が付く。内外に乳白色釉がかかるが底部は露胎。表面は細かい冰裂、気泡が入る。胎土・色調は灰白色で精良。焼成はやや不良。153は椀底部1/2片。復元高台径7.2cmを測る。高台部は削り出しで露胎。その他は厚目の乳白色釉がかかり、細かい冰裂が入る。胎土は白色で精良。口縁が玉縁状を呈すものであろう。154は褐釉の盤底部片か。復元底径7cmを測る。外底周辺は回転ヘラ削りで露胎。内面は部分的に剥落するがうぐいす色の釉がかかり、粘土目痕が残る。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良。155は須恵質の片口捏鉢口縁部細片。内面は細かい刷毛、外面指おさえ痕が残る。色調は灰色、胎土に石英・長石粒子を多く含む。156～158は土師器。156は杯1/2片。ややひずむが復元口径14.0cm。器高2.4cmを測る。外底は回転糸切り、その他はナデ又は横ナデ。色調は明橙色を呈し、胎土は精良、金雲母を多く含む。157は1/3片で、復元口径14.0cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切りで、板目が残る。調整はナデ又は横ナデ。口縁部に一ヶ所片口状に指でつまみ仕上を施した部分がある。158は蛸壺と思われる尖り気味の丸底底部片。色調は明灰色、胎土に石英・長石粗砂粒を含む。焼成は良好。159～167は須恵器。159～161は蓋。159・160は奈良時代の扁平な天井部の蓋1/6片。

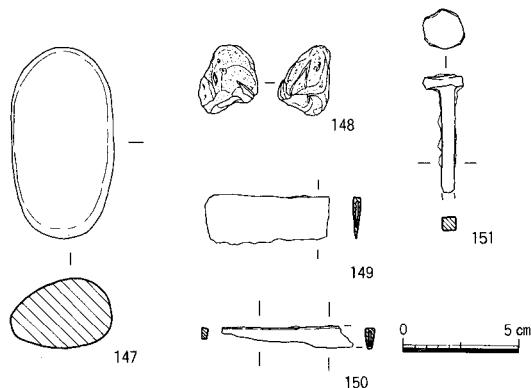


Fig.70 遺構面出土遺物 3(1/3)

本来はつまみが付く。調整は天井部が回転ヘラ削り、その他は横ナデ。復元口径は159が18.1cm、160が18cmを測る。胎土はいずれも精良。色調は159が灰色、160が灰白色を呈す。161は1/6片で、内面にかえりが付く器形。復元口径12.0cmを測る。内外面横ナデ調整。色調は暗褐～灰褐色、胎土はほぼ精良。162はⅣ期の杯身1/2片。復元口径10.6cm、器高3.2cmを測る。立ち上りの内傾は強い。外底は回転ヘラ削りのち雜なナデ仕上。内底は不整方向ナデ。その他は横ナデ。色調は灰色、胎土は石英・長石粒を多く含む。163は奈良時代の皿1/6片。復元口径17.4cm、器高2.9cmを測る。外底は雜なナデ、その他は横ナデ。色調は明灰褐色を呈し、胎土は精良、焼成はやや甘い。164は高台付杯1/4片。復元口径13.6cm、器高4.0cmを測る。外底は回転ヘラ削り、その他は回転横ナデ、色調は灰色で、胎土に石英・長石粒子を少量含む。165は小形の杯身1/3片。復元口径8.8cm、器高2.9cmを測る。外底部ヘラ削り、その他は横ナデ。色調は暗灰色、胎土に石英・長石細粒を少々含む。166も杯身1/3片で、復元口径9.6cmを測る。口縁と体部の境に一条の沈線を巡る。外底はヘラ切り未調整、その他は横ナデ。外底にヘラ記号が入る。色調は明灰色、胎土に石英・長石細粒をやや含む。焼成はやや不良。167～169は須恵器壺。167は東壁拡張区出土。口縁部1/6片で、復元口径15.8cmを測る。口端部断面は丸味を帯びた断面三角形を呈す。器壁は磨滅が著しい。色調は暗灰色を呈し、胎土は精良。瓦質の焼き。168も1/6片で、復元口径19.6cmを測る。口縁端部に浅い凹線が入る。口縁部内外面は横ナデ、内面口唇部沿いに自然釉が部分的にかかる。色調は灰色、胎土は石英・長石細粒を含む。169は奈良時代の長頸壺底部1/2片。復元高台径10.4cmを測る。外底は回転ヘラ削りのちナデ。その他はナデ。ろくろ回転は時計回り。色調は外面で黒灰～灰色、胎土は石英・長石細粒を少量含む。170・171は高杯脚部片。169は土師器で、脚部上半が細くしまる器形。内外面ナデ。色調は明橙色を呈し、胎土は精良。171は須恵器で、脚部に4段の沈線が巡る。内面にしぶり痕が残り、外面はナデ。色調は外面黒灰色を呈し、胎土は精良。172は須恵器の盤口縁1/10片。復元口径23.8cmを測る。外面横刷毛のちナデ、上半は丁寧なナデ。内面は横刷毛で口端部近くに斜めに平行する沈線状の刻みがある。色調は青灰色、胎土は精良。173は土師器の甕口縁部1/6片。復元口径28.4cmを測る。頸部のしまりは弱く、口縁が余り外折しない器形。胴部外面は粗い斜め刷毛、内面は縦ヘラ削り。色調は明褐～黒褐色、胎土は金雲母を多く含む。

174～216は土錘である（表2を参照）。形態はA類（174）とB類（175～216）に分かれる。B類の土錘は長さ4.7～9.4cm、重さ5～39.3gとややバラツキがある。形態的には遺構面出土のものとそう変わらない。調整は全体的に指おさえ仕上である。

217～220は石製品。217は砂岩製の長さ5.4cm、幅3.7cm、厚さ3cmの丸石で、全面ツルツルに磨かれている。色調は灰褐色を呈す。218は棒状の丸石をツルツルに磨いたもの。石質は砂岩で、長さ7.5cm、幅2.1cm、厚さ2.3cmを測る。219は石錘と思われる扁平な花崗岩の転石を用

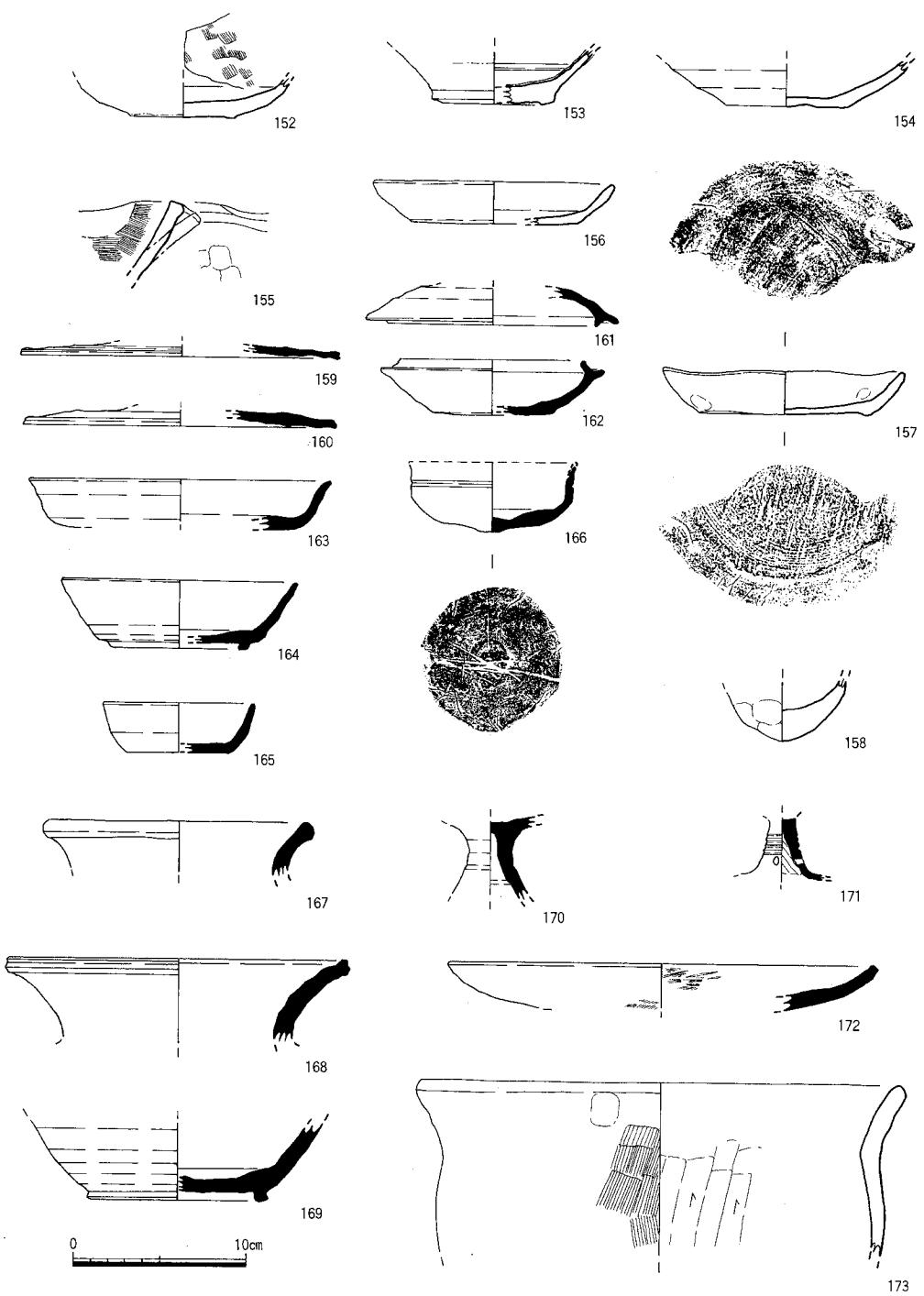


Fig.71 包含層出土遺物 1 (1 / 4)

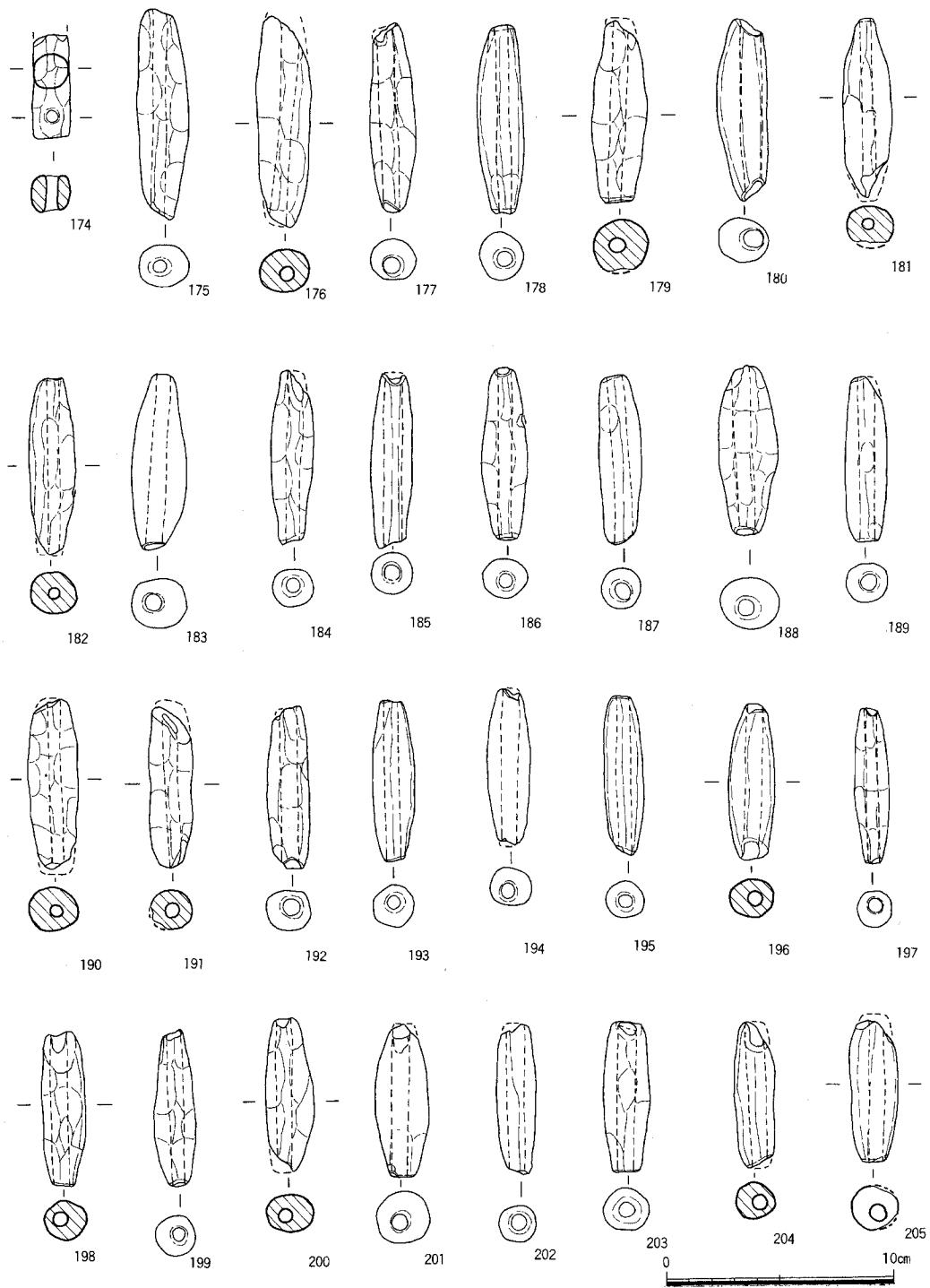


Fig.72 包含層出土遺物 2 (1 / 3)

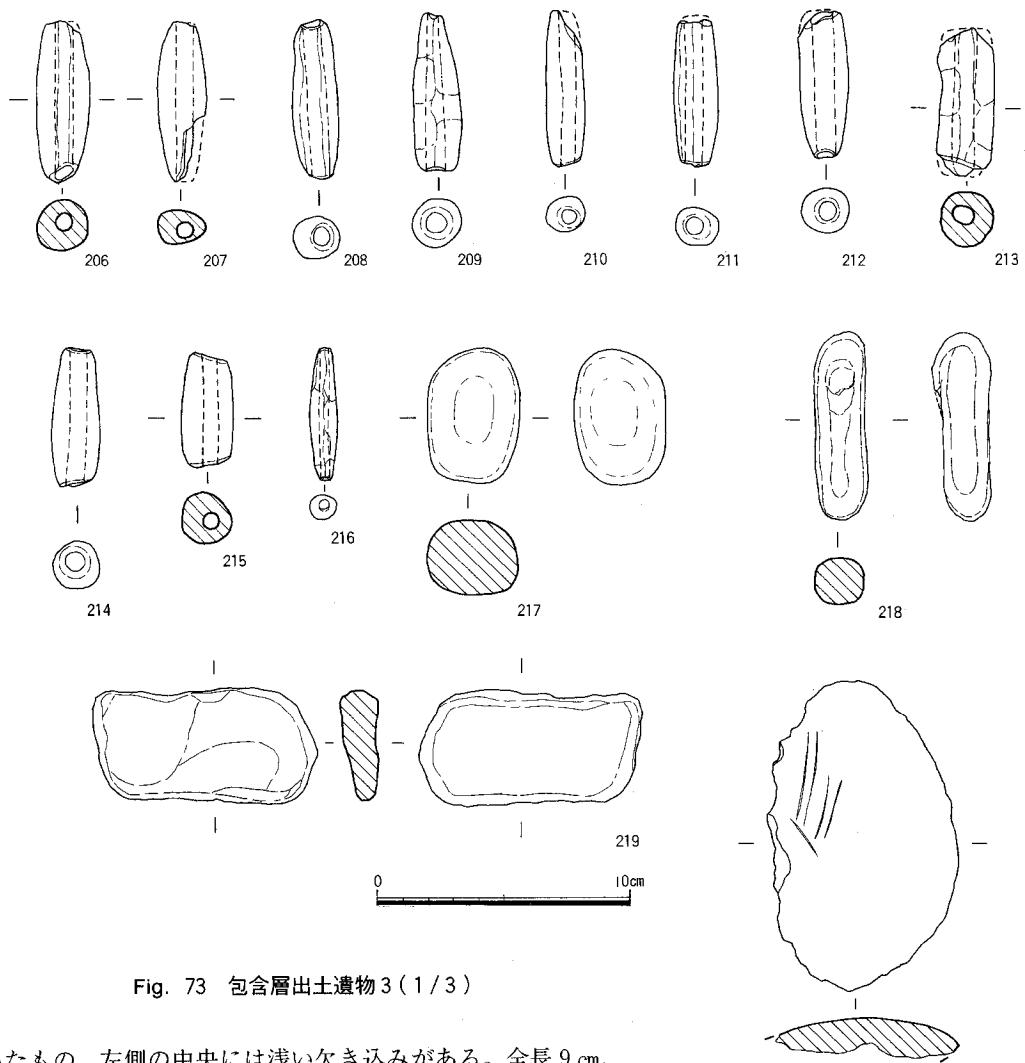


Fig. 73 包含層出土遺物3(1/3)

いたもの。左側の中央には浅い欠き込みがある。全長9cm、最大幅4.6cm、厚さ1.6cm、重さ100gを測る。220は玄武岩の円礫破片。表面はツルツルに磨かれ、細い線刻が入る。最大長12.5cm、幅7.3cmを測る。

(8) その他の遺構出土遺物

SX1013出土遺物 (Fig. 74)

第1面調査区中央東西はC～E区、南北は4～6区にかけて検出した埋土が黒褐色砂で、平面形が方形を呈すと思われるごく浅い落ち込み。プランとしては明確には南西コーナーしか確認していない。

221・223・224・226は管状土錐。221・224・226は紡錘形。223は円筒形の形態。法量は221が長さ8cm、重さ22.8g、223が長さ8cm、重さ47.3g。224は長さ7.8cm、重さ24.9g、226は長さ5.2g、重さ12.2gを測る。指おさえ仕上である。

表土・遺構面出土遺物

222は表土出土の紡錘形の管状土錐。長さ7.9cm、重さ19.7gを測る。225は遺構面出土。下端は欠失するが紡錘形を呈す。残存長5.8cm、重さ17.2gを測る。いずれも指おさえ仕上である。

4. 小 結

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期から中世にかけての時期のものである。遺構面としては3面で捉えた。上層の第1面が

奈良時代から中世13世紀代の遺構を含む面。第1面下ではほとんど中世の遺物は出てこないで、中世の遺構面はその上面の包含層として考えた部分にあるのかも知れない。第2面が奈良時代の面、第3面が古墳時代後期6世紀後半以降の面である。各面の遺構・遺物は調査概要で述べた通りである。以下2、3気付いた点についてふれる。

第一、当地周辺は藤崎遺跡群で最も調査がよく行われている地域である。今回発見された最も古い時期、古墳時代後期の時期では、住居は第6次地点・第9次地点・第15次地点・第18次地点で検出されている。大きく砂丘尾根上の第6次地点と南側斜面上の第9次・15次・18次・21次地点のグループに分かれそうである。それぞれ数棟単位の小集落があったのかも知れない。また、今回検出された2棟の掘立柱建物は遺物の出土が少ないので、時期は決定しがたいが、ほぼ奈良時代以前のものであり、竪穴住居と掘立柱建物・高床倉庫という関係が成り立つかも知れない。

第二、藤崎遺跡群は海浜に立地するという性格上、漁村的性格を持つ遺跡で、当然各地点から漁撈具などが遺物として出土している。各地点から出土した漁撈具遺物は表3のとおりである。面積・調査の粗密にもよるが、圧倒的な当地点周辺の第20次から第9次の範囲が多く、特に第21次地点が数量では突出している。以上の事から当地点周辺は特に漁村的性格が強い地点

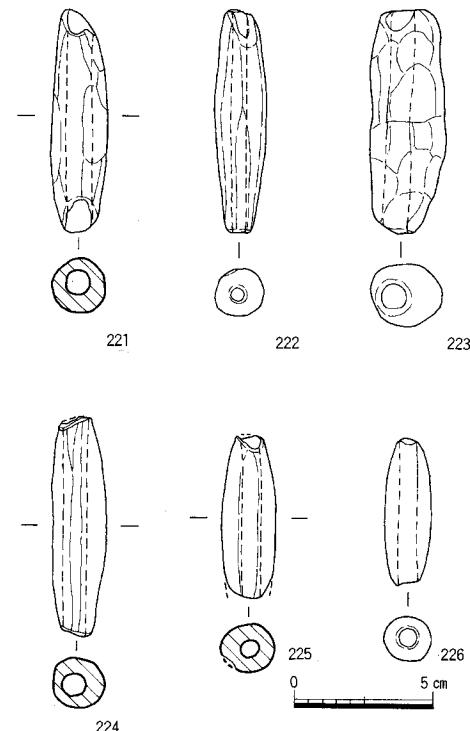


Fig. 74 その他の遺構出土遺物(1/3)

表2 出出土錘一覧表（番号は遺物番号）

番号	出土地点(層名)	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	番号	出土地点(層名)	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)
10	SK1002	7.1	1.9	0.7~0.8	21	142	D 4 区第1面下	6.1+ α	2.1	0.6	26+ α
11	SK1003	6.1	1.6	0.7	12	143	〃	6.0+ α	2.0	0.7	17+ α
12	SK1009	5.2	1.8	0.8	17	144	〃	5.9+ α	1.6	0.7	12+ α
13	〃	4.6	1.6	0.7	9+ α	145	A 5 区	4.8	2.0	0.7	20
14	SK1011	4.9+ α	2.0	0.7	17+ α	146	B 5 区第1面下	3.7+ α	1.5	0.8	8+ α
15	〃	5.1+ α	2.2	0.8	21+ α	174	包上層	4.6	1.6	0.4	18
33	SD1017	8.3	2.0	0.8	25	175	東抜張包下層	9.4	2.2	0.6	39
34	〃	7.5	2.0	0.6	30	176	〃	9.4+ α	2.3	0.6	37+ α
35	〃	7.5	2.0	0.8	27	177	包上層	8.4+ α	2.0	0.8	23+ α
36	SD1001	7.4	2.1	0.6	26	178	〃	8.4	2.1	0.7	27
37	〃	7.1+ α	2.1	0.8	25+ α	179	〃	8.1+ α	2.5	0.7	34+ α
38	SD1017	8.0+ α	2.3	0.8	33+ α	180	〃	8.1+ α	1.5	0.8	31+ α
39	〃	7.5+ α	2.0	0.8	28+ α	181	〃	7.9+ α	2.1	0.5	23+ α
40	〃	7.4+ α	2.2	0.8	23+ α	182	東抜張包上層	7.8+ α	2.0	0.5	24+ α
41	SD1001	7.2+ α	2.2	0.9	25+ α	183	包上層	7.8	2.4	0.7	34
42	〃	4.7+ α	2.3	0.9	28+ α	184	〃	7.2+ α	1.9	0.7	19+ α
43	〃	5.5+ α	2.0	0.7~0.8	17+ α	185	〃	7.7+ α	1.9	0.7	19+ α
44	〃	4.8+ α	1.4	0.8	8+ α	186	東抜張包下層	7.7	2.0	0.6	22
45	〃	4.9+ α	1.9	0.7	16+ α	187	包上層	7.6	1.8	0.8	19
46	〃	4.3+ α	1.8	0.7	13+ α	188	東抜張包下層	7.4+ α	2.6	0.7~0.8	39+ α
47	SD1010	6.5	1.9	0.7	19	189	包上層	7.3+ α	1.8	0.8	21+ α
48	SD1017	5.7+ α	1.7	0.8	15+ α	190	東抜張包上層	7.5+ α	2.2	0.6	34+ α
57	SC2005	4.1+ α	1.8	0.6	13+ α	191	〃	7.6+ α	1.8	0.6	24+ α
65	SK2004	7.1	1.8	0.7~0.8	19	192	包上層	7.2+ α	1.9	0.8	18+ α
74	SK3005	4.2+ α	2.0	0.7	13+ α	193	〃	7.2	1.9	0.6	20
97	SP3037	5.0+ α	1.6	0.8	9+ α	194	包含層	7.0+ α	1.9	0.7	15+ α
114	D 8 区第1面下	7.8	1.4	0.6	22	195	東抜張包下層	7.0	1.6	0.6~0.7	16
115	D 4 区	8.4	2.2	0.7	35	196	包上層	7.0+ α	1.9	0.6	20+ α
116	E 5 区	8.2	2.1	0.7	29	197	〃	6.9	1.6	0.6	13
117	B 9 区	8.1	1.9	0.8	21	198	〃	6.9+ α	1.9	0.7	21+ α
118	D 9 区	8.0+ α	2.5	0.9	47+ α	199	〃	6.9+ α	1.8	0.6	16+ α
119	E 5 区	8.1+ α	2.4	0.7	41+ α	200	〃	6.9+ α	2.1	0.6	19+ α
120	〃	8.0+ α	2.2	0.8	27+ α	201	〃	6.8+ α	2.4	0.7~0.8	32+ α
121	〃	7.9	2.3	0.8	27	202	〃	6.5+ α	1.7	0.8	14+ α
122	C 4 区	7.9+ α	2.2	0.7	26+ α	203	〃	6.7+ α	2.0	0.7	23+ α
123	E 4 区	7.9+ α	1.8	0.8	25+ α	204	包含層	6.6+ α	1.8	0.7	15+ α
124	E 5 区	7.8	2.2	0.9	33	205	〃	6.4+ α	2.0	0.7	23+ α
125	〃	7.8	2.0	0.8	26	206	包上層	6.5+ α	2.1	0.7	27+ α
126	〃	7.8	2.0	0.7	21	207	〃	6.4+ α	1.9	0.7	13+ α
127	〃	7.5+ α	2.4	1.0~1.1	29+ α	208	〃	6.3	1.9	0.7	16
128	〃	7.4	2.5	0.8	41	209	〃	6.3	2.0	0.8	21
129	〃	7.3+ α	2.0	1.0	20+ α	210	東抜張包下層	6.2+ α	1.6	0.6	12+ α
130	A 5 区	7.3+ α	2.4	0.7	38+ α	211	包上層	5.9+ α	1.9	0.7	15+ α
131	E 5 区	7.2+ α	2.1	0.7~0.8	25+ α	212	包含層	5.9+ α	1.9	0.8	18+ α
132	C 6 区	7.1	2.4	0.8	33+ α	213	包上層	5.9+ α	2.2	0.8	28+ α
133	C 4 . C 3 区第2面下	6.9	2.1	0.8	25	214	〃	5.6	1.9	0.8	20
134	E 5 区第1面下	7.0	1.8	0.8	17	215	東抜張包下層	4.7+ α	2.1	0.6	19+ α
135	C 9 区	6.8+ α	1.8	0.7	15+ α	216	包上層	5.4+ α	1.0	0.4	5+ α
136	C 4 区	7.0	2.0	0.7	21	221	SX1013	8.0+ α	2.0	0.9	23+ α
137	E 5 区	6.8+ α	2.0	0.8	27+ α	222	表土	7.9+ α	1.8	0.5	20+ α
138	〃	6.6+ α	2.0	0.6	19+ α	223	SX1013, D 5 区第1面下	8.0	2.6	0.9	47
139	D 5 区	6.4+ α	2.0	0.8	21+ α	224	E 6 区	7.8+ α	1.8	0.8	25+ α
140	C 4 . 3 区第2面下	6.3	2.1	0.8	23	225	第1面下遺構面	5.8+ α	1.9	0.6	17+ α
141	D 4 区第1面下	6.3+ α	2.1	0.6	20+ α	226	SX1013	5.2	1.7	0.7	12

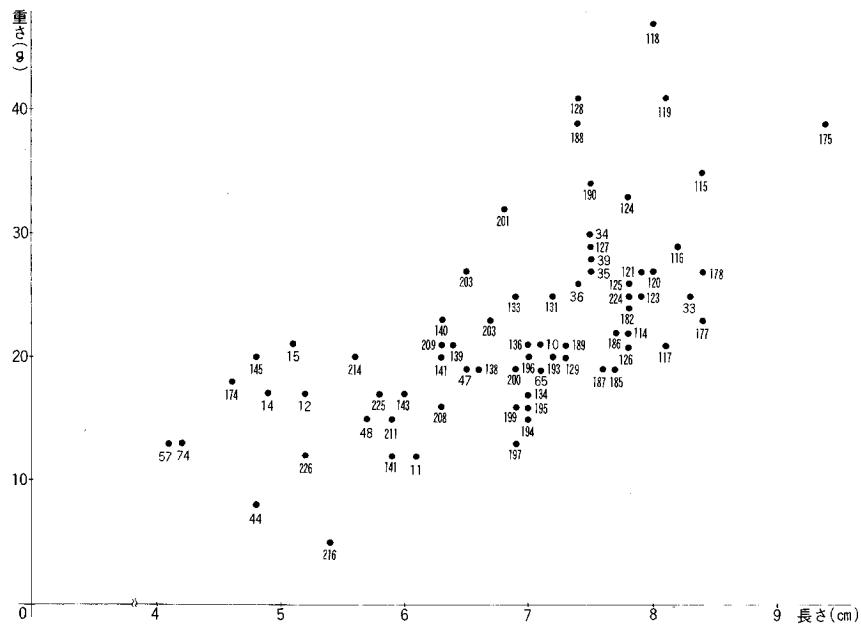


Fig. 75 土錘法量相關グラフ

表 3 藤崎遺跡各調査地点出土漁撈具一覧表

地点 種類	第 地	1 点	2 点	3 点	4 点	5 点	6 点	7 点	8 点	9 点	10 点	11 点	12 点	13 点	14 点	15 点	16 点	17 点	18 点	19 点	20 点	21 点
沈 子	土錘	2	0	0	0	18	0	13	2	0	0	9	0	29	12	3	8	0	38	108		
	石錘	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	2
浮 子		0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
蛸 壺		0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
調査面積		4,952 m ²	2,700 m ²	143m ²	101m ²	200m ²	302m ²	244m ²	300m ²	230m ²	300m ²	372m ²	102m ²	204m ²	70m ²	120m ²	66m ²	350m ²	185m ²	175m ²		

であると考える。土錘は包含層から第1面下の奈良時代の面からの出土が多く、その時期、網小屋のような作業小屋が当地点にあったかも知れない。遺構としては確認出来なかったが、土錘が特に多く出土した北半部では遺構面が、灰色粘土混じりの砂で比較的硬く締まっており、床面であった可能性がある。

第三、北側で検出した東西方向溝 SD1001は当地点では最も新しい時期のものであるが、この溝は北側の第15次・東川の第17・18次地点に続くものであり、方形に巡る屋敷の区割溝と考える。それに切られるSD1017は埋土の状況などから、それ以前のものである。この溝の延長は今のところ、確認出来ない。



Fig. 76 第1面 調査区全景(南から)

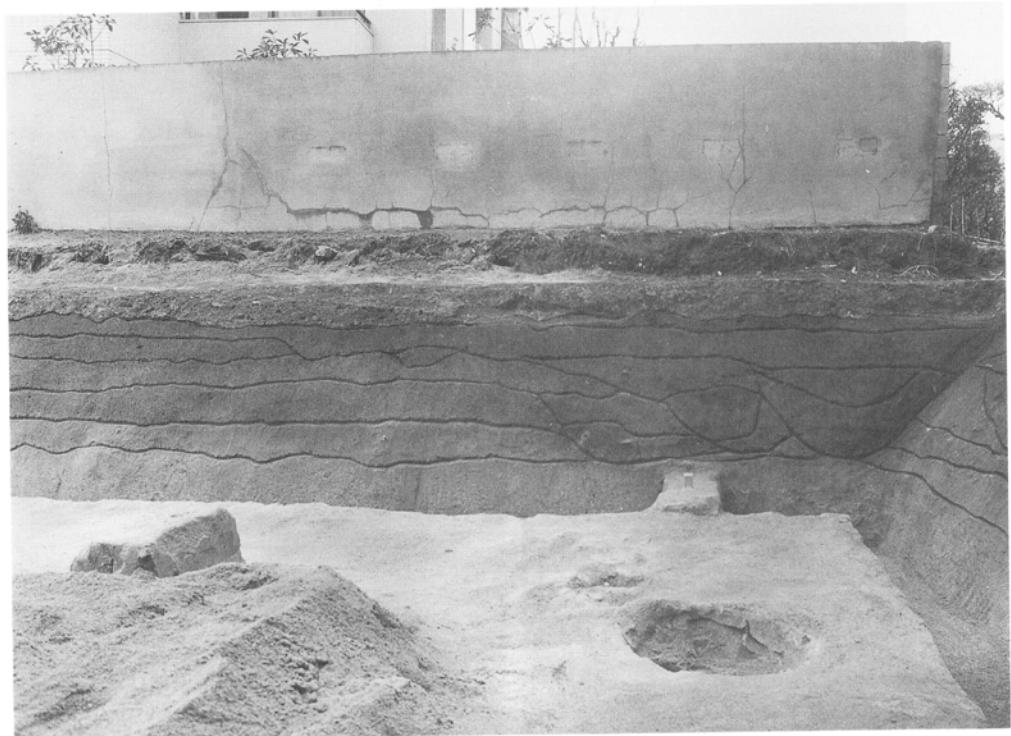


Fig. 77 調査区西壁土層(東から)

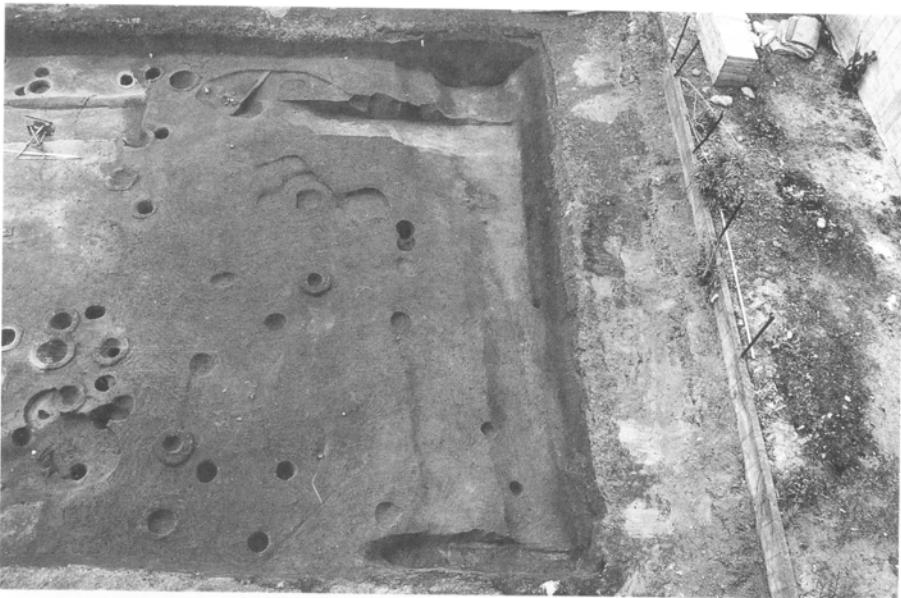


Fig. 78 SD1001・1017(東から)



Fig. 79 SK1011(南東から)

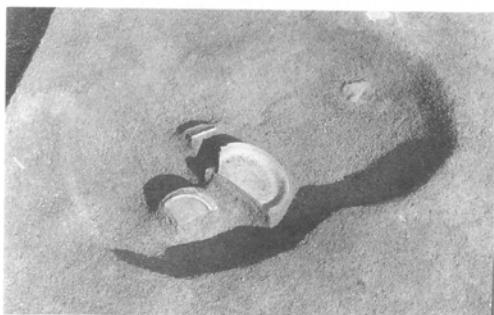


Fig. 80 SP1036遺物出土状況



Fig. 81 SP1011遺物出土状況(南東から)



Fig. 82 第2面 調査区全景(東から)



Fig. 83 SC2005(北西から)

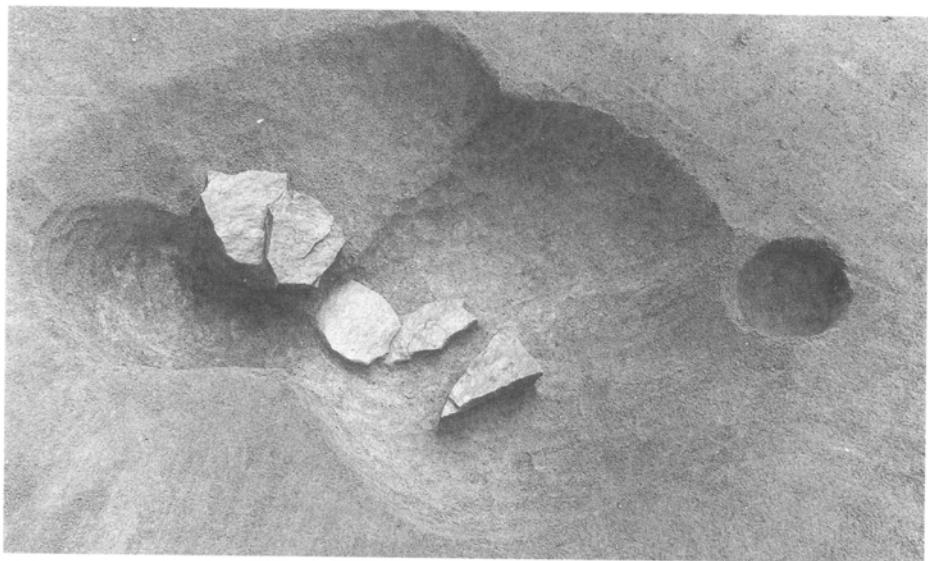


Fig. 84 SK2001(北から)



Fig. 85 SK2002(西から)

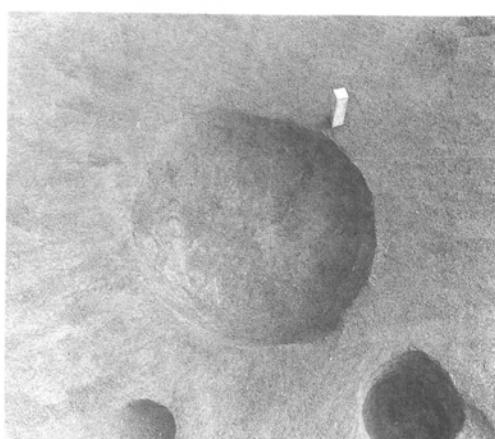


Fig. 86 SK2006(西から)

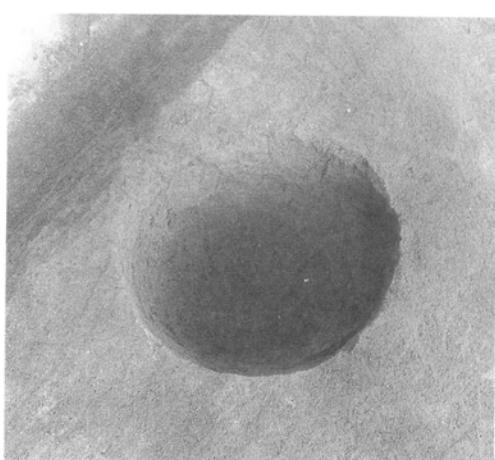


Fig.87 SK2004(西から)

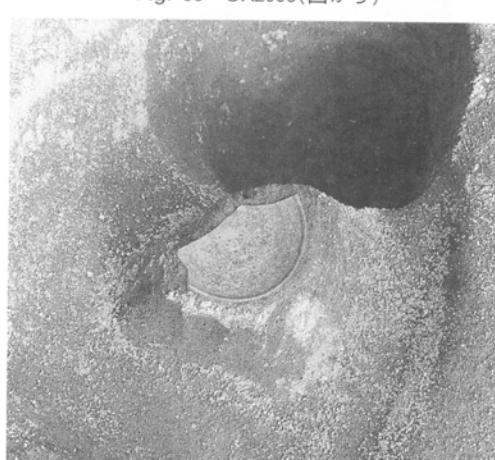


Fig.88 SP2002遺物出土状況

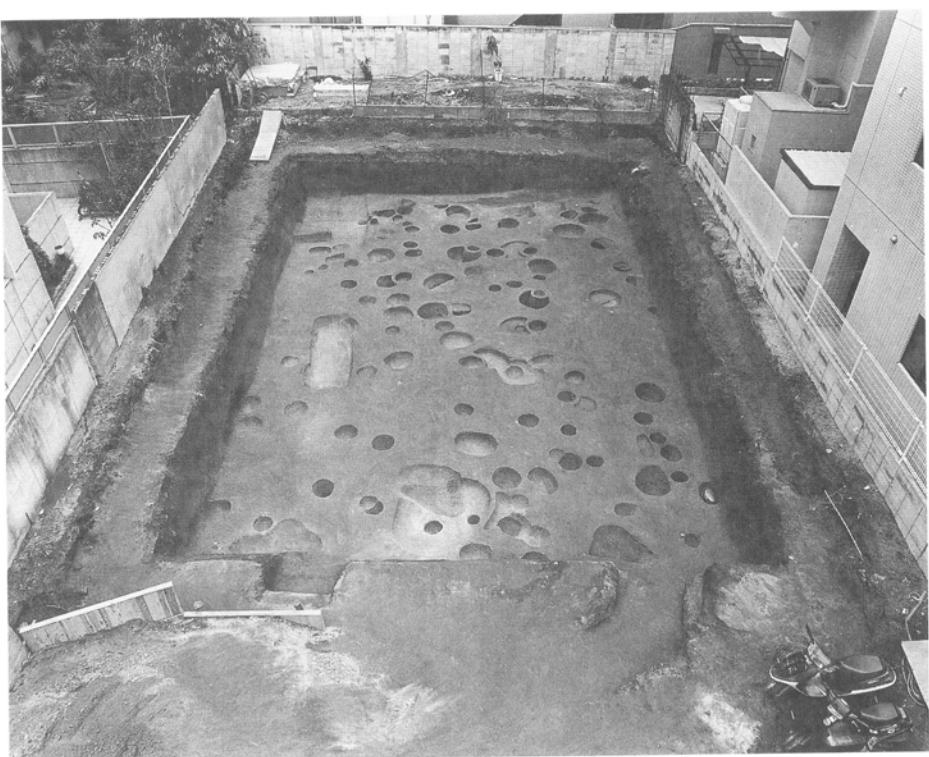


Fig. 89 第3面 調査区全景(南から)

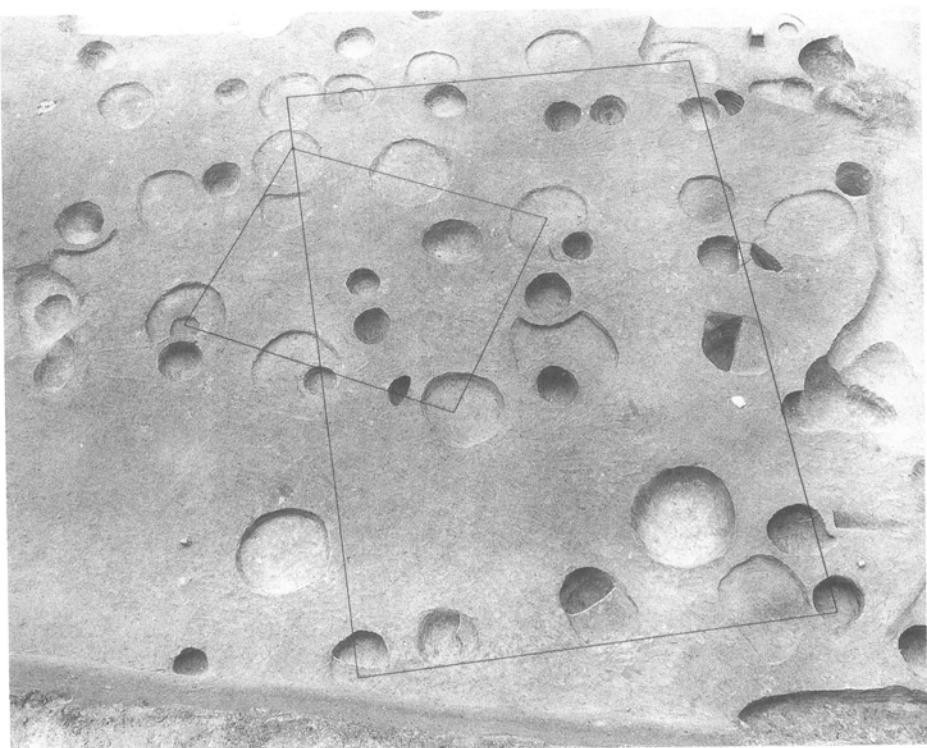


Fig. 90 SB3007・3008(東から)

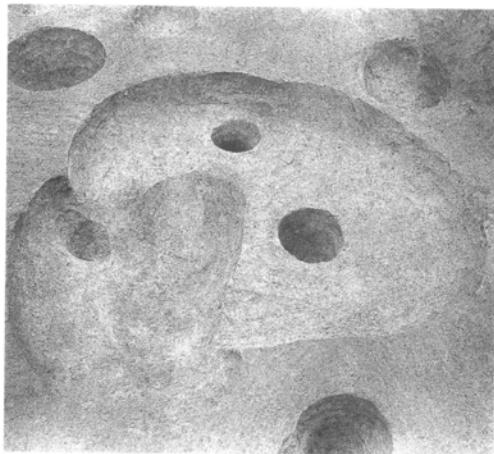


Fig. 91 SK3003(西から)



Fig. 92 SK3005(北から)

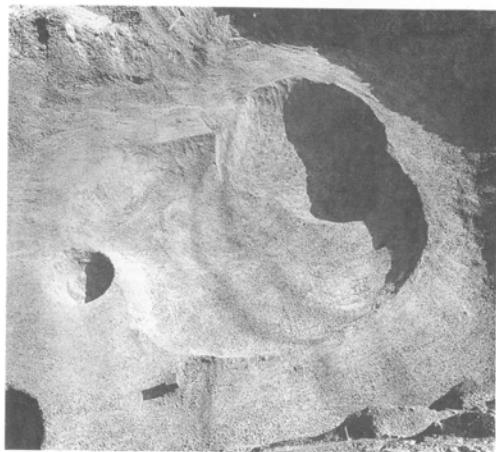


Fig. 93 SK3004・3011(西から)

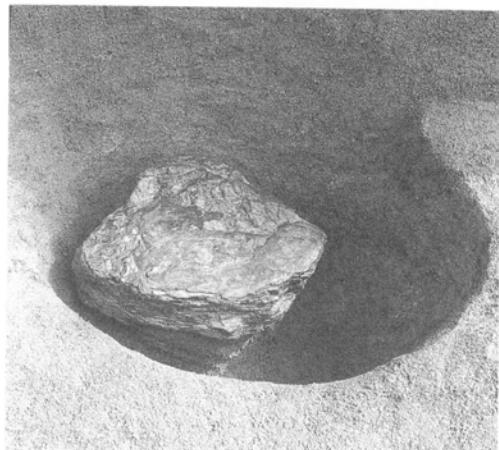


Fig. 94 SP3031(西から)

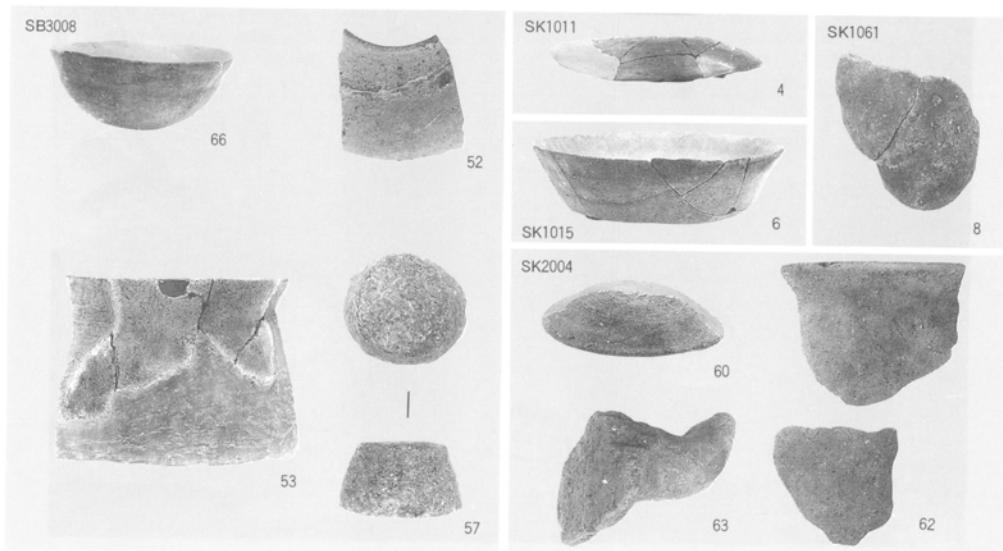


Fig. 95 住居址・土坑出土遺物

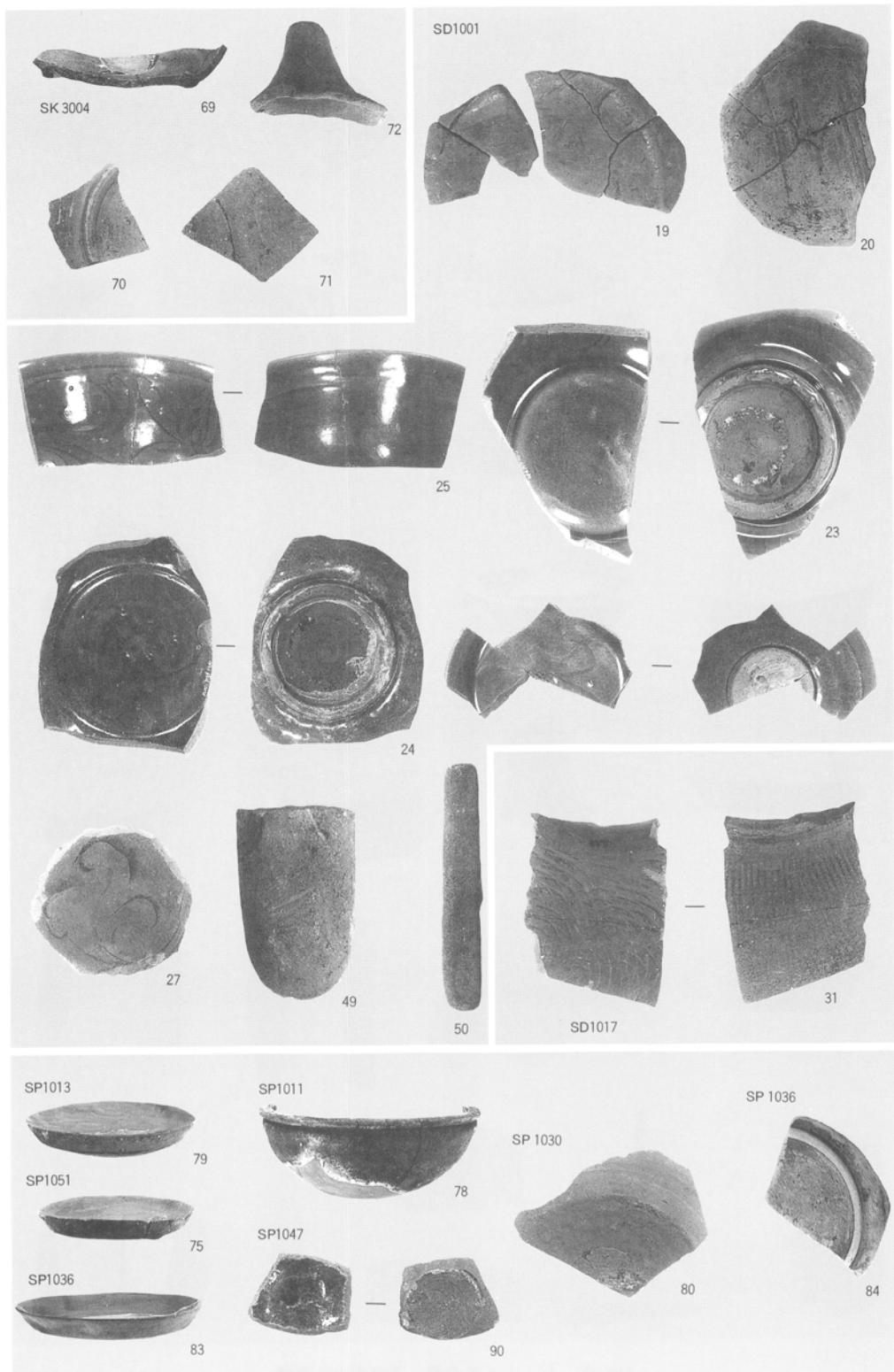


Fig. 96 土坑・溝・ピット出土遺物

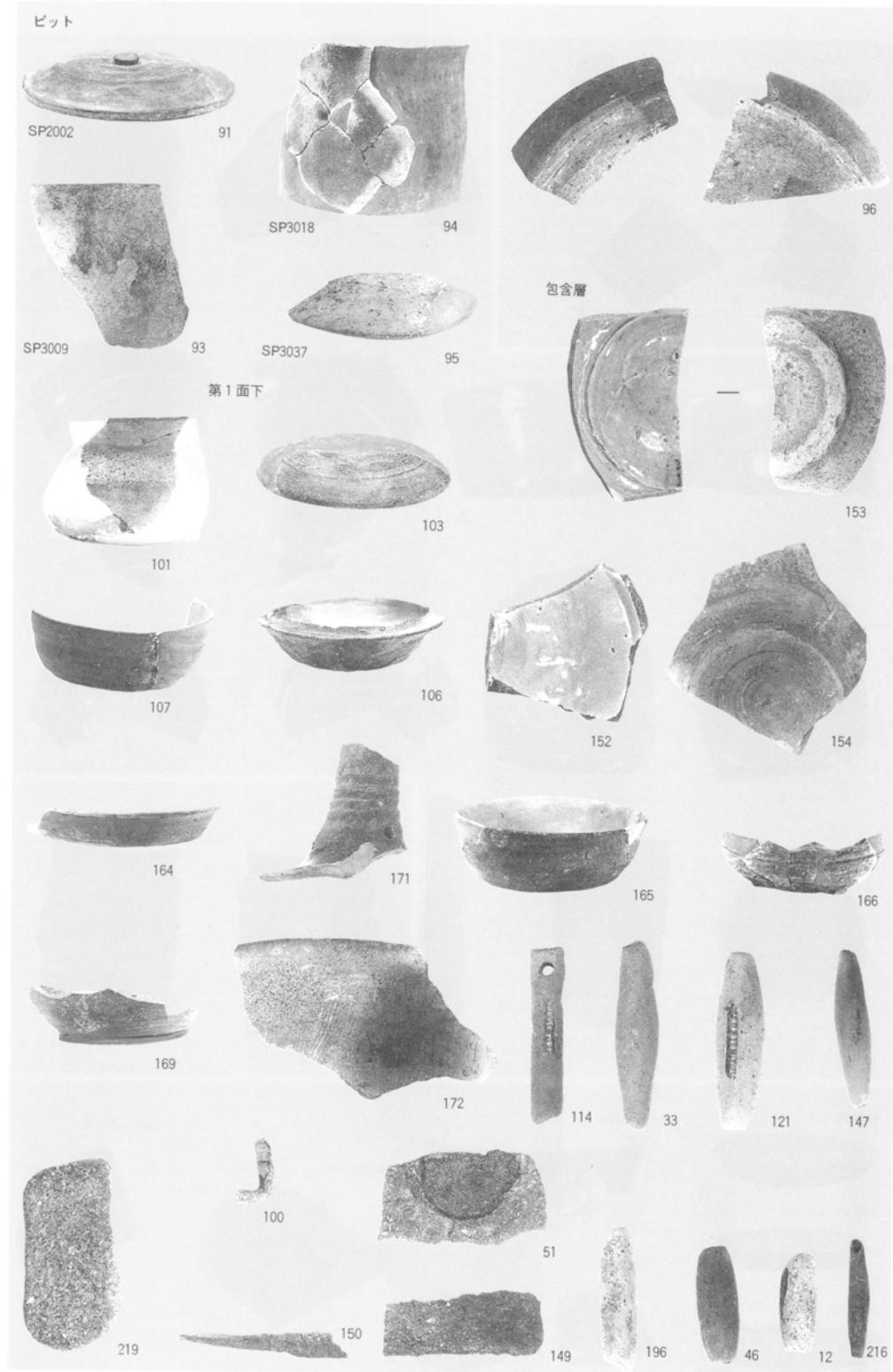


Fig. 97 ピット・包含層・遺構面出土遺物

藤崎遺跡 8

福岡市埋蔵文化財調査報告書第338集

1993年（平成5年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印 刷 株式会社ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1
(092)431-4061
